Promise

ナガス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｒｏｍｉｓｅ

【Ｎコード】
Ｎ７６７９Ｆ

【作者名】
ナガス

【あらすじ】
人は、辛いからと言って生きる事を諦めたりはしない。辛くてもがいて、もがいて、もがき続ける。死と直面しても、もしかしたら、もがき続けている。だってそこに、希望があるから。希望が存在し続ける限り、人は、生きようとする。希望が、人を生かす。それはおそらく、間違っていない。だけど俺は、希望と仲良くする事なんて、出来そうもない。

プロローグ（前書き）

淡く切ない恋愛小説……を期待している方は、今すぐブラウザのバックボタンを押してください。

この小説軸は確かに恋愛かも知れませんが、実はファンタジーです。実はＳＦです。実はミステリーです。実はホラーです。

つまり、普通じゃありません。

それでもいい。と仰ってくださるのなら、先に進んでくださいね。

プロローグ

プロローグ

彼女は見た目通りの、おとなしい女の子だった。黒い髪を腰まで伸ばし、前髪は綺麗に揃えられている。着ている服もそう安いものでは無いだろう、純白のワンピースをよく着ていた。
一見ピアノや華道でもやっていそうなほどに、その仕草や行動は上品だった。他の砂利共とはどこか違う彼女独特の雰囲気を常にまとっていた。
わずか八歳にして、彼女は女性として完成していたように思える。それほどに彼女は、美しい。
「ほらぁ、走っちゃ駄目だろ」
彼女の記憶をたどると、いつも最初に遊び場にしていた空き地を思い出す。
有刺鉄線で囲われている大きな大きな空き地。隅の方には土管が二本並んで放置されており、俺と彼女はいつもその中に入って談笑をしていた。
「ううん大丈夫だよ。なんだか今日は調子がいいの」
彼女は俺のほうへと向きなおし「早く早く」と屈託の無い笑顔で手招きをしながら促す。
俺は「まったく……」と呟き、彼女の背中を追い走り出した。

「やっぱり、土管の中は少し寒いね」
彼女はクスッと笑い、両手を擦らせて体を温めていた。袖の無いワンピースから伸びる腕は真っ白で、本当に冷たそうに見え、夏だと言うのに、彼女は震えている。
「……寒いんなら長袖とかあるだろ」
俺は彼女の震える腕を掴み、優しく擦る。

彼女の腕は少し力を込めただけで折れてしまうのでは無いかと思うほどに細かった。だから俺は、その腕を大事に、大事に、優しく擦った。

「だって……えへへ……」

彼女は恥ずかしそうに微笑んだ。微笑んで俺の目を見た。俺の目を見て顔を少し赤らめた。顔を少し赤らめさせて、もう一度照れくさそうに「えへへ」と笑う。

その様子を見て、多分俺は、顔全体を赤く染めていた。

あまりにも可愛くて、綺麗で、美しくて。そんな彼女が俺だけのために微笑んでくれているのが嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて。

「うん、そうだな。そうだよ……僕が暖めるからいいよな……」

「うん」

俺は幸せだった。彼女を独り占めに出来ているという事実から溢れてくる優越感や満足感。それらに毎日浸っていた。

ガキにしてはませているし、ありふれているクサイ台詞だとは思うが、このまま時が止まってほしいと、彼女と会う度に思っていた。感じていた。

1．ユキ

学校のチャイムはもはや俺にとって目覚まし時計以外の何物でも無くなっていた。俺を不機嫌にさせるためだけに存在している雑音としか感じない。

キーンコーンカーンコーンという機械音と共にざわめきだすクラスメイト達も俺を不機嫌にさせる。俺がその気になれば帰りのホームルームまで眠り続ける事が出来ると言うのに。

「昨日のドラマ見た？」

「昨日よ、うちのババァがキレてさぁ」

「やっべ地理の教科書わすれちまったよ」

「もうそろそろセンター試験だね」

「冬期講習の申し込みしておかないと」

教室のあちこちからくだらない内容の会話が聞こえてくる。頭の悪そうな奴らは昨日のテレビ番組の話や昨日の出来事の話題。頭がよさそうな奴らは試験や勉強の話題。

俺に言わせれば総じてくだらない話題。よくも毎日同じ事を話して飽きないものだなと感じるだけ。

俺はただただ眠たかった。ただただ眠たいだけなのだから、俺に迷惑をかけないようにもう少し静かにしてほしい。

俺は教室をグルッと一通り睨みつけてから、再び机へともたれ掛かり腕で顔を覆ってまた目を閉じた。

最近、やたらと眠たい。何故こんなにも眠たいのだろうか。自分でもどうかしていると思うほどに眠っている。

家に居る時の大半は眠っているし、学校に居る時も体育と飯の時間以外はほとんど眠っているような気がする。

そして眠る度に同じ夢を見る。

幼い時の俺と女の子が出てきているらしいが、これが過去にあっ

た事なのかどうかも解らない。覚えていない。
だけど最近やたらと見るこの夢の中の俺は、あの子と一緒に居るという事がそのまま俺の幸せらしい。どうやらこれは間違い無い。
だからというのも変な話だが、俺は出来るだけ目覚めたくない。なるべく夢の世界に入り浸っていたい。チャイムもクラスメイトも邪魔して欲しくない。そう思うようになっていた。
そのうち耳栓でも買おうかと、本気で考えている。

本日の授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。それと同時に再びざわめきだす教室。それらを目覚ましに不機嫌になりながら俺は顔を起こす。
どいつもこいつもが笑顔で、なんだか嫌な気分になる。
何故こうも嫌な気分になるのかというと、クラスメイト達に対する俺の評価は「家畜」だ。家畜がペチャクチャと理解できない言葉で交流を図ろうと演技をしている姿は、なんだか俺の神経を逆撫でる。
今日も笑顔を作りながらせわしなく帰り支度をしているクラスメイト達全員にむけて、俺は小さく「……家畜どもが」と呟く。
だけど俺のこの言葉に反応する人間は一人も居なく、誰も彼もが相変わらず笑顔で帰り支度を続けていた。
俺はざわめく教室に対して「はぁ」とため息をこぼし、ゆっくりと立ち上がり窓へと向かう。

空が高いと感じる。高くて、高くて、とてもじゃないけれど手は届きそうも無い。
空はいつも教えてくれる。冷静に、残酷に。俺がどれほどちっぽけな存在なのかを、教えてくれる。
だけど不思議と、空を眺めると心が落ち着く。俺はイライラすると空を見上げる事にしていた。
今日は天気が良い。日差しは弱いけれど十二月の中頃とは思えな

いほどに晴れ渡っていた。
「なんか、ごめんなさい」
俺は空に向かって謝った。心が虫よりも小さい自分が恥ずかしくて、ついつい謝ってしまった。
この空に向かってついつい謝ってしまう行為というものは、俺の中でもうすでに毎日の日課になってしまっている。それだけ、俺は成長していない。
このままじゃあ駄目だって解ってる。こんなんじゃあ生きていけないって解ってる。
「だけど」と言い訳する内は成長しないって事は解ってる。感情にしたがって生きるにせよ、怒りや妬みばかりを生み出しちゃいけないって事は解ってる。
「だけど」むかついてしまう。と思ってしまう。なんだかもう駄目なような気がする。
「はは」
俺はなんだか笑った。別に面白くもなんとも無いのに笑ってしまった。

「タダ君」
ふいに、後ろから声をかけられる。しかしいつもの事だから別に驚きもしない。
自分が呼ばれた事は解っているが返事はしない。俺はいつも二度呼ばれないと返事をしない事にしている。というより、俺とユキとのルールみたいなものだ。
「タダ君」
いつの間にか教室からは雑音が消えおり、ユキの声だけがこの教室の中の音を支配していた。
いや、支配と呼べるほど大きな声ではないが……この教室で俺が唯一雑音と感じない声だけに、その声は俺の耳によく響く。
「……何？」

俺はぶっきらぼうに返事を返した。その声には少し棘が混ざっているように感じ、内心「しまった」と呟く。
「……えっと」
「……いや、うん、解ってる」
俺はユキのほうへと振り返り、少し微笑みながらユキの頭をポンと叩く。
「……帰るか」

「今日は、えっと、お稽古ひとつも無いから」
帰り道、ユキは俺の隣を歩きながらかろうじて雑音に負けない程度の声をあげて俺に話しかけてくる。
本当にかろうじて、だ。車のエンジン音や周りを歩く下校途中の高校生の話し声にようやく負けないくらいの声。おそらく俺以外の人間には一切聴こえていないのでは無いかと思うほどの、声。
ボソボソと話している訳では無いのだが、ユキの声は慣れないと聞き取る事がむずかしい。
「あ～そっか。今日は金曜日か」
俺はユキの顔を見ずにそう答えた。前だけを見つめてただただなんとなく返事を返す。
「そうだね。えっと、だからね」
「気使わなくていいって。どうせハルがやってくれてるから」
そう言って俺はアクビをする。散々眠ったというのにどうやら俺はまだ眠り足りないらしい。
暖かい季節という訳でも無いのに、この眠気は一体どういう事なのかと、自分で自分にあきれ返る。
「あ、ううんそうじゃなくて……タダ君学校でいつも寝てるから勉強教えてあげようかなって」
「……それこそ要らない世話だっつの。別に進学する気なんて無いんだから」
俺はもう一度大きくアクビをした。本当にどうしたものか、眠く

て眠くて仕方が無い。
「なんで？　勿体無いよ。タダ君私なんかよりずっと頭良いのに、なんで勉強しなくなっちゃったの？」
俺は頭をガリガリと掻き毟った。
ユキは事ある毎に俺が勉強をしなくなった理由を聞いてくる。そのたびに俺は「別に理由は無い」と答えるのだが、どうやらユキは俺のこの言葉を信じてはいない。俺が「別に理由は無い」と答えるたびに小さく「嘘だよ」と呟く。
しかし本当に、俺自身に理由は無い。勉強をしなくなったきっかけはあるが、それは俺がどうこうでは無く、環境によるものだ。
だから俺はいつも「別に理由は無い」と答える。そして今日もそう答える。
「別に理由は無い」
「……嘘だよ」
「……一人暮らしするようになったからっていうのは？」
「理由になってないよ。それは理由じゃなくて言い訳」
俺は「だよな」と呟いて「言い訳がそのまま理由なんだけどな」と、ユキに聴こえないよう小さく言い訳した。

でかい家。うまい飯。高級外車。派手な暮らし。
金持ちというものを想像したら大抵がそういったものを連想してしまう。
まぁその大半は間違っては居ないのだが……ひとつだけ、想像していたものと違った事がある。
それは、自由が無い。飼いならされてしまうという事。
「ふぁ～あ……」
俺はユキの家の馬鹿でかい玄関の中にいた。馬鹿でかい玄関だというのに俺は隅っこのほうで壁にもたれかかりながら大きなアクビをもらす。
しかし本当に馬鹿でかい玄関である。この玄関だけで俺が暮らし

ているボロアパートの部屋ひとつがすっぽりと入ってしまうだろう。いや、天井は俺の部屋の倍以上高い。縦に部屋を積んだとしたら、二部屋は入りそうだ。

天井には良く解らないが高級そうなシャンデリアが二つもぶら下がっている。そして玄関を抜けた先にはこれも良く解らないがペルシャ絨毯なんてものもひかれている。

玄関から見える扉の数も、目の前にある太い階段の上も入れたら十は超えている。一体この家には何部屋あると言うのか。

何度来ても落ち着かないし、居心地も良くない。自分が場違いだと感じてしまい、実を言うと俺はこの家は玄関までしか足を踏み入れた事が無かった。

「正也(まさや)様、どうぞリビングにてお待ちくださいませ」

この家に雇われている三十代前半ほどの家政婦である奈緒(なお)さんは、俺がこの家の敷居をまたぐ度に同じ事を言ってくれる。本当に、一字一句間違いなく、同じ台詞を同じ声のトーンで。

「いえ、いいです。ここで待ってますから」

俺にはとてもじゃないが真似できそうもない。丁寧に、そして機械的に同じ事を繰り返すだなんて、耐えられない。

「そうですか……承知しました」

「……」

奈緒さんは一度俺にペコリとお辞儀をして、少し微笑んで「失礼します」と言い、俺に背を向けて一番奥のドアへと姿を消した。

奈緒さんは、ユキが小さい頃から……それこそ十年前からずっとこの家に仕えている家政婦さんだ。

留守にしがちなユキの両親の代わりにユキの面倒をみてくれている人で、ユキにとっては二人目のお母さんのような存在らしい。

……いや、むしろ……

「タダ君、おまたせ」

ユキが着替えを済ませて大きな階段を少し小走りで駆け下りてくる。綺麗で高そうな洋服とは裏腹に、少し安そうと感じさせる白い

カバンを肩からかけていた。
「……あぁ……あ、別に待ってない」
「あぁって言った」
「……言ってない」
ユキは黒いローファーの靴を履きながらニコッと笑う。そしてにやにやしながら隅っこに立っている俺を見つめた。
「あはっ、ごめんね、お待たせ」
そう言ったユキの言葉に、悲しみは感じられなかった。

俺とユキは、多分付き合っている。少なくとも俺は付き合っているような気になっている。
好きとも、愛してるとも、お互い口にした事は無いが、キスもセックスもした事は無いが、ユキとは友達の枠を超えて、仲がいい。
ユキは毎週金曜日には俺の部屋に来る。俺の妹である春香(はるか)と一緒に部屋の掃除をしてくれたり料理を作ってくれたりする。なんだか家族のように感じている。
「今日、ハルちゃんいるかな」
ユキは弾む声で俺の右隣を歩きながらにこやかに話をする。ユキにとってはこの金曜日こそが楽しみらしい。門限は六時半という、今時聞いたことも無いほどの短い自由時間ではあるが、ユキはこの日を毎週なによりも楽しみにしていた。
「……いるんじゃないかな」
「そっか。今日は何作るんだろうね。楽しみだね」
「さぁ……」
ユキは俺の気の無い返事を気にしていないようで、ニコニコしながら「楽しみだなぁ」と呟いていた。

ユキの家から歩いて数分、見慣れたボロアパートが見えてきた。
二階建てで壁のあちこちには亀裂がはいっており、今にも崩れていきそうな外観をしている。家賃は月二万五千円。そこの二階の角

部屋が俺の住んでいる部屋だ。
「いるかな？」
ユキは慣れた足取りで鉄製の骨組みしかないような階段を上る。カンカンという軽やかな足音が他に雑音の無いこの付近にやけに響く。
俺はいつもどおり、ユキの後ろをノソノソとついていく。自分の部屋だというのに、扉をあけるのはいつもユキだった。
いつもどおり、ユキは扉をあける。そしていつもどおりに「ハルちゃんいるぅ？」と、ユキにしては大きいと感じる声で部屋の中へと発した。
そしていつもどおり、部屋の中からピンク色のフリルのついたエプロンをつけたハルが足早に玄関へとかけよってくる。手には包丁が握られていた。
「あ、ユキさん～。来てくれたんだ。ありがとう～」
「うん。迷惑じゃなかったかな？」
「ううん全然。ユキさん手際よくてホント助かるよ～」
「……」
ハルの手に握られている包丁は、二人の目にはどうやら映っていないらしくそこに触れる事は一切無いまま当たり前のように二人は部屋の奥へと消えていく。
もしこの場に俺とユキのほかに誰かが居たら……とは、思わないのだろうか。
……まぁ、思わないんだろうな。その考えは間違じゃない。
ユキはカバンの中から黄色いエプロンを取り出し着用した。ハルのエプロンとは打って変わって、無駄に高そうな雰囲気を漂わせる。
「やっぱり可愛いなぁユキさんのエプロン」
「ん？　そうかなぁ、ハルちゃんのエプロンも手作り感が出ててあったかい感じがするよ」
ハルのエプロンはハルの自作であった。性格に似合わずハルは家

庭的で、料理はもちろん、掃除も裁縫も、家事と呼べる仕事の大半はハルの得意分野である。
「それで、今日は何を作るの？」
「今日はですね、ユキさん来ると思ってたからお鍋にしようかなって」
この二人は、仲が良い。こうして後ろ姿を見ていると本物の姉妹のように思える。
あれだ……ハルとユキ……本物の姉妹だったら良かったのに……いや姉妹じゃなくても、同級生だったらと、思う。
ハルの学校生活は良く解らないが、ユキは、少し悲惨だ。
ハルのような妹が居れば……同級生が居れば……少しは変わっていたのかも知れないと、思う。

ユキは、イジメをうけて……いた……？　いる？　それは本人の感じ方によるのだろうが、ともかく、沈静化してきた現状でも悲惨だ。クラス内はおろか、同学年の女子でユキと話をする人間は居ない。男友達と呼べる人間は俺と、今は学校を辞めてしまったがケイだけだ。
女子のするイジメというものは、本当に陰湿だ。ユキの持ち物を焼却炉で焼かれてしまったり、机の中にかびたパンをぎゅうぎゅうに入れられたり……と、直接本人に危害を加えず、陰湿でネチネチとしていた。
可愛いからなのか、家が金持ちだからなのか……イジメられた詳しい理由は解らない。それはユキ自身にも解らないらしい。
ハルと姉妹だったら……いやせめてハルと同級生だったら……ユキはきっとあそこまで……。

「もぉ～兄貴！　ごろごろしないで！　格好悪い！」
ぼーっと二人の後ろ姿を眺めていると突然ハルが振り返り怒鳴ってくる。

二人で仲良く料理でもしていればいいのに……と思い、少しムスッとした。
「んだよ……ちょっと眠いんだ……少し寝かしてくれ」
「はぁ～？　ユキさんがわざわざ来てくれてるのに眠るって言うの？　頭おかしいんじゃない？」
「……」
ハルは、俺に対してなんの遠慮もしない。言いたい事はズバズバと言うし、喧嘩をした時は遠慮なく横面をひっぱたいてきたりする。まぁ、これがハルの良い所と言えば良い所なのだが……
「あ……あはは。いいんだよハルちゃん。そんな気を使わなくても」
「駄目ですよユキさん。こういう所だけはシッカリしてもらわないとユキさんに失礼になってしまいます」
ハルは包丁を持ったまま腰に手を当てて俺を睨む。
「ほらぁ兄貴。何回も言わせないでよね。早く体起こして洗濯物でも畳んで」
「……わぁったよ……」
これ以上口論してもどうせ無駄。いや、運が悪ければ夕食にありつけなくなる事を俺は知っていた。
俺は重い腰を上げてしぶしぶ洗面所へと歩いていく。
「まったく……ユキさん、あんな男のどこがいいんですか？」
この部屋は狭い。妹は陰口のつもりで俺の事を話しているのだろうが、すぐ隣の洗面所で洗濯物を下ろしていた俺の所まで声は届いていた。
「ん……優しい所かな」
「……ふぅん。ま、否定はしませんけどねー。もっといい男いっぱい居ると思いますけど」
……。
否定はしないのか……。
なんだかんだ言ってハルはいい奴である。最後の一言は余計ではあるが、俺とユキの仲を手助けしてくれているのは事実だ。それに

毎日のように俺の部屋へやってきて家事全般をやっていってくれている。

面と向かって言うのは照れくさいが、心の中ではハルに感謝していた。

2．ケイ（前書き）

しばらく放置しちゃってすみません。
これからはまた毎日更新のペースでアップしていければなぁ～と思っております。

2. ケイ

夢の中の俺は、いつもあの子と一緒にいた。
夢の中のあの子はユキなのではないかと思った事もあるが、どうやらそれは違うらしい。詳しくは思い出せないが、夢の中であの子の名前を呼んだような気がする。そして呼んだ名前はユキではなかった。
夢の中の俺は、とても幼かった。まず自分の事を「僕」と呼んでいる。
俺が自分の事を「僕」と呼んでいたのはもう十年近くも昔の事。少なくとも、ユキと出会う前までは「僕」と呼んでいた。
つまり、夢の中の俺は七歳か、八歳。小学校二、三年といった所だろうか。
「どうしたの？　おなか、いたいの？」
彼女が話しかけてくる。眉毛をへの字に垂れ下げて俺のおでことお腹を同時になでてきた。
「え……？　何が？」
「何がって……元気ないみたいだったから」
「？　ううん、全然そんな事ないよ」
彼女は不思議そうな表情を作り、俺の顔をまじまじと覗き込んだ。綺麗な瞳で俺の顔をじぃっと見つめ続ける。
彼女が近づくと、シャンプーの良いニオイがしてきた。綺麗な彼女に良く似合う、何かの華の香りのように思えた。
その香りに、その瞳に、俺はドキドキしている……ようだ。
「な……なんでもないって……僕にしてみたら、〇〇のほうがおかしいよ」
今、なんて呼んだ？
今確かに名前を呼んだはずだ。聞き逃したというより、聴こえなかったというより……。

……雑音？　雑音に、聴こえた。
「え？　私？」
「う……うん……なんていうか……近い……」
……。
よく考えてみたらこの夢は、さっき見た夢の、続き……。
この夢はループしているんじゃなかったのか？　何度も何度も同じ夢を見ていたような気がしていたが……。
「ん？　んふふ……顔真っ赤にしちゃって……かわいいね」
……彼女は、より一層顔を近づける。幼いのに、まだ七歳やそこらのはずなのに。
その顔は、まるで。
まるで……。

慌てて目を覚ますと、部屋の明かりはつけっぱなしになっており、容易に時計を確認できた。時計は夜中の一時を回っている。
何故だろう、とても息が乱れている。息が苦しくて苦しくて、たまらなかった。
次に気づいた事は、寝汗がすごい。ボタボタと滴り落ちるほどに俺は汗をかいている。
真夏の昼間に眠っていたとしても、これほどの汗はかいた事が無い……。
何故だろう……何故こんなにも俺は……。
「はぁ……はぁ……」
夢……夢。
夢か。夢を見ていたから。
悪夢だったのだろうか、夢の内容は断片的にしか思い出せない。
俺自身の印象では、少なくともそんな要素は一切含まれて居ないように思える。
「……はぁ……はぁ……」
少しだけ落ち着いて気づいた事は、異様なほどの心音の大きさ。

ドクンドクンと大きな音を立てて乱れきっていた。
この状態はまるで、数キロを全速力で走った後のような……
走ったのか？　夢の中で？
それがとてもリアルに思えて、体がそう反応している……？
解らない。現状証拠を見る限りではそのように思えなくもないが……。
……そうじゃないような気がしてならない。

『はぁ？　何いってんのアンタ。人の夢の話聞いてるほど私暇じゃないんだけど』
俺はとてつもなく不安になりハルの携帯へと電話をかけていた。ユキはおそらくもう眠っているだろうし、ケイは携帯を持っていない。この二人の他に夢の話を出来るのは妹であるハルしか残っていなかった。
「……いや、夢の話っていうよりよ、起きた時の変な動悸や息切れが気になんだけど」
『だからさ、私そんな暇じゃないんだよね。今ホント手離せないし』
ハルの声は、とてつもなく冷たい印象を持たせて俺の耳に届いてくる。本当に今なにか手が離せない事をしているかのように思えた。
それでも、俺はハルに話を聞いてもらいたい。不安で不安で、今では何故かこの部屋の電気の届かない暗い場所すらも怖いと感じてしまっている。
今やっている事を放り投げてでも聞いて欲しい……と思っていたが……。
「そうか……解った」
俺は携帯の赤いボタンを押した。

明日は……休みか。ユキは一日中『お稽古』をする日だ。明日に限らず、明後日も。
ハルは……知らない。休みの日にあいつが何をしているのかは正

直全然知らない。ハルは平日にしかこの部屋にやってこないから、ユキ同様明日はこの部屋にやってこない。

「……」

小さい頃から友達は少なかったが……休みの日に遊ぶ相手が居ないなんて事は当たり前の事だったが……寂しい。

なんだか無性にケイに会いたい。

朝の七時。俺はケイの家電へと電話をかけていた。

あれからは一睡もしていない。目がさえていた訳では無いのだが、眠るという行為に少し不安を感じている。

夢自体はよく覚えていないのだが、起きた時のありえないほどの息切れ、汗、動悸……それらに多少恐怖していて、どうにも眠る気にはなれなかった。

「……」

受話器の向こうから聞こえてくるプルルルという機械音が俺を不安にさせる。機械音の間にある無音の時間が、やたらと長く感じる。

三回……四回……五回……プルルルが鳴っている。

「……あいつ、忙しいのか？」

俺は思わず声を漏らした。

……。

ケイ。本名は長谷川啓二。同じ中学出身だが仲良くなったのは高校に入学してからだった。それまではケイの噂を聞いた程度にしか知らない人物だったのだが、実際話してみるとかなり気さくで、明るくて、どこか頼もしい、良い奴だった。

そのケイの噂というのは……あまりいい噂では無い。だがケイという人物を知れば噂はやはり噂でしか無いな、と思わされる。

俺ともユキとも仲良くしてくれて、ユキにとっては数少ない自分を守ってくれる人間だった。

そんなケイが学校を辞めたのは、丁度半年前、あの事件が切欠で……。

『ブツッ……プップー……プー……プー……』
「え？」
突然呼び出し音が鳴り止んだかと思うと、すぐさま受話器を置かれたらしくプープーという音が聞こえてきた。
つまりは、一度受話器は上げたのだがすぐに元に戻したという事。
「……ケイ？」
俺は不審に思いながらも、再び発信履歴からケイの電話番号を選びかけなおす。リダイヤルの時に流れるプップップという音がまたやたらと長く感じる。
『プー……プー……プー……』
繋がったと思った瞬間に、プープープーが受話器から流れてきた。つまり話中か……受話器を外しているという事？
「……なんだよ」
なんなんだ？　何故電話に出ない？
……
ケイ。長谷川啓二。こいつの噂はこの辺りでは少し有名だ。
簡単に話すと、ケイは中学二年生の頃に姉を亡くしている。それも自分が眠っている部屋の隣で、首を吊って自殺をしていたらしい。
自殺をした理由はと言うと……姉はどうやら学校で爪弾き者にされていたらしく、携帯電話で投稿できる匿名掲示板にて名指しで罵倒されていたらしい。
学校での境遇は噂の中ではあまり詳しく説明されていないが、死ぬ一週間前から登校拒否状態だったという話だ。
それに対してキレたケイは復讐を誓い、学校にも滅多に顔を出さずに体を鍛え、一年後の姉の命日に姉の元クラスメイト男女含め七人と派手な喧嘩をやらかしたらしい。
噂ではだが、ケイはまさに圧勝。その後にかけつけた警官を二人ほど伸して逃亡した。その時にケイは「まだ終わりじゃない」と呟いていたそうだ。
その後の事は知らない。そもそも警察に捕まったというなら進学

校である俺と同じ高校に通えるはずは無いと思う。それも同い年で。
「……」
今は持ち前の体力を活かし、土建屋でアルバイトをして暮らしていると言っていたが……。
いやまさか……とは思ってみるものの、完全に否定は出来ない。
ケイが、何かトラブルに巻き込まれたという妄想……。
「まさかなぁ……」
まだ眠たくて、五月蝿い受話器を外しただけなのかも知れない。
今日は土曜日で休みの日だ。きっとケイも昼まで眠っていたい気分なんだろう。
「……」
とは思ってみるものの、なんだか釈然としない。やはり何かが引っかかっている。
スッキリしない気分のまま、俺はジーパンに財布をねじ込んで、外に出た。

家にいても特にこれと言ってやる事が無いので、フラッと気晴らしに目的も無く外に出てみた。
……実家に帰った所で、どうせハルは居ないだろうし親からは冷たい視線が送られてくるだけだ。
ユキに会いたくても今日は駄目だ。今日のユキはお茶とピアノと……あと何かの『お稽古』だ。
ゲームセンターに行くにしても、俺はあの雑踏が大嫌いだ。そもそもまだ七時半にもなっていないのでどこの店もまだ開店していない。
コンビニで立ち読みするにも、毎週読んでいる漫画とかも無い。すぐに飽きてしまう。
「……」
今の俺から『眠る』をとったら、これほどまでにやる事が無いとは思ってもみなかった。

フラフラと歩いていた。どこに行くでも無く、本当にただただフラフラと見慣れた住宅街を歩いていた。
時々思い出したように携帯を広げケイへ電話をかけようとしてみるが、やはり『プープー』という話中を知らせる電子音が聞こえてくるだけで、一向に繋がる気配がしない。

「……ふぁ……」
それにしても、よくアクビがでる。眠い。
暖かい訳でもなく、疲れている訳でも無い。それなのに眠気だけが否応無しに俺を襲ってくる。
耐えようと思えば恐らく耐えられると思うのだが、頭が多少痛くなってしまう。目蓋も重く、瞬きした時に気を抜くと閉じたまま開かなくなってしまいそうだ。
「……」
眠いは眠いが、起きる努力をすれば起きていられると思う。今のように散歩をしたり、誰かと話をしたり。今まではただ起きてなければならない理由が無かっただけ。
「……」
眠気に抵抗してみるのも悪くは無いとは思う。
思うのだが、正直に言うと好奇心もある。もう一度昨晩と同じ夢が見れると言うのなら、少し怖いがもう一度眠って色々と確かめてみたい。
「……」
と、思うが、一人で散歩をしながら起き続ける事には限界があるだろうし、寝て起きた時の酷い動悸や息切れに対して未だに恐怖している。
眠るにしても起き続けるにしても、誰か一緒に居て欲しい……もう一度ケイへと電話をかけてみるが、やはり話中で俺は「はぁ」とため息を漏らした。

フラフラと歩き続ける。ひと気の無い公園の遊歩道のような森林を、ただただ歩き続ける。
このまま草むらに前のめりに倒れて眠ってしまいたくなる衝動にかられる。なんだか体がもの凄くだるい。まるで魔法にでもかかったかのように「眠い」というより「倒れたい」と思ってしまっている。
疲れているとかじゃなく、俺の中の欲が「倒れる」という事を望んでいる。
……薄々気が着いていた事ではあるのだが、改めて考えてみると、おかしい。
常に眠気にさらされていて頭を働かせるような暇は無かったからか、今まで夢について、眠気について、あまり考えるような事はしていなかった。
しかしこのように覚醒状態が続くと、回らない頭でではあるが、考える事が出来る。そして考えてみたら、やはり、おかしい。
何故、眠ったら必ず夢を見る？　それもここ一ヶ月くらい同じような夢ばかりを。
いやそもそも。そもそも、何故こんなにも眠たい？　何か魔法にでもかけられたかのように眠たくて仕方が無い。
誰かに睡眠薬を盛られているとか、そういった事は絶対にない。そんな事をする意図がわからないし、同じような夢ばかりを見るという事に対しての説明がつかない。
「……」
しっかりと頭が回っていないのでこの仮説は突拍子も無く決め手にかけるのだが、俺は過去に何かトラウマを背負っているのでは無いかと思う。
夢に出てくる男の子。あれはおそらく幼い頃の俺で、女の子のほうは幼い頃の……恋人に近い存在？
小学生が言う「恋人」なんて、所詮稚拙な付き合いしかしていな

かったのだろうが、俺の中でそれが無意識に引っかかっていてあのような夢を見せている……。
俺がやたらと眠たいのは、無意識に、潜在的に、あの夢を見たいと思っているから。
そう考えると一応の辻褄は合う。辻褄は合うのだが、納得いかない。
何故、今なのか。昔からこのような症状に悩まされ続けていたり、幼い時からずっと夢の中のあの子が気になり続けていたのならまだ解る。
だけどこの眠気は最近急に出てきたもので、さらに夢の中のあの子の事なんて覚えてすらいない。
一体あの子は誰なのか……そして何故こんなにも同じ夢を見させ続けるのだろうか……。
回らない頭でこれ以上考えても思考がまとまらない。ここまで推測できただけでも大したものだと思う。
「……ぁ？」
はた……と、立ち止まった。目の前には相変わらず白い雪をわずかにかぶった木々が立ち並ぶ。
しかしその中に、さきほどまでは確かにそこに無かったものが見えている。「もの」と表現するのは失礼か……さきほどまでは確かに居なかった人が、目の前を歩いていた。
深い黒の髪を腰まで伸ばし、紺色のダッフルコートを着た大学生くらいの女性が、俺の数歩先をゆっくりと歩いている。彼女の左腕には犬の手綱が握られており、その先にはプードルだろうか、白い小型犬が足を懸命に動かして歩いていた。
……考え事をしながら歩いていたせいか、前を歩いていた人に追いついてしまったらしい。気付くのが遅れたらぶつかっていたのかも知れない。
「……」
俺は立ち止まった。追い越すのはなんだか違うような気がして、

その女性が遠くへ歩き去るのをただなんとなくじぃっと見つめていた。
……いや違うな。何故か、目が離せなかった。
……立ちながらは眠っていない。ボーっとしていた事は認めるが、眠ってはいない。
突然携帯電話の着信音が流れて体が飛び跳ねた。女性の背中に釘付けになっていた俺はもの凄く驚いた。でも眠ってはいない。女性の背中を眺めていただけ。
……と言った良く解らない言い訳を考えながら、もたつく手でポケットに入っている携帯電話を取り出し誰からの着信かを確かめた。
液晶に映りだされているその文字は「ケイアパート」。どうやらケイからの折り返しの電話が来たようだ。俺は何の気もなく普通に緑のボタンを押し、受話器を耳にあてた。
「もしもし」
『もしもし』
受話器の向こう側の声は俺の想像を裏切った。つまりその声の主はケイとは別人であった。
ケイの声も男にしてみたら少し高いと思わせる色を持っているが、この声は完全に男のそれでは無く、若い女性の、少し戸惑いを感じさせる、声。
「え……？　どちら様ですか？」
『……貴方は誰？』
……ん？
「いや、それはこっちの台詞だって」
『貴方から名乗ってくれたら私も名乗ります』
……なんだこの女は。
いきなりケイの電話番号で俺に電話をかけてきたくせに、相手が誰だかもわかっていなかったと言うのか……？
「……俺は、ケイの友人で正也ってもんです。それで、貴方は？」

『え！？』
受話器の向こうの女性は一瞬大きな声を上げたかと思うと、しばらく沈黙する。
どうやら少し困惑しているらしく、受話器のマイクを手でおさえるザザッという音が聞こえてきた。
「……あの。あのぉ！」
俺は大きな声で電話の向こう側の女に話しかける。それが漏れ出て聞こえていたのか、すぐさまもう一度ザザッという音が鳴り『ごめんなさい』という声が聞こえてくる。
「こっちは名乗ったんだ。そっちも名乗ってくれないと」
『私は、啓二の姉の長谷川さとみと申します』
時が、固まった。

ケイが行方不明だ。いやまぁ、ただ数時間アパートに居ないというだけで大袈裟にするのはおかしいが、とりあえず現在アパートには居ないらしい。
昨晩までは確かに家にいたらしい。そして受話器を外しておいたのは、ほぼ間違い無くケイ自身だそうだ。その事を考えたら今朝までケイはアパートに居たはず。
ケイのお姉さんも電話が繋がらないという事で不審を抱き、ケイのアパートへと向かったらしい。
そして俺も今、言い方はアレだが、暇なので向かっている。受話器を上げた行為というものが確かに少し引っかかって気になる。異常と言い切れはしないが、変である。
……それにしてもケイの奴、自分に友達が居るという事はお姉さんに話していなかったらしい。
ケイは中学時代の噂のせいで友達が全然居なかった。本人自身もそういった繋がりは嫌いだったらしく自ら友人を作ろうともしなかった。だからケイは卒業式すら欠席をしていた。
そんなケイの電話のリダイヤルを押したら友人である俺が出たの

だ。お姉さんとしてもかなりの驚きだったらしい。
……しかし、噂というものは本当にあてにならないものだなと、痛感した。
ケイのお姉さんは今でもしっかりと生きていた。それに元気でハキハキとしており、とても死んだ人間を連想させられるほどおどろおどろしい声には聞こえなかった。幽霊とかを信じている訳では無いが、ケイの姉という単語を聞いた途端に背筋が冷たくなったのは確かである。もしケイのお姉さんが暗い人で、なおかつ低い声をしていたとしたら、俺はすぐさま電話を切って電源を落としていたかも知れない。
「……あれだな。綺麗な声だったな」
そんな事を考えながら、俺は少し早足でケイの部屋へと急いでいた。
いつの間にか、眠気はどこかにいってしまっていた。

ケイのお姉さんから電話を貰ってから四十分後、俺はケイが住んでいるアパートへと到着した。ケイのアパートも俺のアパートと大差なくボロボロで、錆びた色の屋根をしているし壁には黒スプレーで落書きまでされている。それにどうやらこのアパートには駐車場スペースすら無く、不法駐車をしている車がちらほらと見受けられた。環境で言うと俺の住んでいるアパートより酷いような気がする。
そんな子汚いアパートの二階の角部屋の前で、とても小柄でスリムで奇麗な女性が手すりに肘をついてどこか遠くを眺めていた。このアパートには似つかわしくない、華やかな女性だった。
派手な格好をしているという訳では無いが、その女性自身が何かオーラを発しているような……正直な話、今まで世界一綺麗だと思っていたユキを超えているように思えた。
「……ウッソだろ……あれが？」
二階の角部屋。部屋の位置は俺が住んでいる場所と同じ条件の部屋にケイは住んでいる。その部屋の前で、その女性は立っていた。

少しだけ不機嫌そうな表情をしてアクビなんかをしているが、その姿すらも絵になっている。
彼女が立っているその辺一帯だけがまるで別の次元になっているような、とてつもないほどの存在感だ。言いすぎかも知れないが、まるで生き仏をみているのでは無いかと思うほどの神々しさを感じる。
「えぇ~……何あれ……」
俺は彼女を眺めたまま、一歩も動けないでいた。

違う。違う違う。眠ってない。立ちながら眠れるほど器用では無い。
ボーっとしていた事は確かだが、決して意識は途絶えていない。
「……ん？　おーいそこの君、君が正也君？」
彼女が俺に気が着いて話しかけてくるまで俺は立ち尽くしていた事は認める。けど決して眠ってなんかいない。と、訳の解らない言い訳を頭の中で考えていた。
「あ……はいそうです」
「おっそいよも～……すぐ来るって言ってたのに」
彼女はわざとらしく怒ったような表情を作ったが、すぐさま笑顔になり「こっちこっち」と言いながら手招きをした。
俺はそんな彼女の笑顔にひきつけられるようにフラフラとアパートの階段を登りだす。
「どうも始めまして。啓二の姉のさとみです」
さとみさんはそう言い笑顔で右手を前に出す。
……今時居ないぞ、初対面の人間に握手を求めるなんて人……なんて事を考えながらも、いつの間にか俺も右手を差し出していた。
「あ……どうも始めまして。正也です」
さとみさんは俺の右手をぎゅぅ～っと強く握った。なんだか知らないけれど、満面の笑みを浮かべている。
いや、笑みじゃない。心からの笑顔とでも表現すればいいのだろ

うか。笑顔の見本のような笑顔だった。
「正也くんね、普段なんて呼ばれてるの？　まさちゃん？」
「え……？　あ、そうですね、タダくんとか、ケイからはタダっちとか、ですかね」
「あ～あ～いいね。マサヤのマサをタダって読んでタダっちか。いいねそれ。さすが」
何がさすがなのか良く解らないが、さとみさんはそう言った後、しばらく俺の顔をじいっと見つめた。じいっと笑顔で見つめられている事がなんだかやけに恥ずかしくなり、俺は「あの」と切り出したのだが、さとみさんは俺の声を遮るように「とりあえず中に入ろうか」と切り出し、ケイの部屋の玄関をあけた。
「えぇ～……」
どうやら、かなりマイペースな人らしい。俺は言われるままにケイの部屋の中へと入っていった。

ケイの部屋の中は相変わらずゴチャゴチャしている。
まだ未成年だというのに部屋のあちこちにビールの空き缶や焼酎のビンなんかが転がっている。ケイは学生の頃もそうだった。臨時収入などがあると学生服のままコンビニに入りビールやら焼酎やらを買いあさっていた。
「うっわ……相変わらずきったねぇなぁ」
「でしょ～？　私も休みの日は子供つれて来るんだけど、大体は部屋の掃除で一日が終わっちゃうんだよねぇ」
「……え？」
……子供？
「お子さん、いらっしゃるのですか？」
「ん？　いるよ～一人だけどね。それ以来旦那が相手してくれなくってねぇ……もっと欲しいんだけど」
俺の頭の中では仰天やアンビリーバボー、ビックバンなる意味の解らない単語が次々と浮かんできていた。

こんなに美しい人が子持ち……年齢だって俺より少し上程度に見えるこの人がすでに誰かの妻……

子供を持つだなんてずっと遠い未来の事だと思っていた。それはうちの父親が一度離婚して数年後に熟年結婚をした事にも由来しているのかも知れないが、俺の頭の中は驚きで満ち溢れていた。

「……へぇ～……凄いっすね」

なんだか意味の解らない事を口走ってしまった。凄いって何だ。

「いやいやそんな事ないよ。それよりもけいちゃんだよ。タダっちわかるかな、この時期になったらけいちゃん毎年どこか行っちゃうでしょ？　学校休んだりしてなかった？」

タダっち……って。けいちゃん……って。

しっかりしているような雰囲気の人なのに、突然そんな呼び方をされるとは思ってもみなかった。なんだかユキと同じようなニオイがする……。

しかし、なんだって？　この時期毎年どこかに？

いや確かに、ケイと一緒にクリスマスを過ごしたり年始を迎えたりとかはした事が無い。まずケイとそういったイベントの話は一切した事が無かった。

だけどそれは俺とユキを気遣って参加しなかっただけの事だと思っていたのだが……。

「……学校は来てましたけどね、付き合いもこれと言って変わらなかったかも……」

「じゃあ、じゃあ十二月二十七日は？　二十七日にけいちゃんと一緒に遊んだ覚えってある？」

「二十七日ですか……いや学校も冬休みですし……夏休みならよく遊んだ記憶があるんですけど、冬休みはちょっと無いかもですね」

そういえばそうだ。ケイと一緒にスキーに行ったりワカサギ釣りにいったり雪合戦したり雪だるま作ったりした記憶が全然無い。思い出してみるといつも冬の記憶はユキとハルとハルの同級生のローって奴と、俺だ。

ケイはその間、何をしていた？
知らない。俺にはわからなかった。

学校で信頼できる人間はケイとユキ。まぁハルとローなんて奴も居るが、学校でいつもつるんでいたのは俺、ケイ、ユキの三人だった。学校では、そしてちょっとした放課後では、友達だの、親友だの……最近では戦友とも言い合っていた。

それなのに俺は、ケイの事を良くは知らなかった。知ろうともしていなかった。

……確かに例の噂の真相なんかを聞きたくは無かった。最初ケイに近づいたのは興味本位でその噂の真相を聞くためだったのだが、仲良くなるにつれて、噂の真相を聞く事なんて、とてもじゃないが出来なくなっていた。

ケイという、かけがえの無い友達を。素晴らしい人間を。手放してしまいそうな気がしたから。

だけど……もしかしたらケイは、本心では俺の事を親友だなんて思っていなかったのかも知れない。だって、噂の弁解も、真相も、一度だって口にした事は無かったのだから。

そして冬の間に姿をくらますなんて事も、俺は知らなかった。学校が始まって「久しぶり」と挨拶を交わして「何してた？」と聞いてケイの「ずっと寝てた」という言葉しか冬休みの思い出は聴いた事が無かった。

今朝だって。ケイは俺からの電話を無視するどころか、ウザいと感じ受話器をあげて外出している。

そして極めつけは、俺という友達が居るという事を、実の姉にすら話しては居なかったのだ。

きっとケイは……

「……なんか、すみません。俺じゃあ役に立てないみたいだから帰ります」

不思議なもので、眠気が一気に襲い掛かってきた。そしてその眠

気に屈服し眠ってしまいたくなってしまった。
なんだかもうあまり考えたくない。考えたらケイが友達じゃないような気がしてしまう。
数少ない友達が減っただなんて、考えたくない。もう眠ってしまいたい。
「ふぅん……いやさ、私が言うのも変な話なんだけどさ」
さとみさんはいつの間にかゴミ袋を手にしていた。そしてテキパキと部屋の方々に散乱しているゴミをしっかりと分別し、それぞれの袋にいれていた。
「諦めたり、考えることをやめたり、逃げてしまった後って、不思議なもので、必ず災難が待っているんだよね」
さとみさんは手を止める事無く、ずっと部屋の掃除をし続けている。実に丁寧にゴミを分別している。ティッシュの入り口についてるビニールなんかもちゃんとはがして分別している。初対面の人間に軽口で話していた人と同一人物だとは、とてもじゃないが思えない。
……いや違う、これは逆だ。彼女の持っている雰囲気と軽口。そこにギャップがありすぎたのだ。おそらく本来の彼女はこのようにしっかりした女性なのだろう。
「えっとさ、私タダっちの考えてる事、なんとなく解るんだ。急に元気なくなったでしょ？　謝ったでしょ？　不思議なもんでさ、落ち込んだ人って大抵そんな感じになるんだよね。私もそうだったし」
さとみさんは今度はビールの空き缶のリングプルを外して分別しだした。ここまで徹底している人というのは本当に稀な気がする。とてもとても細かい部分にまで気を使える人なんだろうなと思った。
「なんて言うのかなぁ……けいちゃんさ、いい奴じゃん。それも底なしに。自分なりの正義感を持ってて、それがまた強くて。私はよく知らないんだけど、学校を辞めた理由も正義を振りかざしたかららしいじゃない」
彼女は話し始めてから初めて手を止めて俺の目を見た。その顔に

は、笑みが溢れていた。
「だからさ、信じてあげて。けいちゃんは絶対に貴方を裏切ったりなんかしないから」
何故だろう。
今日初めて出会った女性の前なのに。
目頭が熱くなる。
「……はい」
そうだよ、ケイはさとみさんが言うように、底なしにいい奴だった。
最初のケイのイメージは、おっかないとか暗いとか、不良だとかって思っていた。だけど話をしてみるとなんて事はなく、明るいし、楽しいし、俺の自分勝手で一方的な相談なんかも笑顔で聞いてくれていた。
だけどやっぱり一番の出来事はあれだ……今年の九月、ユキの事で俺がクラスの連中にブチ切れた時、大暴れをする俺を止めるどころか、一緒になって、暴れてくれた。
そして全部の罪をケイが一人で被って、ケイだけが、退学処分となった。その際にケイが言っていたあの台詞、しっかりと覚えている。この台詞は生涯忘れてはいけないものだと思って俺はこの台詞を携帯電話の待ち受け画像にして張っていた。

「気にするなよ。僕は僕の正義に従っただけなんだから」

自分が恥ずかしくなる……そんなケイを疑ったりして。どうでもいい人間にたいして、そこまでしてくれる奴なんて居ないじゃないか。
ケイは、優しすぎるほど優しかった。いい奴すぎるほどいい奴だった。俺なんかには、もったいないほどの、友達だった。
「くっ……」
「あらら……泣かしちゃったか……」

さとみさんはゆっくりと俺に近づいてきて俺の顔を覗き込んだ。困った表情をしているが、その中にも少し笑顔が混ざっている。
小さい体で背伸びして、俺の頭を撫でてくれた。
「タダっちはいい奴なんだね。けいちゃんにタダっちみたいな友達が居て安心したな」
この姉弟は一体なんなんだ。いい奴ら過ぎる。

この部屋に来てから何時間たっただろうか。二人で掃除したから部屋はもうすっかりと綺麗になっている。
ゴミはしっかりと分別したし、掃除機も隅々までかけたし、もちろん雑巾がけもした。調子にのって壁や窓ガラスなんかも拭いてしまった。この部屋にもう汚れている場所は無い。
「ありがとうね、手伝ってくれて」
さとみさんはケイの洗濯物を部屋に干しながらコタツの中で温まっていた俺に話しかけてくる。
微笑んださとみさんは少し疲れたようで腰をトントンと叩いていた。若くて綺麗な顔には似合わないその行動が、なんだか笑いを誘う。
「いえ全然ですよ。それよりも、ケイ全然帰ってきませんね」
そう言って部屋に唯一ある時計を見つめた。時刻はもう午後六時を過ぎている。
「まったく……いつでも連絡がつくように携帯買えって言ってあるんだけどねぇ。めんどうだ～とか言って買わないんだよ。外をプラプラしてる暇があれば買いに行けばいいのに」
さとみさんは髪の毛を右手でわしゃわしゃとかき乱した。そしてすこしだけ不機嫌そうな表情で「何やってんだろうね」と呟いた。
俺はその様子を見て「はは」と少し笑ってみせる。
「さって……部屋の掃除手伝ってもらっちゃったし、私の手料理でも食べていく？」
再びさとみさんはニコッと笑う。どうやら全ての洗濯物を干し終わったらしく、捲くっていたトレーナーの袖を元に戻してゆっくり

とコタツにもぐりこんできた。
「あ、いえ。というか、さとみさん帰らなくても大丈夫なんですか？　今日はお子さん連れてきていないのでしょう？」
「ん？　ん～……」
さとみさんは俺が「お子さん」という言葉を使った瞬間、明らかに表情を曇らせていた。
ビックリした表情というのか、強張った表情というか、顔に影が出来たというか。さきほどの余裕がうかがえるような表情ではなくなっていたのがわかった。
「え？　俺何か変な事いいました？」
「ううんなんでも無いよ。でもそうだね、確かに気になるかな」
「……旦那さんも、心配しているのではないですかね？」
「……そうだね。なんかごめんね～余計な気使わせちゃったみたいで」
……なんだこの違和感は。さとみさんの事情に首突っ込んで詮索しようとは思わないが、子供の話題になった途端、さとみさんの様子が少しおかしくなってしまった。
本当にほんの少し。見逃してしまいそうな違和感なのだが、何かがおかしい。
「……」
「子供、実家にあずけっぱなしなんだよね。もう六時過ぎちゃってるし、引き取りにいかないと……ごめんね、今度ご馳走するから」
そういってさとみさんは立ち上がり、持ってきていたのであろうピンク色のトートバッグを手に持ち「タダっちはどうするの？　ここでけいちゃん待ってる？」とふってきた。
その表情は、もうすでに以前のさとみさんに戻っており、余裕を感じられる。
「あ～……そうですね。どうせだから待ってます」
「そっか。それじゃあまた今度ね。私料理得意なんだから。楽しみに待っててね」

さとみさんは平らにも近い胸をポンと叩き、満面の笑顔を作って俺に手を振った。
「じゃねっ」という言葉を残して、さとみさんはいそいそと玄関へと向かい、この部屋を後にする。
「……」
おそらくだけど、さとみさんは何かを隠していた。子供について、きっと何か言いたくない事があったんだと思う。
今日知り合ったばかりの俺が詮索するような事でも無いし、もし俺に何かを話してくれたとしても何が出来る訳でも無い。
だけど……知りたいと思った。あんな綺麗な人に、どんな秘密があるのか、知りたかった。
「……」
まぁ、今となっては後の祭りだ。追いかけてそれを聞くのも失礼だし、話してくれないだろうし。
俺は心の中で「頑張ってください」と、さとみさんに向けてエールを送った。

3．ケイ2

「怖がらなくたっていいんだよ。みんなみんな、やっていること」
彼女はそう言い、自分の顔を俺の顔へと近づけてきた。
彼女の冷たい掌が俺の火照った手と重なって、心地よい。
「え……でも……ちょっと待ってよ……」
彼女の顔はどんどんと近づいてくる。今ではもう、少し前に動いただけで額同士がくっつくほどに……唇同士がくっつくほどに……近い。
「私は待てない……もう待てないの」
彼女はそういい、俺の唇をやさしくゆっくりと、舐める。まるでソフトクリームを舐めるように、形が崩れないように、そっと、そっと、優しく舐める。
それだけで全身がビリビリした。今まで体験した事の無いような衝撃。快感。体の火照り。優しく舐めてくれたはずなのに……俺に与えた影響は計り知れなかった。
自分を支えている腕がガクガクと震えている。腰も抜けてしまい満足に体を動かす事すらままならない。
「今しておかないと、後悔する。私には、もう今しかないの」
彼女はそう言って、俺の胸に体を預ける。彼女の体にはまったく力が入っていないように感じるほど、全てを俺に預けている。
「私……正也君が好きなの……だから……」
俺は……
俺は、腕を……

「……っ！！　かはっ！！」
俺は飛び起きた。
「はっ！！　はっ！！　はっ！！」
異常なほどの動悸と息切れが俺を襲う。このまま心臓が破裂して

死んでしまうのでは……息が出来なくなって死んでしまうのでは……そんな事を連想させるほどに、苦しい。
「はっ！！　はっ！！　はっ！！」
辛い……頭が痛い……吐き気がする……
一体なんだというのだろう。この夢も、この体も。俺はどうなってしまったというのか……怖くて怖くて、仕方が無い。
「はっ……！！　はっ……！！　はぁっ……！！」
少しずつ、少しずつ息と整えていった。胸に手を当てて、高ぶっている心を抑えながら、深呼吸をするように、整えていった。
「はぁっ……はっ……」
何分かかったのだろう……ただ息を整えるだけで、動悸を抑えるだけで、一体俺は起きてから何分……
「タダっち」
ようやく落ち着いてきたと思っていた矢先に、背後から声をかけられた。その突然の出来事に思わず「うわっ！」と驚いてしまい、また脈が速くなる。
そして、それと同時に背後にいるであろう人物の顔を見る。そこには少し髭の生えているケイが缶ビールを持ちながら座っていた。
頭には黒いタオルを巻いており、上着は薄汚れたタンクトップしか着ていない。下半身はツナギを腰まで履いてそこで縛っているようだった。
体がムキムキなのは前からだが、髭は生えているし色は黒くなったし……まるで別人を見ているような気になってしまった。
「な……んだよケイか……驚かすなよな……」
「いや驚いたのはこっちだって。なんで僕の部屋にいんの？」
「あ？」
僕の部屋……？
辺りを見渡してみると、確かにここはケイの部屋の中。
そういえばそうか、俺は昨日さとみさんと一緒にこの部屋を掃除して、俺はこの部屋でケイが来るまで待っていると……そう言って

いた事を思い出した。
いつの間にか眠ってしまっていたらしい。時計を眺めてみるともう深夜の一時を過ぎていた。
「いや……お前が朝から行方不明だって言うからさ、受話器もあがったままだったし、おかしいって事になって……」
「……タダっち、もうちょっと頭整理してからでいいや。何言ってるのか全然わかんない」
ケイはそう言って立ち上がり「うーん」という声を漏らして体の間接をポキポキと慣らした。
「ちょっと風呂入るから。覗くなよ」
「……覗かねぇって」
ケイは「なんなら一緒に入る？」と言って笑いながら風呂場へと向かっていった。おそらく俺の返答なんか期待していないだろうから俺は何も言わずにただケイを見送った。

しかし、なんだと言うのだあの夢は……一体俺に何をしようというのか……
いつもながら夢の中の記憶はおぼろげだ。あの少女と俺が薄暗い土管の中に居て、俺があの少女の手をさすって……
なんだか彼女の顔が俺の顔のすぐ側まで近づいてきた所まではなんとか覚えているのだが、そこからがかなりおぼろげである。
何かをしたような、しなかったような……幸せだったような、怖かったような……
「……別に夢を見るだけなら、構わないんだよな……構わないんだけど……」
注目すべきは夢の内容では無い。目覚めると同時に起こる激しい息切れと動悸。加えると汗。
それらが尋常ではない。本当に死ぬんじゃないかと思うほどのものだ。
なんだか眠る事に恐怖する。昨日の深夜以上に怖い。

「……はやく上がれよケイ……」
俺はシャワーの流れる音がする風呂場を見つめて、そう呟いた。
「んで、話を聞かせてよ」
自分の体を自慢しているつもりなのか、腰にタオルを巻いただけの状態で俺の前にでんと座った。確かにケイの体には無駄が一切無く、どこをどう見ても只者の体をしていない。明らかに体を鍛えているのが分かった。
それはまぁ昔からなのだが、今のケイの体は黒く日焼けしており、その筋肉をより一層引き立てているように見える。正直言って、少し気持ち悪いくらいだ。
「……お前さ、昨日の朝俺が電話した時に受話器外してたろ。何かあったのか心配になってお前の部屋に来てみたんだよ。そしたらお前の姉ちゃんが居てさ、お前の帰りを待つついでに一緒にこの部屋の掃除してよ、ようやく終わったのが六時過ぎでお前の姉ちゃんはそれで帰っちゃって、俺はお前の帰りを待ってたって話だ」
俺はケイが風呂に入っている間にまとめておいた事を全て一気に話した。細かい所は省略したが大体はこんな感じだったと思う。
「お前さ、どこいってたの？」
俺がそう問いただすと、ケイは怪訝そうな表情を作り、髭の生えた自分の顎を撫でている。右手には缶ビールを持っていて「ん～？」という声を発しながら一口すすっていた。
「いや、ん～じゃなくてよ、どこ行ってたって聞いてるんだけど」
「いやそうじゃなくてさ、僕に姉ちゃんなんて居ないよ？　もう随分前に死んじゃってるもん」
……
「……は？　何言ってんだよ、長谷川さとみ。めっちゃ綺麗な姉ちゃんがいるじゃねぇか」
「いやいやホントに。騙してもいないし、とぼけてもいないよ。長谷川さとみはもう五年前に死んでるから」

……

「それに、言うほど綺麗でもなかったぞ、うちの姉貴」

……冗談だろ……？　それじゃあ昼間に俺と顔を合わせていたあの人は一体誰だと言うのだ……？

幽霊……？　馬鹿な……あんなにはっきりと見える幽霊なんて聞いた事が無い。それにあの人は俺に触れる事だって出来たんだ。そしてその手は間違いなく血の通った人間のそれであった。幽霊な訳が無い。

だったら、誰だ？　独特の雰囲気を持っていて近寄りがたいようなオーラを発しているにも関わらず、やけに明るく元気で人懐っこい、とても美人な、あの人は……

「……じゃあ、ケイには心当たりあるか？　すっごく美人だけど背はちっさくて胸もちっさくて……なんか表情にやたらと余裕のある女性……」

ケイは俺のこの言葉を聴いて、少し押し黙ってしまった。

難しい顔を作り、左手で髭をジョリジョリいじり、右手でビールの缶をベコベコいわせている。どうやらケイは何か知っているように思える。今考えている事は「どう言い繕うか」という事だろう。

「……あ～解った。それ僕の実家の隣に住んでるお姉さんじゃないかな」

ケイは正直である。基本的に嘘はつけない人間だ。滅多に嘘はつかないし、たとえついたとしても態度ですぐにバレてしまう。

今回も、まさにその通りだった。少し考えれば解ってしまうような幼稚な嘘を白々しくついてきた。

「お前……なんで隣の家の姉ちゃんがお前の部屋の鍵持ってて、お前のこのアパートの掃除してくれるんだよ」

「だよね」

ケイは少しバツが悪そうな顔をしてビールをちびりとすする。

「……いや、別にお前を責めてる訳でも無いし、この事に対して言及しようとしてる訳でも無いんだ。俺はただお前が昨日何してたか

気になるだけっつーか……」
何故だか俺も気まずくなる。話してくれないのはなんだか寂しいが……話したくないんだろう。無理に聞き出す事も違う気がする。
……だけど、親友だと思っている人間に対して『無理に』とか『聞き出す』とか『言及』とか……そんなものが存在している事自体、なんだか寂しい。
「昨日？　ジム行ったりしてたよ」
ケイはそう言って右腕を上に上げ力こぶを作って見せた。俺には以前とどう変わったのか分からないがケイは「どう？」と何度もしつこく聞いてくる。
その時のケイの顔と言ったら……まるで幼い少年が自分で捕まえたクワガタを自慢するかのような、キラキラした瞳をしていた。
「解った……解ったよすげぇよ」
「だしょ？　いや～調子いいよ。タダっちも一緒にどう？」
ケイはまた何度も「一緒にどう？　どう？」としつこく聞いてくる。キラキラした瞳で声を弾ませて。
いつもどおりのケイを見ていたら、心配していた事がなんだか馬鹿らしくなってきた。何度も「どう？」と聞いてくる事に対していちいち「いや、いい」と返事するのも、馬鹿らしくなってくる。
「いやホント、体鍛えるっていうのはいい事だよ。気が向いたら一緒にやろうよ」
「……気が向いたらな」
俺は適当に返事をしてコタツのテーブル部分に顎を乗せた。
……ケイはいい奴。それは解る。というか、そう思っている。明るいし、楽しいし、優しいし、頼りになる、ナイスガイ。
だけど、俺とケイの間にはまだ見えない壁のようなものが存在しているような気がしてならない。すぐにバレる嘘だが、ケイにとっては嘘をつく必要があるって事。
俺はまだ信用に足らない人間だろうか。相談とか秘密を共有するほど仲良くも無いのだろうか。

さとみさんは言っていた。「ケイは底なしにいい奴」「だから、信じてあげて」
俺はいいよ。ケイを信じる。ケイが底なしにいい奴だって知っているから。
だけどケイはどうだ？　俺を信用してくれてるか？　信じてくれてるか？　頼ってくれてるか？　とてもじゃないが、そうは思えない。
……ケイが、遠くに感じる。
「ケイよぅ」
俺はケイに話しかけた。少しだけ勇気を出して、言葉を発した。
「ん？　何？」
「お前、俺の事好きか？」
我ながら馬鹿な質問だと思う。
十七、十八の俺らにとっての「好き」は、大抵は異性に対して使う言葉であって、男同士で使うものではない。もしこの言葉を学校内で言ってしまえば、俺はたちどころにホモだのゲイだののレッテルを貼られて吊るし上げられるだろう。
……だけど、俺はケイを信頼している。馬鹿にはしないだろうと、声に出してみた。それでも多少の勇気は必要だった。
でも、言えた。ケイだから、言える。
「……うん、好き」
……。
「じゃあ、なんで電話した時に受話器を上げた？」
「……」
「俺だと思ってなかった？　いやぁ違うな。お前の家に電話をかける人間は俺か会社の人間くらい。あとはまぁ、偽さとみさんか。今日は休日だから俺か偽さとみさんの可能性が高かったはずだ。じゃあ何故、受話器を上げる必要があった？　俺か偽さとみさんと話がしたくなかったって事だよな」
「……だなぁ」

「はは」
俺は笑いを漏らした。ケイは本当に正直な人間だ。
「俺と偽さとみさんに話したくなかった理由。教えてくれないか？」
「話したくない理由を話したら、話したくない事を話すのと変わらないから、やっぱり話したくない。っていうのは駄目？」
「駄目」
「だよね」
ケイは「ははは」と軽く笑って見せた。ケイは俺の後ろに座っているのでどんな表情で笑っているのかはわからないが、その笑いはなんだか乾いた印象を俺に与える。
「冗談はさておき、話したくないっていうのはさ、僕の心情的に話したくないんじゃなくて、タダっちや……んまぁ、お姉さんに心配させたくないっていうのが理由なんだよね」
「心配って。体を鍛えるっていうのが心配に繋がるのか？」
「……だねぇ」
……なんだか、嫌な予感がする。
さっきとは違う意味で、ケイが遠くに感じる。
体を鍛える理由として挙げられるのがまず健康、自慢、スポーツ、それと、戦うため。
ケイはすでに健康のために鍛えるという枠を超えている。自慢をするためには充分すぎるほどの筋肉。昔は柔道と空手をやっていたようだが、現在はしていない。すると残るのは、戦い。
お姉さんがイジメの末に自殺して……一年後の命日に復讐して……そして命日とは、もしかしたらさとみさんが指摘した十二月二十七日で……。
「ケイ、何かと戦うのか？」
「……タダっちってあれだね。頭いいね」
ケイは普段どおりの明るい声でそう言ってのけた。いつもと変わらぬトーンで、冗談でも言い合うように元気に。
だけどおそらく冗談じゃない。根拠も理由も無いがこれだけは解

る。ケイは、誰かと戦う。
「あれか？　本当の姉ちゃんを殺された復讐か？」
俺はケイに背中を向けたまま話しかけていた。テーブルに顎を載せて、目線はどこを見るでもなく、ぼかしていた。
「噂の事を言ってるの？」
「あぁ……」
「噂は本当だよ。昼間のお姉さんに何を聞いたのか知らないけど、お姉さんが言ってた事は身分以外おそらく全部本当。二十七日は姉貴の命日で、僕は毎年その日に姉貴の元クラスメイトを闇討ちして回ってるんだ」
ケイは、明るい声で、いつもと変わらないトーンでそう言ってのけた。
「お前……んな怖い事普通に話すんだな」
少しだけ、ケイが怖くなった。普段と変わらない口調で淡々と自分の中の闇を話すなんて……それも普通の闇では無い。暴行事件を起しているという、普通では考えられないような事を、だ。
それに掘り下げると、ケイは自分のお姉さんが死んでいた事を隠していたし、昼間に会ったさとみを名乗る人間に対してもいまだに教えてくれない。今まで謎だった部分が解明されたかと思ったら、新たな謎がケイを包み隠す。
なんだか、そういった謎の部分も含めて、ケイが怖い。
「ほら、ほら。だから言いたくなかったんだよなぁ」
ケイはズズッとビールをすする。そしてビールの缶を握り、ベコベコと音を立たせて遊んでいた。
「引いたしょ？　僕の事を異常者だと思ったしょ？　タダっち頭いいからよりそう思うかも知れないね」
ケイは、明るい声で、いつもと変わらないトーンでそう言ってくる。
「詳しく話しても解ってくれないかも知れない。理解してくれないかも知れない。だから話せない。僕だって、タダっちに嫌われるの、

怖かったんだ」
俺はさとみさんの言葉を思い出していた。「底なしにいい奴」「信じてあげて」
そうなんだよな。その通りなんだ。
今年の九月、ユキの靴箱の中が糞尿にまみれていたあの時、俺はブチ切れて教室で大暴れをした。
男だろうが女だろうが関係なかった。当事者だろうが第三者だろうが関係なかった。手当たり次第にぶん殴り、蹴り、暴れまわった。
後から駆けつけたケイも、普段のケイからは想像も出来ないほどに憤怒していた。ケイの怒った時の表情は怖い。一見無表情のように見えるが目だけがギラギラと輝いていて、よく見るとケイのデコにはくっきりと青筋が走っている。
無言のまま教室に入ってきて、俺以上に暴れまわった。俺は押さえつけられて身動き出来なくなっていたのだが、ケイを押さえつけられる人間なんて勉強ばかりを教えているあの学校には一人だって存在しない。ケイは存分に暴れまわった。あの状況を表すなら地獄絵図という単語がもっとも適切だったろう。
止めに入った教師をもぶん殴り、踏みつけ、重症を負わせた。
……そうやってケイはわざと教師に重症を負わせ、全ての責任を背負ったのだ。俺のために、一生を棒にふるような……そんな行動を、平然とやってのけた。

「……いや、それはあれだろ。お前の中の正義に従ってるんだろ」
俺はテーブルから顔をあげて、ケイのほうへと振り返った。
ケイはいつものとぼけた顔をして、俺の顔を見る。
「俺は引いてない。少しビックリしただけだ。お前は正しいよ」
「はは。別に肯定して欲しい訳じゃないよ」
「じゃあ理解してやるよ。ケイを」
ケイは、別段表情を変えるような事はしなかった。いつも通りのにこやかな笑顔で俺を見つめていた。

動かない。ずっと動かない。笑顔を作ったまま、ずっとずっと動かない。
「俺じゃ不満か？」
「はは、不満なんかないよ」
ケイは少し俯いた。少し彫りの深いケイの顔に、影が出来る。

4．ハル

外に出ると太陽はすでに顔を出しており、それを見て初めて今がもう朝なんだという事に気が着いた。

携帯電話を開いて時間を確かめてみると丁度七時半になったばかり。

「んっ……がぁぁ～」

俺は朝日を浴びながらアクビ混じりの背伸びをする。空気はとても冷たかったがそれを苦と感じない。むしろ少し心地良く、眠い頭をスッキリとさせてくれる。

俺は凝り固まった首をコキコキ鳴らし「ふぅ」とひとつため息をつく。そしてケイの部屋に目線をうつし「じゃあな」小さく呟いてから、ゆっくりと歩き出した。

自分のアパートへと向かう道の途中、思い出す事はやはりケイの話。

ケイの話を聞き終えた時、俺は思わずケイに抱きついていた。ケイが背負っているものは俺の想像をはるかに超えており、それは現在でもケイを苦しめ続けている。

好きになった人間が目の前で刺され、その大切な人が生きるか死ぬかの瀬戸際にある時に、今度は姉が、イジメに耐え切れずに、自殺した。そんな事を体験した人間がマトモでいられる訳が無い。今でもケイは、苦しみ続けている。姉のクラスメイトに復讐をしていけば、自分がどんどんと正常に戻っていくと思い込んでいる。

……だけど、ケイは今年で最後だと言っていた。姉の元クラスメイト全員を標的に出来た訳では無いが、ケイには待たせている人が居る。待たせている人が居るのだから、不完全でも、不本意でも。終わらせねばならない。

「はは……」

待たせている相手というのが、昨日の昼間に出会ったお姉さん……本名が岩本彩子さんというのだから、驚きだ。まさかあんな綺麗なお姉さんに当時十四歳のケイが妊娠させたという事にも、また驚かされた。その点においては、少しだけ羨ましい。

俺はまだ童貞だ。セックスをするという事がなんだか俺の中では遠い世界の出来事のように感じている。ましてやユキとだなんて、夢のまた夢……。

「……あ」

そういえば、結局ケイには夢の事は話せず仕舞いだった事に今気が着いた。でも、とてもじゃないが話せない。ケイが体験した事に比べたら、俺の夢の話なんてちっぽけに感じてしまう。だってケイの話は、リアルだ。本当にあった話だ。俺の話は夢だ。比べ物にならない。

それにケイは、これからもの凄く忙しい。まず復讐をやり遂げなければならないし、彩子さんと結婚するための準備だってしなければならないだろう。そして結婚したらしたで、色々と忙しくなるだろう。

子供の事……親の事……世間体……今まで犯してきた罪の事……つまり総じて、責任。ケイの行く先に、光はあるのか……そう考えると話せない。ケイの邪魔はしたくない。

「……頑張れよ」

俺は小声で、空を見上げながら、エールを送った。

太陽は、弱い日差しではあるが、とてもとても綺麗に世界を輝かしている。

ケイのアパートから三十分ほど歩いた場所に俺のボロアパートがある。とても細い路地の中で、車の走る音もあまり聞こえてこない、静かな場所だ。

そこの二階の角部屋が俺の部屋。なるべく静かに階段を上ろうとするが、古い鉄の階段という事もあってどうしても音が鳴ってしま

う。静かな空間に響くこの音は部屋の中にいても誰かが歩いているのが分かってしまうほど。
ギチ……ミチ……という嫌な音を鳴らして階段がきしむ。
「……」
なんだかこの階段が怖い。いつかそのうち俺が上ってる最中に壊れて下に落ちてしまうのではないかと思ってしまう。
何度上ってみても慣れない嫌な階段だった。

自分の部屋に入ろうと鍵を取り出しまわす。しかし俺の手には鍵を開けた手ごたえはなく、すでに俺の部屋の鍵は開けられていた。
昨日外出した時に鍵をかけ忘れたのだろうか？　まぁ、たとえそうだとしてもこの部屋には盗まれて困るようなものは一切ない。別段気にせず俺は部屋のドアを開けた。
「ただいま」
俺は独り言のようにそう呟いて玄関を抜ける。スリッパ履きをしていた靴を脱ぎ捨ててアクビを漏らしながら部屋の奥へと進んでいった。
するとそこには、見慣れた顔の人間が眠っている。だらしなくヨダレを垂らしながら眠るその顔には、普段感じる嫌味さは無い。
「……あ？　何してんだ？」
俺は布団を敷かず毛布だけをかぶって床に寝転んでいるハルを見て、そう漏らした。
見逃していたハルの靴を確認する。玄関には隅っこのほうにハルが普段履いているローファーが綺麗に揃えられておいてあった。堂々と真ん中に置けばいいものを何故隅っこに置くのだろうか。お陰で気が付かなかった。
「……」
俺は少し考えた後、一昨日からシャワーを一度も浴びていない事を思い出し、とりあえずシャワーを浴びる事にした。何故ハルがここに居るかなどを考えても仕方が無い。ハルが起きたらハル本人か

ら直接理由を聞けば済むことだ。
俺はモタモタと服を脱ぎ捨て、ユニットバスの扉を開き、お湯の張っていない浴槽へと入ってシャワーのノズルを回した。

「ちょっと兄貴！　帰ってきてるなら起してよね！」
頭をゴシゴシと洗っている時にハルはユニットバスのドアをドンドンと叩いてきた。同時に聞こえてきた声はなんだか怒っている事をアピールするかのに聞こえてくる。
ハルはおそらく俺の事がちょっと嫌いなんだと思う。だらしなくていい加減な俺にきっと腹を立てている。多分今も俺が脱ぎ捨てた服を見てイライラしている。
ハルの性格はキツイがそういった部分は本当に生真面目だ。俺とは真逆でかなりシッカリしていて俺が少しでもだらしなくしていると眉毛をへの字にして怒り出す。
「あ～……わりぃわりぃ」
昔はよく口論なんかをしていたが、それは無益だという事に気付いて、最近はハルに対して口答えをしなくなっていた。「わかった」と「悪い」くらいしか言わなくなっている。
「それとなんで夜中家に居なかったのさ？　せっかく忙しい中来てやったって言うのに」
「……連絡しろよ。電話くらい出来るだろ」
「私がこの部屋に来たのだって夜中の一時過ぎだったんだもん。着いてから眠くなってそのまんま寝ちゃったのよ」
「そうかそうか。悪かったな」
俺は少しうんざりしていた。確かに電話をして話を聞いて欲しいと言ったのは俺のほうだが、まさか連絡もよこさず夜中にやってきて逆切れされるとは思ってもみなかった。
なんだかな……と感じる。ユキと一緒にいる時はあんなにも楽しそうなのに、俺と一緒にいる時はいつもこんな調子だ。落ち込んでいたユキを立ち直らせるのに協力してくれた事には感謝しているが、

俺への対応の悪さには正直酷いの一言だ。
「私本当に忙しいんだから。今日だって午後から用事があるのよ。話があるなら早くしてくれない？」
ここで「どんな用事なんだ？」と聞いてもどうせそっけなく「なんでもいいでしょ？」と返してくるのは目に見えている。こいつとは会話にならない。
「あぁ、分かった」
「それと、早く出てよね。私トイレ使いたい」
……。
「あぁ、分かった」

浴槽から上がり頭を拭きながら時計を眺めてみた。時刻は午前九時をまわっている。
俺は正直、話なんかしたくない。夢の話なんて正直どうでもよくなってきていた。ケイの話の前では俺の悩みなんてとんでもなくちっぽけだし、ケイの話のように面白くもない。
きっとハルも「何それ？」と言って勝手に怒りだしてイライラしながら「帰る」と言うのが目に見えている。
「んで？　どんな夢を見たって？」
ハルはずいぶんと長い時間トイレへと篭っていた。便秘なのかとも思ったがおそらく午後の用事のためなのだろう、ちゃっかりと髪型を直して軽く化粧をしていた。
普段ハルは家事をする時邪魔にならぬよう伸びた髪をツインテールにしているのだが、今日は肩まで伸びた髪の毛を垂らしてしっかりと手入れされていた。もしかしたらデートなのかも知れない。
「あぁ……子供の頃の俺が出てきて、誰だかわからない美少女と一緒に居るんだ。二人で遊んでるんだが、正直よく覚えてない」
「……は？　なにそれそんな夢が怖くて深夜に電話してきたって言うの？」
ハルは全くもって予想通りのリアクションをかえしてくる。少し

怒ったような顔をして俺の目を鋭く睨む。
「いや、それは別にいいんだけどさ、その夢を見て起きた時は大抵息切れしてるし、心臓がめっちゃ激しく動いてるんだよ。ついでに言うと汗も尋常じゃない量が出てる。それが昨日の深夜にあって、なんだか不安になってよ、悪かったな」
「ホント悪いわよ。それこそ電話で済むような話じゃない」
……いや、お前が勝手に俺の部屋にアポ無しで来ただけだろ。と言いたくなったが、ここで口論した所で何も始まらない。それこそ「明日からもう家事をしない」なんて言い出しかねない。
憎まれ事を言いたくなる衝動を必死におさえて、俺は「そうだな。悪かったよ」と覇気の無い声で呟いた。
「うん」
……。
「うん」ってなんだよ……ホントにコイツは……。
会話のし甲斐が全然無い。俺の話には食いつきもしないし、膨らませようともしない。この場合だったら「あ〜私もこの前変な夢見てさぁ」とか「ホントに？　兄貴大丈夫？」とかあるじゃないか。会話の終わりが「うん」ってなんだ。意味無く気まずくなる。
「くぁ……」
ハルも俺も喋らなくなってしまったので、俺はでっかく口をあけてアクビをした。なんだかハルと居ると疲れる。特にやる事も無いしもう眠ってしまいたくなった。
「眠いの？　っていうかだらしなく大口開かないで。格好悪い」
「……あぁ」
ハルは質問をしたいのか俺を責めたいのか……俺の「あぁ」もどっちに対しての「あぁ」なのか……ハルと居ると会話がグダグダだ。もう訳がわからない。
「お前もう帰れよ。俺これから寝るから」
「何よ……私邪魔？」
……。

「別に邪魔じゃない。けど俺は寝る」
俺はこの部屋にある唯一の小さい押入れから布団を取り出しフローリングの床に放り出した。埃が朝日に照らされてキラキラと光って見える。
そういえばこの布団はここに引越ししてから一度だって干した事が無い。もう三ヶ月になるだろうか、そろそろヤバイ。
「ここに居てもいいけど眠る邪魔だけはするなよ」
俺は布団に潜り込みながらハルの顔を見ずにそう告げた。ハルはハルで愛想が尽きたのか、無言のまま再びトイレへと入っていった。
……正直、ハルって何なんだろう……と思う。
漫画やアニメのような話だが、ハルは実の妹では無い。俺の親父が再婚した相手側の連れ子だ。
初めて会った時から俺と親父に対して愛想が悪く、しばらくの間、口すらきいてくれなかった。ようやくまともに会話をしたのは俺が中学三年になってすぐの頃。ユキが俺の家に遊びに来た際に「テレビゲームしません？」と俺……いや、ユキに話しかけてきたのがキッカケだ。今でこそ普通に会話をするようになったものの、高二の中頃までユキが間に入ってくれないとなかなかハルと会話をする機会なんて無かった。
その事からも分かるように、多分……いや絶対にハルは俺を嫌っている。
だけど不思議な事に、ハルは俺が一人暮らしを始めた初日から放課後毎日俺の部屋に来て家事なんかをやっていってくれる。土日祝日以外は本当に、毎日。
ハルって何なんだろう……最近は頻繁にそんな事を考えてしまっている。
「……」
じいっと、ハルが入ったトイレを眺めてみる。
ハルは、どれだけ待っても出てこなかった。

5．ハル2

「かっ……！　かはっ！」
またあの夢を見た。幼い少女が出てきて手を重ねて。彼女の顔がものすごく近づいて……そこまでは覚えているのだが、そこからを忘れてしまっている。
そしてその夢がどうでも良くなってしまうほどに胸が苦しい。息も苦しい。辛い。
俺は布団の上を転げ回った。胸が苦しくて掻き毟った。喉が痛くて掻き毟った。それでも一向に息が出来ない。苦しい。苦しい。
「はぁっ！　はぁっ！」
何度体験しても慣れない。毎回死を連想させられる。
霊やオカルトの類は信じていないのだが、俺が眠っている最中に幽霊が現れて俺の首でも絞めているのか……もしくは誰かに呪われてしまって藁人形でも打たれているのではないだろうか……という突拍子も無い事まで考えてしまう。
「はぁっ！　はっ！」
「兄貴？　え？　何それ」
「はっ！　はぁっ！」
「……え？　マジで？」
少し離れた場所から声が聞こえてくる。
ハルが戸惑っている時の声を初めて聞いた。いつもは棘のある印象しか持たせなかったその声は、なんて事は無い普通の女子高生の声そのものだった。
「ちょっと兄貴……落ち着きなよ。どうかしたの？」
「はぁっ……はぁっ……」
「兄貴怖いって……冗談やめてよ」
「はっ……はっ……はぁ……はぁ……」
俺はとりあえず小刻みに深呼吸をする。深呼吸をすれば息も吸え

るし心音も静かになる。
一回、二回、三回……と何度も何度も小さく深呼吸をした。
「はぁ……ふぅ……」
「兄貴……水持ってきた……飲んで」
ハルは顔を真っ青に染めながら割れないと言う理由で買ったアルミ製のコップに水を入れ持ってきてくれた。俺はそのコップを無言で受け取り、中に入っていた水を一気に飲み干す。
「はっ……はっ……」
空になったコップを乱暴に床へと置いたあと、俺はよろよろと立ち上がり、とりあえず洗面台へと向かった。なぜか足に力が入らず、フラフラと千鳥足になりながら、ようやくの思いで辿り着く。
鏡を覗いてみると、そこには酷い顔色の俺が、もの凄い量の汗を垂らしながら、恨めしそうな目でこっちを見ていた。見慣れているはずの自分の顔なのに、別の人間がそこにいるように思えて、怖い。
「……」
俺は水道の蛇口を最大までひねり、冷水で顔を洗った。冷たい水で洗うもんだから、正直言ってかなり痛い。それでも俺は何度も何度も顔を洗った。まるで憑き物を落とすかのように、何度も、何度も。
「……兄貴……ねぇ兄貴」
ハルの存在が俺のすぐ後ろに感じられた。何かを訴えかけてきているようにも思えるが、何故か声は遠くから聞こえてくる。聞き取りにくいから俺は無視して顔を洗い続けた。
「兄貴……兄貴……っ！」
何度も話しかけてくるが、声がまるで遠い。本当に俺に話しかけてきているのか怪しいので、俺は無視して顔を洗い続けた。
「やめてよ兄貴！　おかしいって！」
「邪魔くせぇんだよこの野郎！」
ハルは俺の肩を掴んで洗面台から引き離そうとした。その力を感じた瞬間、何故だか感情が高ぶり、ハルの腕を乱暴に振り払った。

すぐ後ろにあった壁に打ち付けられた瞬間のハルの顔は、もの凄くこわばっていた。まるで恐怖におびえる演技をしている女優のようにも見える。
「……」
「……」
俺はしばらくハルの目を睨みつけていたが、俺は顔を洗っていたという事を思い出し、再び冷水で顔を洗った。
「……どうしたのよ兄貴……」
俺は納得がいくまで顔を洗い続けた。何度も何度も冷水を顔にぶっかけていた。

俺はようやく落ち着いて、またフラフラと歩きながら敷いてある布団へと体を預けた。布団は思ったとおり俺の寝汗をたっぷりと吸い込んでいるので、かなり湿っている。普段なら不愉快になるので湿った布団になんか寝転がらないのだが、そんな事どうでも良いと思えるほどに俺は動きたくなかった。疲れている訳でも眠たい訳でもなく、ただ動きたくなかった。
「兄貴……腕痛いんだけど……」
ハルは少し困惑した表情で俺の目の前に腰を下ろした。おそらく俺に振り払われた腕なのだろう、右腕の肘をおさえている。
「……あぁ、悪かったな」
「うん……いいけど」
ハルは泣きそうな声を漏らしていた。普段のハルからはとてもじゃないが想像出来ないほど、か細い声。
……そういえばハルは、俺が起きてすぐの時、本気で心配してくれていた。声しか聞こえなかったがかなり困惑していたようで、必死に俺へと語りかけてくれていた。それに、水を持ってきてくれた。そのお陰で俺はだいぶ楽になった。
それなのに俺は「邪魔くせぇ」と……。
なんだか、申し訳ない気分だ。

「ハル……邪魔くせぇとか言って悪かったな……あれだ、俺も混乱してて よ」
「……兄貴さ、謝りすぎだって。イエスマンだし、沢山謝るし、良くないよ、それ」
ハルは俯きながらそう呟いた。ほんの少しだけ、悲しい印象を与える声に聞こえた。
「イエスマンって……お前俺がハイハイ言わないと怒るじゃん」
ハルは、より俯いてしまった。下からハルの顔を眺めている俺から見たら、ハルの表情もよく見える。
ハルの顔は、とてもとても、悲しそうな表情をしていた。
ハルとはもう八年ほど兄妹をやってきているが、こんな表情は一度だって拝んだ事が無い。ゆえに、何故だか俺のほうが困惑してしまう。
「なんだよ……そんな顔するなよ」
「……」
ハルは無言だった。
悲しそうな表情を作ったまま、少しも動かない。動いてくれない。ずっとずっと俺の目の前で正座をして俯きながら黙っている。
「……お前午後から用事あったんじゃなかったのか？　今何時だ？　まだ大丈夫なのか？」
「……」
「……なぁハル、黙っててても仕方ないだろ。少しくらい質問に答えてくれたってよくないか？」
「……」
それでもハルは、無言だった。何も話さず、動きもせず、ただただ正座をし続けていた。
俺はそんなハルを見限り、時計を眺めた。時刻は十六時五十分。やけに外が暗いと思っていたが、もうそんな時間になっていた事に対して少し驚いた。
「もうこんな時間か。ハルお前デートかなんかだったんだろ？　い

いのかよこんな所に居て」
「……デート……うんまぁデートだけど……」
「は？」
決してデートだという事に対して驚いた訳では無い。性格はあれだがハルはそこそこ可愛い。彼氏の一人や二人居ても不思議とは思わない。俺が驚いたのは返事が返ってくるとは思ってもみなかったからだ。
「デートなんだったら、さっさと行けよ。こんな所で座ってる場合じゃないだろ？」
「……兄貴さ、病院行こう？　だって絶対おかしいもん……兄貴喘息とかじゃないのにあんなに息切らしてさ……兄貴が起きた瞬間すっごく怖かったよ」
「いいよ別に。それより相手待たせてるんじゃねぇのか？」
「死んじゃうかと思ったもん……兄貴あのまま死んじゃうんじゃないかって……」
……会話が成り立たない。いつもの事ながらハルとは本当に噛みあう気がしない。
俺は「ふぅ」とため息を吐いた。そしてハルの居ない方向へと寝返りを打ち、テレビのリモコンを取って電源ボタンを押した。ブゥンという音を立ててスイッチが入る。
ハルと会話をしたってどうせ無駄。ハルは自分の意見を突き通す事しかしない。つまり会話にならない。一方的に要求を伝えてくるだけ。
だったら、もう無視するしかない。他にハルの意見から逃れる術は存在しない。
「兄貴病院に行こうよ……次は死んじゃうかも知れないじゃん……」
背中のほうからハルの悲痛な声が聞こえてくる。前に一度相談した時はそっけなく対応してきたというのに、この変わりようは一体なんなのだというのか……。
「病院に行ったら治るかも知れないよ？　このまま何もしないで死

んじゃってもいいの？　ユキさん悲しむよ……ユキさんかわいそうだよ……」

……。

ユキの名前を出すのは反則だろう……無視が出来なくなる。

たしかにユキにも相談しようと思っていたが、今考えたらそれはかなり危険だという事に気が着いた。

ユキは、見境がなくなってしまう。ユキは自分が辛い分には無理して平気そうな顔をするが、俺が困ったりした時なんかは、もう、酷い。

時にはワンワンと泣き喚くし、時には大声で騒ぐし、時には俺に抱きついて数時間離してくれなかった事もあった。

「……大袈裟だな。死ぬ訳ねぇだろ」

だから、ユキに言うのだけはやめてほしい。心配かけたくないし絶対に泣かれる。

「わからないじゃん……死んじゃうかもしれないじゃん……死んだらどうやって責任取る気？」

「責任ってなんだよ」

「ユキさんや、ローや……私……三人もの女を泣かせる事になるよ……」

私……いけしゃあしゃあと私って言いやがった。

でもまぁ、確かに。俺が死んだら悲しむ人間はいるだろう。それはそれで嬉しい事。

しかし、だ。起きた瞬間に苦しくなって死んだ人間なんて聞いた事が無い。高齢の方ならまだしも、俺のように酒もタバコもやっていない十八の若造が、そんな事になるなんてとてもじゃないが思えない。

「だから、死なねぇって言ってるじゃねぇか。心配かけて悪かったよ。早くデートに行けよ」

「それが、わからないじゃないって、言ってるん……だってば！！」

ハルが大声を上げたかと思ったら突然、俺の後頭部に枕が降って

来た。結構力を込めて投げたらしく、ボスッという音と同時に首がグキッという音を鳴らした。
「……いって……」
「わっかんないの！？　もし私がユキさんの立場だったらこんなもんじゃ済まないんだからね！！　アンタをふんじばってでも病院に連れて行ってる所なんだから！！」
俺はしぶしぶハルのほうへと向き直る。
「アンタみたいな馬鹿でも必要としてる人間がいるって言ってんのよ！！　ユキさん泣かせたら許さないからね！！　絶対にアンタ許さないからね！！」
ハルは、鋭い目をして、眉間にシワを寄せて、怒りながら、泣いている。手を強く握り締めて、わずかに震えている。
……本当に、ハルが分からない。ハルは一体俺の事をどう思っているのか……。
会話すらしなかったり、嫌っているように接したり、疎んでいるように接したり……今日みたいに心から心配してくれたり……。
「……分かったよ、今度行くから」
「……今度って、いつよ」
ハルはようやく落ち着いてきたのか、少し声のトーンを落とした。それでも俺を睨みつける目は、決して緩めはしない。
「……次の休みの日」
「……遅いよ。明日にでも行ってきてよ」
「おいおい……明日は学校あるだろ。休んだりしたらユキになんて思われるか」
「それでも、死ぬよりはマシでしょ……」
ハルは死ぬという単語を使った瞬間、ボロボロと涙をこぼした。大粒で、綺麗だと感じるほどの、涙。
……。
「ハル、なんだ？　どうかしたのか？」
「……約束して。絶対死なないって」

「……死なねぇよ」
「もし……兄貴が死んだら……もう……私……」
「……だから死なねぇって」
「……頼れる人……居ない……」
「……」
ハルは膝から崩れ落ちて、服の袖で涙をぬぐった。何度も何度もぬぐった。
「ひっく……うっくっ……」という泣き声が、空間を埋め尽くしていた。テレビの音のほうがハルの泣き声より大きいと言うのに、ハルの声しか、聞こえてこなかった。

ハルは携帯電話を取り出し、この部屋の隅っこのほうでうずくまった。おそらく彼氏と思われる男に電話をかけようとしている。
「……」
ハルは少し辛そうな表情で受話器を握り締めている。そりゃそうだ、今からドタキャンをかまそうとしているのだから。ハルだって辛い表情にもなる。
「あ……もしもし……うん私……ごめんね今日行けそうもない……うんごめん……うん……」
頼る人間、居るじゃねぇか。今のハルくらいの年齢なら兄より彼氏のほうが頼りになりそうなもんだが……
「ごめんなさい……本当にごめんなさい……今度絶対穴埋めするから……うん……うん、分かった」
ハルは俺と接する時とはまったく違う口調で電話の応対をしていた。
ハルは結婚したら絶対に旦那を尻に敷くタイプだと思っていたのだが……電話のやりとりを見ていたら、なんだか気弱な女性にすら見えてくる。
「うん……じゃあまた明日ね……うん……ばいばい」
そう言ってハルは携帯電話を閉じた。電話を閉じた瞬間に「ふぅ

……」と憂鬱そうにため息をつく。
「……だから言ったじゃねぇか。俺に構ってないで行けって」
「うっさい」
ハルは俺を睨むように見る。ハルはいつも俺に接する時のハルに戻っていた。
それでもさっきまで泣いていたせいか、その瞳は充血して潤んでおり、あまり怖いとは感じない。
「アンタのせいでしょ。まったく心配ばっかりかけないでよね」
……コイツの前ではいつも俺は悪者にされる。今回デートが出来なくなったのは俺のせいだとでも言うのだろうか。
「あ～も～……目真っ赤じゃない……目蓋もはれてるし……最悪……」
「お前が思ってるほど変わってねぇって。行って来いよデート」
「……うっさい」
ハルはそう言って立ち上がり玄関のほうへと歩いていった。
ようやく帰るのか……と思い「やれやれ」と呟く。
「ほら、早く来なさいよ。ご飯くらいおごってよ」
……。
「お前、デートをドタキャンしておいて俺と飯食いに行くつもりなのか？」
「何よ、それくらいいいじゃない」
「……馬鹿なのかお前」
「目はれてる女くらいがアンタにはお似合いって事。アンタにユキさんは勿体無いよ」
……気にしてる事をズバズバと言いやがって。
ユキは……正直俺には勿体無いと感じている。あんなに綺麗な女はそうそうお目にかかれない。何も知らない人間に「アイドルの卵なんだ」と紹介しても確実に信じるだろう。
俺とユキが吊り合っていない事くらい、分かっている。分かっているからあまり考えたくなかった。

「お前、それは言っちゃいけないだろ」
「……うっさい。早く来なさいよ」
コイツは一度言い出したらテコでも動きはしない。誰に対してもそうなのかは分からないが、少なくとも俺の事に関しては間違いなく意見を変えはしない。
今日は長くハルと話したほうだが、それでも全然ハルの事が分からなかった。確かにハルの涙を見たのは初めての事だったが、それのせいで余計ハルが分からない。一体ハルは、何を考え、何を思って、何を感じているのだろうか……。
「……お前の話聞かせてくれるなら行ってもいいぞ」
「は？　私の話？」
「なんで出会った時俺の事を嫌っていたのかとか。なんでお前は俺の前だけ頑固になるのかとか。色々」
「は？　馬鹿じゃない。話す訳ないでしょ」
そりゃそうだ。そんなような返事が返ってくるとは思っていた。
ケイも似たような事を言っていた。話さないのは話したくない理由があるから。そして話したくない理由を話したら話したくない事を話すのと同じ事だから、やはり話せない。つまりこれ以上聞いても無駄という事だ。
「じゃあいいや。気をつけて帰れよ」
「……」
玄関の扉が静かに開く音が聞こえた。古い建物だから人間が行動するといちいち音が鳴る。キィという音と共に部屋の外の寒気が入ってきて寒くなってきた。
「……」
「……」
俺の居る位置からはハルの姿は見えない。それでもドアが開いているという事はハルがまだそこに居るという事。玄関で一体何をやっているというのだろうか、いい加減寒くなってきたから閉めてほしい。

「ハル？　寒いから閉めて欲しいんだけど」
この部屋は狭い。もうすでにこの部屋全体に冷気が充満しており吐く息が白くなっている。
「……」
それでもハルは玄関のドアを閉めない。俺の声に反応を一切示さず、ただただ玄関を開けっ放しにしている。
……もしかしたら嫌がらせで玄関を開けっ放しにして帰ったのだろうか……と思い、俺は面倒くさがりながらも腰を上げて玄関のほうへと歩いていった。
「……なんだよまだ居るじゃねぇか」
ハルは玄関の扉を握ったまま、俯きながらジッと動いていなかった。流れ入ってくる風がハルの髪をなびかせている。
「どうした早く帰れよ」
「……うっさいな」
一応返事は返してきたが、それでもハルは一向に動こうとしなかった。
次第にハルは寒さにやられたのか、ドアノブを握っている手をプルプルと振るわせる。握られているドアノブがカチャカチャという音を立てた。
「お前あれか？　親父に会いたくないのか？」
「当たり前じゃない……今のお父さんも、前のお父さんも、会いたくない……」
理由は知らないが、俺と親父をハルは毛嫌いしていた。今でこそ俺とは普通に会話をする仲くらいにはなったが、親父とは同じ家に住んでいると言うのに、一度だって会話を交わした姿を見た事がない。
「本当は……私が一人暮らしをしたかったわよ……あんな家、私だって出て行きたいわよ……」
「……別に両親は……」
俺は、嫌な閃きが頭をよぎり、思わず言葉を呑んだ。

ハルはさきほど電話をしていた。その電話の相手は彼氏で間違いなく、今日はその彼氏の所に行けないという内容の電話をかけた。その理由は『目が真っ赤で目蓋がはれている。これじゃあみっともなくて会えない』というもの。

逆説的になるが、彼氏の所に行けないという事は、今日はもう家に帰らなければならないという事。しかしハルは極端にあの家を嫌っている。

ハルは帰りたくない？　もしかしたらすでにここ最近家には帰っておらず、その彼氏の所で寝泊りしているという事？

ハルは平日毎日俺の家に家事をしに来てくれる。毎日、毎日、来てくれていた。だけど決まって七時、遅くても八時には俺の部屋を後にする。

彼氏が家に帰ってくる時間が、大体その時間？　部活をやっていて一人暮らしをしている学生か、その時間まで働いている社会人？

嫌な閃きが、イメージとして固まってゆく。このイメージに反論しようとすれば簡単に出来るはずなのに、何故か言葉が思い浮かばない。

否定したい。ハルはそんな奴じゃないって思いたい。そう思っていたのに……。

「ハル、お前って友達いないのか？」

俺は、口を開いてしまっていた。

「何よ居るわよ……ローだって居るし、他にも沢山」

「じゃあ、その友達の家に行けばいいだろ……あの家が嫌なら何も無理する事は無いと思うぞ」

「……」

……コイツは、きっとそこまで深い友達がいない。

だってそうだろう。毎日俺の部屋に来て炊事洗濯掃除までやっていく。普通の女子高生にはそんな暇は無いはずだ。放課後だって遊びで忙しいはずだ。

彼氏の部屋という逃げ口が無い今、コイツには行く当てが無い。

「……お前さ、毎晩」
「うっさい！！」
「毎晩、何やってんだ？　昨日の夜中電話した時だって、手が離せないって言ってたけど、何やってて手が離せなかったんだ？」
「うっさいうっさいうっさい！！　説教しないで！！」
「……別にそんなつもりは無いよ。何をしようとお前の自由だと思ってる。親父にも母ちゃんにも言わない。だけどなハル、兄として言うけど、どんな事情があろうが」
ふいに、右頬に衝撃が走る。そして右耳にキーンという耳鳴りの音が聞こえてきた。数秒してじわぁと、頬が熱くなる。その時に初めて俺はハルに引っ叩かれたという事に気がついた。
「……っ！！　アンタなんかに何が分かるっていうのよ！！　私の何を知ってるっていうのよ！！　偉そうに説教しないでよね！！」
ハルは鋭い視線で俺を見た。しっかりと、俺の目を見ていた。
その目には、再び涙が溢れている。今にもこぼれそうで、なんだか……
……なんだか……
「私っ……！！　私はっ！！」
何故だろう……次のハルの言葉が、なんとなく、分かってしまった。
何故ハルがあんなに俺と親父を嫌っていたのか……その答えを話すようで、もう、見ていられない……
「ハル……分かった、もういいから」
俺はハルの左腕を掴んだ。俺の顔を平手打ちしたせいで、ハルの掌は赤くなっている。
「……！！　離してよっ……この変態！！　変態！！」
ハルは暴れた。俺の腕を振り払おうと、必死になって抵抗している。
だけど俺はハルの腕を思いっきりひっぱり、強引に部屋の中へと引き入れた。そしてすぐさま玄関のドアを閉めて、鍵をかける。念

のためにチェーンロックまでかけた。
「泊まってけよ……床なんかじゃなくて、布団で寝ていいから」
「変態！！　鬼畜！！」
ハルの目から、大粒の涙がボロボロと滴り落ちる。なんだかさっきよりも涙の粒が大きく見える。
大きく、はっきりと、落ちていくのが見える。
「……俺は変態でもなければ鬼畜でも無い。分かるだろ……？　分かってたから、俺とは普通に接してくれたんだろ？」
「……っ！！」
「だろ？」
ハルは、顔をクチャクチャにしかめた。
そしてより大声を上げて、声にならない声を発した。
「あああぁぁぁぁっ……！！　うわあああぁぁぁぁぁっ！！」

「お前さ、彼氏を待たせてるならデートに行けって言っても、全然耳貸さないで病院行けって言ってたろ？　あと親父とも仲悪かったし、毎日俺の部屋に来て炊事洗濯掃除してってくれてたし。何より今日は特に様子が変だったしな。なんか不審だなって思ってカマかけてみただけだよ」
「ふぅん……たま～にユキさんが兄貴の事を頭が良いって褒めてたけど、本当だったんだね……知らなかった」
「驚いたべ？」
「……そうだね。悔しいけど」
ハルは俺の布団の上に寝転がって俺の顔を見ていた。俺はというと薄い毛布を一枚だけはおり、布団の近くの壁によりかかっている。
ハルの目はまた一段と膨れ上がっていた。あの後一時間以上泣き続けていたから、今度は良く見なくても分かるくらいにパンパンだ。正直言って、ブサイクに見える。
だけどハルは、泣き止んだ後に笑顔を見せてくれた。俺に向けては、おそらく初めての笑顔だった。

そして、これもおそらく初めてだ。ハルの口から俺に向けての「ありがとう」が聞けた。
なんだかとてつもなく、嬉しい気分だ。そして穏やかな気分になる。
「あとさ、ハル。一個だけ言っておきたい事があるんだけど」
「説教なら、あまり聴きたくないよ」
ハル自身も、なんだか変わったような気がする。今までだったらこの場合「説教する気？」とか「駄目に決まってるじゃない」のような事をかなり怒ったような口調で、眉間にシワを寄せながら言ってきた。
それがどうだ、少しはにかみながら「あまり聴きたくないよ」と、穏やかなトーンで返してきた。今までのハルからは想像もつかない返し方だ。
なんだか、嬉しい。それだけの事だというのに、俺は何故か口元が緩んでしまう。
「そっか……わりぃもう言わない」
俺は言いたい事をグッと我慢した。本当は言いたくて言いたくて仕方が無いのだが、俺はハルを尊重しようと思った。
ハルの過去に何があったのか、詳しくは分からない。分からないのだが玄関でハルが「私はっ！」と叫んだ時に直感で気付いてしまった。おそらくハルは俺と出会う前に、男に対してトラウマを抱えている。だから極端なほどに男を嫌い、俺にも親父にも懐かなかったんだと思う。
だから、俺が一番身近な男として、ハルを守って行かなければならない。ハルを助けていかなければならない。ハルを認めてあげなければならない。ハルを尊重してあげなきゃいけない。そんな風に強く、感じている。
「うん……言わないでね……私も、解ってるから……もう……しないから……」
だよな……ハルだって頭悪い訳じゃないから、俺が言いたい事く

らい、すでに分かっているはずだ。
「……あれだ、お前ここに住めよ。ここ学校まで歩いて通えるし、ユキの家も近いし」
「……うん。私もそうしようって思ってた」
……そうか。そうか……
「ユキさんも一緒に住めたら、幸せなんだけどなぁ」
「……そうだな……」俺はケイも入れたいけど、多分ハルはケイを認めないだろうな……ケイには欲が無いって言っても信じないだろうし。
「……兄貴？　寝たの？　……おやすみ……ありがとう」

6．ロー

「兄貴！　兄貴ってば！」
「はっ！　はっ！」
苦しい……苦しい……痛い、痛い。
胸が痛い。喉が痛い。そして今日は関節が痛い。さらに息を吸う度に肺がヒューという音を立てる。
一体なんだと言うんだ。日に日に酷くなっていってる気がする。昨日までは関節が痛くなるなんて事は無かったはずだ。肺がヒューという音を立てるほどに息は苦しくなかったはずだ。
「が……がぁぁぁ……！！」
まずい……肺が動かない……まるで麻痺でもしてしまったかのように動いてくれない。
意識が遠のく。起きたばかりだと言うのにまた意識が朦朧としてくる。視界がかすむ。暗くなる。
体が痙攣する……寒いのか熱いのかも分からない。でも何故か全身から汗が吹き出るのが分かる。この汗の出方はヤバイ……今まで体験したことのないような、奇妙な感覚……。
体から絞りだされるような、体が汗を押し出しているような……とにかく自然と出ている気がしない。なんらかの意図があるように思える。
「兄貴！！　息してよ！！　怖いよ！！　怖いよ！！　怖いよ！！」
……いや、ちょっと違うかも知れない。このジトッとした感じ。体から押し出される感じ。汗では無く他の何かで体験しているような気がする。
たとえば……そうだな、ジトッとする感じが血のようにまとわりつく感じに似ている。液体だと言うのに肌に付着し、なかなかぬぐえない、血。今の汗は、まさにそんな感じ……。

血……。
そうだ血だ。ただの例えとして連想してみたのだが、バッチリと当てはまる。この汗は血の感じがするんだ。血は別に暑いからって出る訳じゃない。運動したら出るって訳じゃない。傷が開いたら、出るんだ。
これは、血なんだ。これは……。
トラウマの傷を。閉じておいた筈の傷を。開いた証。そんな気がする。

「兄貴！！　もうそろそろ救急車が来るから！！　しっかりしてよっ！！　しっかりしてよねっ！！」
「……」
……いつの間にか、辺りは明るい。
いつの間にか、苦しくなくなっている。
いつの間にか、関節も痛くない。
いつの間にか、体調が戻っていた。
「……ハル、また泣いてんのか……お前最近泣きすぎじゃねぇか？」
俺の顔に重なるようにハルが俺の顔を覗き込んでいた。ハルの涙がポタポタと垂れてきてなんだかくすぐったい。
「……え？　兄貴……平気なの？」
「あぁ、全然大丈夫」
それに、なんだか凄く冷静だったような……
息が出来なくて苦しいのは確かだったし、体の節々が痛かったのも確かだ。しかしその反面、なんだか頭がスッキリしていたような……あの瞬間だけは夢の中の事を覚えていたような、そんな気がする。
「ハル、救急車呼んじゃったのか……？　乗らねぇと怒られるかな」
「あ……うん呼んじゃった……だって兄貴息してなかったし……変な汗いっぱいかいてたし……最初目を見開いたかと思ったらどんどんと閉じていったし……このままじゃ死んじゃうって思ったら怖く

て……」
「言ったろ。死なねぇって」
これは、本当にそう思う。
あの夢は、あの現象は、俺を殺すものでは無い。
むしろ……他の誰か……確証は全くないが、そんな風に感じている。
「……まぁ、どうせ今日病院にいくつもりだったんだ。軽く検査受けて帰ってくるよ」
「うん、私もついてく」
……ハルの顔は、涙でグチャグチャになっているはずなのに、何故か心強いと感じる。
嬉しいな……昨日まで俺はハルの事を疎ましいって感じていたのに……ハルだってきっと俺の事を同じように感じていたはずなのに……今ではもう、心の支えだ。

俺が目を覚ましたのが朝方六時過ぎだったらしく、緊急病院に到着したのが六時半頃。俺が本当の意味での緊急患者ではなかったからだろうか、院内は相当静まり返っている。まだ顔が幼いと感じさせる緊急病棟の医者が怪訝そうな表情をしていて、俺はより場違いを感じていた。
その医者の「救急車から自分の足で降りて自分の足で歩く患者なんて始めて見ましたよ」という言葉が胸に刺さる。
付き添っていたハルがすかさず「なんだか感じ悪いね」と呟いた。たしかに印象は悪い。
どうやら緊急病棟というものは研修医という医者の卵がアルバイト勤務している事が多く、手術の準備や応急手当が主な仕事らしい。診察というものをするというのは初めてだと言っていた。
「はい息吸って。吐いて」
医者が聴診器を持って俺の呼吸音を聞いている。何度も聞きなおすかと思ったらすぐさま辞めて、聴診器を外しながらふぅとため息

をついた。
「……ホントにちょっと前まで発作が起きてたんですか？　全く異常は感じられませんが」
「……本当ですよ。息まで止まっちゃってたんですから」
ハルが不機嫌そうな顔をして医者へ抗議をした。丁寧な言葉使いではあるがその声は昨日まで俺に対して使っていた声のように棘が混じっている。
「……そうですか。まぁ一応X線でも撮りましょうかね」
医者は少しムッとしたらしく、俺ともハルとも目を合わせてはくれなかった。

「何よあの医者……ムカつくね」
俺はX線写真を撮ってもらった後、もう一度診察をうけるために待合室にある椅子の上に座っていた。ハルは何故か立ちながらウロウロと歩いている。
しかし、思った通り診察では何も分からなかった。X線写真にもおそらく何も写ってはいないだろう。あの発作は人体的な病気などでは無く、むしろ精神的な理由で起こっている。
「……もう少しのような気がするんだけどな」
「ん？　何が？」
そういえばハルには夢の事を詳しく話していない。眠りから覚めた時の症状がハルにとってはあまりにも衝撃だったらしく、夢の話をする暇が無かった。
「夢の事なんだけどさ、ちょっとは話したろ？　あの夢って多分俺が昔に体験していた事だと思うんだけど、起きたら忘れちゃってて よ……ある程度までしか思い出せねぇんだよ」
俺がそう言うとハルはピタッと動きをとめて、俺の顔をじっと見た。
「……え？　もしかして毎日同じ夢見てるの？　さっき眠ってた時も？」

「あぁ」
ハルは少し小走りで俺のほうへと近づいてきた。そして椅子に座っている俺の目線に合わせるようにしゃがみ、じぃっと目を直視する。
俺は「なんだよ……」と呟いてみたりしたけどハルは一向に目を逸らそうとはせずに、ずっと俺の目を見つめた。
なんだか恥ずかしくなってきたがここで目を逸らすのもなんだか違うような気がする。だからって訳でも無いが、俺もハルの目を直視した。
目蓋の腫れは若干ひいてきている。目の充血はどうやらもう落ち着いているようだ。
一重にしてはでかい目で若干つり目ではあるが嫌味な印象は今は無い。昨日まではこの目が嫌で嫌で仕方なかった。
……って、なんだこれ。今は一体何タイムなのだろうか。相変わらずハルの考えている事はよく分からない。

相当長いと感じる時間ハルは俺の目を見つめていたが、急に「全っ然見えない」と言って再び立ち上がった。
……意味が分からない。
「……何？」
「いやさ、ローが言ってたんだけど、夢っていうのは潜在意識がどうとかこうとか……自分が無意識に気にしてる事とかその日にあった強烈な出来事とかを映し出すんだって。んで、ローが言うにはその人の目を見たら……うんまぁ忘れたけど、何か見えるんだって」
「……どんだけ断片的な情報なんだよ」
俺は呆れながら「ふぅ～」とため息をついた。その間もハルは「いや、私にもなんか見えるかなって思ったんだけどさ」と言い訳めいた事を言っている。
しかしローか……最近めっきりローに会っていないような気がする。金髪パーマの頭にでっかいリボンで髪を結びポニーテールをし

ている痛い……いや派手な奴なのだが、学校で見かけた覚えが全然無い。
　最後に会ったのは夏休みにローが突然俺の実家にやってきて「山行きたいです。山に行って綺麗な小川で釣りをしたいです」とか言い出して、しぶしぶ付き合った時だ。あの時は全然知らない山道を歩かされてヘトヘトになったのを覚えている。ハル同様に何を考えているのか良くわからない奴だ。
「最近ロー見ないけど元気にしてるか？」
「ううん」
　思わず会話の流れで「そうか」と言ってしまいそうになった。
　今コイツなんて言ったんだ？　「ううん」と言ったのか？　それにしては平然と言ってのけていたから空耳かとも思ってしまう。
「……ううんって言ったのか？」
「うん言った。ローは最近学校にも来てないんだよね。ローの家も知らないし連絡先も知らないし、会ってないよ」
　ハルはこれと言ってなんでも無いように話している。まるでローが学校に来ていない事が当たり前かのように。会っていない事が当たり前かのように。
　なんだか、違和感を感じる。
「いや、お前会ってないって……親友なんじゃないのか？」
「え？　あ～まぁね」
　……なんだコイツ？　親友が学校に来なくなったら普通心配とかするだろう。連絡簿やタウンなんたらで電話番号くらい調べるだろう。
「あ、でも全然来なくなった訳じゃないから。たまに学校に来たらいつものあのテンションで会話するし」
　まるで世間話でもするかのように、それが異常だと言う事にも気付かずに、ハルは淡々と話を進める。
　……ハルとローの間に何かあった訳でもなさそうだ。ハルの目や言葉に偽りは感じられない。感じられないからこそ、もの凄い違和

感がある。
「お前それで平気なのか？　ローが頻繁に学校を休むようになっても心配じゃないのか？」
「……あれ？　そうだよね……あれ？　なんでだろう」
なんだよ……訳が分からない。
ハルも今更ながら変だという事に気付いたようで「あれ？」と何度も呟いている。
元々俺とローは特別仲が良い訳ではなかった。ローが頻繁に実家のほうへ遊びに来ていたから知っているという間柄。海へ泳ぎに行くにしても山へ釣りに行くにしても、俺はただ単に荷物持ちとしてかりだされていただけだ。
それでもやはり、不安になる。もしかしたら重い病気を抱えて滅多に外へ出られなくなっているのでは無いだろうか……などと考えてしまう。
「……帰ったらローの連絡先調べるぞ」
「へ？　なんで？」
ハルは目を丸くして俺を見る。何故そんな事をすると言い出したのかが分かっていないかのような表情だ。
マジかよ……と思ってしまう。
「……心配じゃねぇか。お前の親友だろ？　連絡くらいとってやれよ」
「あ……そうだね……そうだよ、あれ？　なんで心配って思わなかったんだろ……」
……そうだよ、なんでだ？
俺はハルの事をおかしいって思っているが、俺だって今の今まで気にもしていなかった。ローという単語を聞くまで長い間会っていなかった事に疑問すら持たなかった。学校でも電車でもあの派手な頭を見かけなかった事にすら気付いていなかった。
俺は引っ越したし元々ハルの友達だから接する機会が少なくなったとはいえ、人懐っこかったあのローがぷっつりと姿を見せなくな

った事に対して何の疑問も持たないものか……？　いや、友達の少ない俺にとって、ハルの親友とは言え接する相手が一人減っていたんだ。おかしいと思わない訳が無い。

……おかしいと思わない訳が無いのだが、実際おかしいとは思っていなかった。なんだこれは。

「……あ～、なんか急に心配になってきた。帰ったらホント調べようね」

ハルが言うように、俺も心配になっていた。

いや、心配というより、なんだか少し、怖い。

7．ユキ2

X線写真の結果、やはり俺の胸には何の異常も発見されず、医者は怪訝そうな表情で「一応喘息の薬だしておきます。調合じゃなくて市販してるやつね」と言ったきり何も言わずに診察は終了した。はっきり言って待ち時間の十分の一にも満たない診察時間だった。

帰りの電車の中でハルはそれについて延々ブーブー文句を垂れる。

「あったま来ちゃうよね。私達以外に患者なんて居ないんだから、さっさとやってくれてもいいのに」を何度も何度も俺に向かって言ってきた。

……前から気付いていた事だが、ハルは結構周りを見る事が出来ない。悪いほうのマイペースな人間である。今だって通勤や通学途中の人達がゴチャゴチャと居るのに、大きな声で医者の悪口を言っているのだ。

「もう二度とあんな病院には行かないでおこうね。それにしてもあの医者、一発殴っておけばよかったよ」

……まぁ、周りもそれぞれがそれぞれの話に夢中になっているので、さほどハルの声が目立つという事は無かったのだが、それでも俺はなんだか小さくなってしまう。

……俺の気が小さすぎるのか、ハルが無神経すぎるのか。とりあえず俺は終始「あぁ」しか言わなかった。

駅からアパートへと帰る際にタクシーというものを初めて乗ったのだが、あの乗り物は絶対にボッタクリだ。見る見る料金メーターが上がって行き、十分も乗っていないのに千円以上の料金をとられた。需要が増えないのは間違いなく料金設定にあると俺は思う。

「……たっけ」

俺はタクシーを見送りながらそう呟いた。

「あれくらい普通だよ」

ハルがしれっとした表情でアパートの階段を登っていく。ハルは普段からタクシーを使っているのだろうか、タクシーの乗車中メーターに釘付けになっていた俺をよそに「お腹すいたね。サンドイッチ食べたい」と余裕をかましていた。

しかしより驚いたのは清算時にチラッと見えたハルの財布の中身。いや、財布自体も高級ブランド品で驚いたのだが、何よりも驚いたのは諭吉様が八人も入っていた事だ。高校一年生の餓鬼が俺の財布にかつて入った事のある最高金額をゆうに越すほどの現金を普通に持っていた。

こんな狭い範囲でここまでの格差を感じるなんて、一体この世はどうなっているんだと思う。

「あ、ユキさん！」

アパートの階段の上でハルの元気な声が、やけに静かなこの空間に響いた。その声を聞いて俺も足早にアパートの階段を駆け上る。

ユキは毎日俺の部屋へとやってきて俺の着替えが終わるのを待ってから学校へと登校していた。しかし今日は部屋の鍵も閉まっていたしチャイムを鳴らしても俺が出てこなかったので、ハルの顔を見ても元気にはならず少し泣きそうな顔をしていた。

「あ……タダ君……どこ行ってたの？」

ユキの今にも泣き出してしまいそうな表情を見て、なんだか胸が痛くなる。そういえばユキには事情を一切話しておらず、俺が今何をしていたのかなんて全く知らない。

そう考えただけで申し訳なくて、涙が溢れてきそうになった。返事は名前を呼ばれてから二回目にするというルールを忘れて、俺はつい声を漏らした。

「いや、ごめんな。今何時だ？　学校間に合うか？」

「……どこ行ってたの？」

ユキの顔がより悲しみにゆがむ。

俺が部屋に居なかった……ただそれだけの事だと言うのに、ユキ

にとってはかなり大きな事態だ。あのクラスで、あの学校で、ユキをかばう人間は俺しか居ない。俺無しで学校へ行ったら何をされるか……今のユキにとって俺の居ない学校なんて恐怖以外の何物でも無いはずだ。

ユキは俺が部屋から出てくるか部屋に帰ってくるかしない限り、絶対に学校へは向かっていなかったろう。ずっとずっとここで立ち続けて俺を待っていただろう。

ユキはしっかりしているようで、とても脆く臆病だ。

「……病院にちょっと。喘息酷くて夜中苦しくなってよ」

俺は病院から貰ってきていた袋をガサッと目の前に差し出す。その袋の表記を読んで、ユキはもう一度俺の顔を見た。いや、睨んだ。

「こんな時間に病院やってないよ……それにタダ君が喘息だったなんて始めてきいた……」

……そもそも、だ。

そもそも何故嘘をつかなければならないのか。

心配をかけないため？　強い自分を誇示するため？　ユキに弱い部分を見せるのが格好悪い？　そんな理由なんか、孤独や疎外感に比べたらちっぽけなものだろう。ちっぽけで、恐らく逆効果だ。

話したほうがいい。俺の事でユキに心配はかけても、孤独を感じさせちゃいけない。疎外感を感じさせちゃいけない。ユキをないがしろにしちゃいけない。

ユキも、絶対にそれを望んでいる。

「……今、何時だ？」

ユキが俺の顔を数秒見て俺が目を逸らさない事を確認して、しぶしぶと言った様子で左腕の袖をまくった。そこには女性らしい小さな時計がしてある。

「八時半くらい……」

「もう間に合わないよな。さぼるか」

俺はユキの手を掴んだ。

久々に掴んだユキの手は、俺が想像していた以上に冷たくなって

おり、さすって暖めてやりたくなる。
「部屋入ろうぜ。話しよう」
「だね～。ここ寒いもん。入ろうユキさん」
ユキの顔は釈然とはしていなかったが、俺に引っ張られる腕に抵抗は感じられなかった。

このアパートは作りが雑なのか老朽化のせいなのか、部屋の中に居てもかなり寒い。そのくせ管理人のじいちゃんは「この部屋に備え付けられている暖房器具しか使わないでくれ」という訳の分からない制限を付けている。
「寒いよな、今暖房つけるから」
この部屋で唯一の暖房器具である灯油ストーブに火をつける。ボタンをしばらく押して点火するタイプの、本当に古いストーブだ。チッチッチッチッボッという危なそうな音が爆発しそうで怖い。
「怖いよなこれ。自爆装置かよっつー話だよな」
ストーブを指差してユキの顔を見ながら俺なりにおちゃらけてみせた。しかしユキの顔は一向に明るくならず、ずっと険しい表情をしながら正座の姿勢のまま動かない。
……そりゃそうだ。もし俺が逆の立場だったら「何ヘラヘラしてるんだ」くらいの事を言ってしまうかも知れない。今ユキは本気で俺の事を心配しており、一刻も早く本題に入って欲しいはずだ。普段使わない「よな」とか「だよな」を多様している自分がなんだか寒いし、気持ち悪いと思う。
……などと思っていたら、すかさず台所でコーヒーを入れていたハルが「兄貴きもっちわるい」と突っ込みを入れてきた。
「兄貴さぁ、言いたくないのも分かるけど、先延ばしにして男下げる事もないじゃん」
少し棘を感じるし言い方もキツイが、実際その通りだと思う。
ユキの前では強がって、意地張って、頼れる男であったつもりなのに、心配させたくないという理由でウジウジして、嘘ついたり誤

魔化したりするくらいなら、いっその事話してしまったほうがどれほどマシだろう。
ついさっき。部屋の前で決意していた事だと言うのに。駄目な男だ。
「ユキ、あのな……」
俺はユキの正面に座り、ユキの目を見つめた。ユキの目は、俺の目を見つめていた。
「夢を見るんだ。一ヶ月ほど前から、同じ夢を見ている」
俺は淡々と話し始めた。

「……じゃあ、どこが悪いの……？」
ユキは泣きそうな顔をしていた。いつの間にか接近しており、俺の手を握っている。俺の手を握るその力は、か弱い握力ではあるがしっかりと握られており、ユキが心の底から心配してくれているという事が伝わってくる。
「いや、それが分からなくてさ。病院に行っても異常なしって言われたし、俺も調子が悪いとかじゃない。寝て起きたら苦しいってだけで、その他は本当になんでも無い」
ユキは恐らく俺の話を信用していない。
俺は普段から、今もずっと苦しくて、一番苦しい時が寝て起きた時だと思っているに違いない。力強い反面、涙を溜めているユキの瞳が、そうだと言っていた。
ユキは俺の事となると見境がなくなってしまう。ユキと仲良くしていたからだろうか、俺にもイジメの火の粉が少し飛び火してきた時があった。それはユキが受けているイジメからしてみれば本当に小さい事だったのだが、ユキはその日一日中俺にしがみつきながら「ごめんねごめんね」と泣き続けていた。自分はもっと酷い事をされていると言うのに、ユキはずっと俺に対して謝っていた。
「……ユキ、心配するなって言っても聞かないだろうから、ひとつだけ信じて欲しい」

「ん……何？」
「俺は今本当に、苦しく無い。むしろユキに触れられて、凄くいい気分だ」
本当は、ユキの泣き顔なんて見たくない。見たくないから出来るだけユキには話したくなかった。だけど、話さないという事は、信用していないという事だとも思う。嘘や偽りが必要な仲なんて、やっぱりおかしい。俺とユキの間なら、尚更だと思う。だから、伝わって欲しい。俺は本当に苦しくないんだって。信じて欲しい。もう心配かけたくないとか、泣き顔を見たくないからとか、そんなんじゃない。無性に、信じて欲しかった。
「……嘘だよ」
「信じろ」
ユキの目と言葉は、それでも俺を疑っていた。俺の目を潤んだ瞳で、強く睨み続けている。俺の視線を逃さないように掴んで離さない。俺が目を逸らす事を決して許しはしない。
ユキの目を見つめていたら、まるで悪い事をしてしまったかのような心境になってしまう……いや、「今は苦しくない」という事が嘘だったとしたら、きっとこの負い目はさらに大きくなっていただろう。
「嘘だよ……なんで強がるの？　意味無いよそんな強がり。だってそんな……そんなおかしい事って無いよ。起きた時苦しいのに、しばらくしたら平気って……そんなの信じられないよ」
「信じろ」
もしかしたら、相手がユキじゃなかったら、投げていたかも知れない。信じてもらえない事に対して苛立ち「もういいよ」と言っていたかも知れない。実際ハルに電話をした時は投げた。分かってもらえないなら別に良いって思ってしまった。
だけど、ユキだから伝えたい。信じて欲しい。
俺もユキが目を逸らす事を、許しはしなかった。

「……」
「……」
見詰め合って、この空間に音が無くなって、何分たっただろう。
ユキの手から力が抜ける。
ユキの目から涙がこぼれる。
ユキの肩が急に下がる。
ユキの顔に笑みが浮かぶ。
ユキの口から「うん」という声が、聞こえてくる。
「……分かった。信じる。今は苦しくないんだもんね……うん……今は平気なんだもんね……信じるよ」
ユキは俺の手を離しブレザーの袖で涙をぬぐった。ぬぐってすぐに「へへ」という照れくさそうな笑い声を漏らす。
「……タダ君、涙拭いてあげる」
ユキは、ブレザーの袖を掴み、俺の目をぬぐってきた。
大した事では無いはずなのに、想いが少し通じただけだと言うのに、何故だろう、この上なく嬉しい気持ちになっている。

「絶対キスすると思ったのに。この根性なし」
ハルが少し怒った声をあげて俺の頭を小突いてくる。しかしその表情は少しにやけているような印象を与えさせた。
その声を聞いてユキの顔がポッと赤くなり両頬を押さえて俯いた。良くは聞き取れないが「そんな……そんな……」と呟いているようだ。
今時ユキのように純情な奴は珍しい。決して馬鹿にする訳では無いのだが、間違いなくユキは時代に取り残されている。だからこそユキは良い意味で貴重な存在だと感じる。
「あははっ、ユキさん赤くなって、かわいいな～」
「そんな……可愛くなんて……」
ユキはより赤くなり両手で完全に顔を覆って俯いてしまった。長い髪の毛からチラッと見える耳はまるで茹でたタコのように真っ赤

になっている。
そのしぐさが可愛い。たまらなく可愛い。
時代に取り残されてはいるが、今時の物とは無縁な奴ではあるが、ユキはユキであるだけで、完成している。俺の個人的な感情が篭っての印象なのだろうが、ユキには非の打ち所が全く見当たらない。
「……可愛いさ、ユキは」
「……え？」
俺は無意識のうちに小さく漏らしていた。
本当に無意識だ。自然と口が形を成し、自然と声が出て、自然と言葉になっていた。
「……え？　なんて……」
ハルもユキも、俺の顔をジッと見つめている。二人とも珍しい物でも見つけたかのように、まじまじと俺の顔を覗き込んでいる。
……素直な言葉のはずなのに。率直な意見のはずなのに。なんだかとてつもなく恥ずかしい気分だ……二人の視線が恥ずかしいという感情をさらに加速させる。
「……なんだよ……何見てんだ」
「いやぁ、今兄貴の口から可愛いって聞こえたんだけど」
でもユキに「可愛い」と言った事を後悔するのは、違う。それは全然違うと思う。
「……言ったよ。だったらなんだ」
そうだ、「だったらなんだ」と言うのだ。いいじゃないか。何もおかしい事は言っていない。堂々としていればいいんだ。
ユキの事を可愛いと言った事を否定してはいけない。自分に嘘を付く云々では無く、ユキを侮辱する事になってしまう。そんな事は許されない。許さない。
「へぇ……いや、兄貴の口からそんな言葉が出るとは思ってもみなかったからさ」
ハルは目をまんまるくして隣に座っているユキに「ねぇ？」と言って同意を求めた。しかし当のユキは時間を奪われたかのようにピ

クリとも動かない。俺の目をジッと見つめて固まった。
「……いやまぁ、うんホント、ユキさんって可愛いと思うよ。女の私から見ても可愛いな～なんて思うし。それにお料理も上手だし性格もすっごくいいし……えっと他にも、ほら、いつだったか私がユキさんの洋服に染みつけちゃった時とかもさぁ」
ハルは動かないユキの肩を抱いてヘラヘラと話しかける。何もハルが焦る事なんて無いのに、何故か必死になってユキへと話しかけていた。
それでもユキは少しも動こうとはしない。まるで俺の顔に穴があくのではないかと思うほどに俺の顔を凝視する。
そんなに固まるほどの事だろうか……ユキは「可愛い」と言われ慣れてないとは思えないのだが。
「……ユキ、目乾くって。目閉じろよ」
俺がユキに向かってそう言い放つと同時にユキは時間を取り戻したようで急に顔を真っ赤に染め上げた。そして再び両手で顔を押さえ口をぱっくりと開く。
「そんなっ……！！　ホントに私可愛くなんか無いよっ！！　私なんて、ブスだし、不器用だし、一人じゃ何も出来ないし……ほら、全然可愛くないからっ……！！」
ユキは顔を横に大きくブンブンと振る。纏まっていたはずの長い髪の毛が宙に舞ってボサボサと乱れてしまった。
そんな仕草を見て、思う。
ユキは本当に、貴重な人間なんだなって。
ユキは本当に、純粋なんだなって。
ユキは本当に……可愛いなって。
ユキは本当に……俺の理想の人間だって。
つくづく、思った。

8．ユキ3

「誰の格言だったかな……ニーチェだったかな……なんかこういうの」

彼女は唇と唇が触れ合わないギリギリまで顔を近づけ、目を細くしながら、まるで俺の目の奥を見るように、凝視する。

ガクガクと震える腕を俺は彼女の体に乗せる事すらできず、宙に浮かせていた。行き場を無くした腕を掲げているだけだというのに、何キロもの重りをつけられているかのように重く感じる。重力に従ってしまえば彼女の背中に触れる事が出来るのだろうが、俺は何故だかそれが怖くて、恐ろしくて、出来ないでいた。

「昼の光に夜の闇の深さが分かるものかって」

俺の目には彼女の瞳しか映っていない。彼女の瞳が俺の視界の全てであり、同時にそれは彼女にも言える事だと思う。彼女の目には、俺の瞳しか映っていないはずだ。

だけど本当に、彼女の目は、俺を見ているのだろうか。それとも俺の目の中に映る自分を見ているのか。

そもそも彼女のこの目は笑っているのだろうか。俺の表情は、俺の瞳は、どのように彼女に映っているのだろうか。

少なくとも俺の目から見た彼女は、もの凄く美しく映り、また恐ろしく映る。

何故だか分からない。大好きなはずなのに、彼女の瞳を見ていると。

見ていると。

連想するものは、死。意識するものは、終わり。

「うぁ……あ……」

呼吸が苦しくなる。汗が吹き出る。

関節が痛くなる。力が入らなくなる。

怖くなる。彼女が心から恐ろしくなる。

逃げたくなる。逃げたくなる。逃げたくなる。
「怖がらないで……」
彼女はそう言って最後の一歩を踏み出した。
「うぅっ……ぐぅ……」
彼女の唇は、柔らかかった。俺の首に巻きつけられた腕に込められている力は、俺を離さないために強く込められていた。
同時に、俺は仰向けに倒れる。その感覚がとてもスローに思えて、体を支えていた右手が完全に力を失う瞬間も分かったし、自分の体が地面に対して現在何度の開きがあるんだろうとかも考えられるほどだった。
「……」
地面と俺の体の開きが平行になったその時、俺が目にしたものは、彼女の涙。
つぶった目蓋の間から、閉じ込め切れなかった涙がにじみ出ていて、長いまつげを伝い、俺の瞳の側へと落ちてきた。
ポタリポタリと、俺に落ちてきては、俺の顔をぬらす。
「……」
俺の顔をぬらしながら、彼女はより一層腕に力を込めて、俺に密着してきた。
もう、俺の視界には何も映ってはいなかった。

「……あれ？」
目が覚めると、俺はつい口走ってしまっていた。
あの夢を見たと言うのに、体は全くの正常。まるであの夢を見る事を楽しみにしていた時のように、俺の体はなんとも無かった。
関節も痛くない。胸も呼吸も苦しくない。動悸も激しくない。なんともない。
それが逆に、なんだか怖い。
「……」
時計を眺めてみると、時間はまだ夕方の四時を回っていない。い

つもなら学校から帰宅しているような時間帯だ。体がこの時間を覚えていて、この時間に俺を起したのだろうか、やけに頭がスッキリしており眠気の残りも感じられなかった。
それゆえに、今俺の隣で眠っている存在に対して冷静な判断が出来た。何故こうなっているのかも、なんとなく理解できる。
「……はは」
俺は顔を右手で覆い隠して小さく笑う。隣で眠っている彼女を起さないように、小さく、小さく、気を使って笑う。
「はは……はは……」
何故、笑うか。それは、嬉しくて、嬉しくて、仕方が無いから。
面白い時じゃなくても笑いが出てくる。それを実感した瞬間だった。
「ユキ……」
俺は隣で眠っているユキの首へと腕を巻きつけて、優しく引き寄せた。というよりこの場合、自分から近づいたと言ったほうが適切だろうか、起さないよう、静かに近づいた。するとこっち側を向いて眠っている彼女の顔がもの凄く近くに寄ってくる。俺の顔のすぐ側までユキの顔が近づいてくる。
手すら握った事が無いのに。体に触れる事すら稀なのに。今ではもう、ユキの唇に俺の唇が触れてもおかしくないほど。それどころか、体同士はもうすっかり密着しており、思い切り抱きしめればこのままユキとひとつになれるような……。
ユキとひとつに……。
「くぅ……くぅ……」
ユキの寝息が、俺の鼻先に当たる。
少し生暖かいと感じるその吐息は、俺を狂わせる魔性の毒。
ユキの吐いた息が俺の吸う息となり、俺の吐いた息がユキの吸う息となる。
それらが連鎖して、連鎖して、俺は、俺じゃいられなくなる。
「ユキ……」

腕に力を込める。優しくでは無く、思い切り。
乱暴とも思えるほどの力をユキの首に込めて、引き寄せる。
引き寄せたら当然、俺の顔とユキの顔がぶつかる。まずはデコとデコがぶつかりあう。
ゴチンという音を立てるが痛みはそれほど感じはしない。それよりもまず俺はユキの唇を奪いたくて仕方が無い。
あと数センチでユキの唇へと辿り着く。あと数センチでユキの唇は俺のものになる。
あと数ミリで俺はユキを奪う。あと数ミリでユキは……。
「……っ！！　げほっ……！！　げほっ！！」
「え？」
「げほっげほっ！！　はぁっ！！　ああっ！！」
一瞬、何が起きたのか分からなかった。
突然ユキの目がカッと見開いたかと思ったら突然激しく咳き込み、言葉にならない声を発した。「あああ！！」と声を絞り出すように叫んだかと思えば、また激しく咳き込み、胸の辺りに手を当てて体を左右に振る。
「げほげほっ！！　げほっ！！　はぁああ！！　ああああっ！！」
「……え？」
ユキの目が見る見る充血していく。ユキの喉が激しく痙攣する。あの綺麗なユキの顔が、歪んでいく。ユキの体が、大きく跳ねる。
「ちょっと……おいユキ……ユキ……」
「げほっ！！　げほっ！！」
ユキの瞳から涙がにじみ出る。あれは感情から出てくる涙ではなく、激しい息切れから出ているものだという事が俺には分かっていた。だってそれは俺も体験した事だから。
それも、つい最近。つい最近、俺も同じ体験をしていた……。
という事は、この症状は俺と同じ……？
「……っ！！　おいユキッ！！　しっかりしろ！！　息をしろ！！
深呼吸するんだ！！　大きく！！　大きく！！」

「ひゅぅっ……！！　ひゅぅっ……！！」
ユキは俺の顔こそ見ては居なかったが、どうやら俺の声は届いているようで、必死に深く息をしようとしていた。その際に発せられる「ひゅぅ」という音がまるで肺に穴が開いたように思えて、怖い。
いつのまにか中腰になっていた俺はユキの背中を必死にさすっていた。こうされたら楽だろうという事が俺には分かっており、何度も何度も背中をさする。
「ひゅぅっ……！！　ひゅぅ……！！」
「頑張れユキ……大丈夫だ、その感覚はお前を殺さない。五分もすればまるで嘘のようにおさまるんだ……耐えろユキ……」
俺はユキの背中をさすりつつ、ハルを探すためぐるっと部屋の中を見渡す。しかしどうやらこの部屋にハルはすでにおらず、俺とユキしか居ないらしい。
俺が昼寝をしてから何かあったのだろうか……少し声をあげて「ハル！」と呼んで見ても、やはり返事は無かった。
「ひゅぅ……ひゅぅ……」
それでも俺の背中をさするという行為が幸いしてか、ユキの呼吸はかなり落ち着いてきていた。俺は「五分もすればおさまる」と言ったが、どうやらそれよりも早く落ち着きだしていて安心する。
「……ユキ、大丈夫か？　今水持ってくるから待っててくれ」
ユキは俺の言葉に返事こそしなかったが、穏やかな目で俺の顔を見てコクンとうなずいた。
その時に気付いたのだが、やはりユキの顔は汗でビッショリと濡れている。いや、顔だけではなく制服の中も汗でビッショリのはずだ。俺がそうだったから。
「……」
俺はユキのその様子を確認し、ゆっくりと立ち上がって台所へと向かう。蛇口をひねり激しく流れる冷水を見ながら、少し考える。
何故、ユキも俺と同じ症状が……？

「……ごめんねタダ君……お布団、ビチョビチョになっちゃった……」
すっかり落ち着いたユキは少し苦笑いを浮かべて座布団の上に座っている。その正面に俺も座りユキの頭を撫でていた。ユキの頭はタオルで少し拭きはしたが今でも少し湿っていて、まるで風呂上りのような手触りだった。
「いいよ別にそんな事。乾かせば済む話だし。それよりお前……」
「ん……？」
俺は少し「んんっ」喉を鳴らす。
「……お前の制服も、濡れてるだろ……そのままの姿じゃ風邪ひくだろうから……帰って着替えろよ。それにお稽古もあるだろうし……」
本当に俺の言いたかった事とは違う事を言っていた。それは無意識にでは無く、引き止めたい気持ちを必死に抑えてようやく搾り出した言葉。
本当は一緒に居てやりたい。一緒に居て話を聞いてやりたい。ユキが今体験した症状は、俺にこそ理解が出来る事なんだから、慰めてあげたい。
だけど、それをするにはあまりにも時間が無さ過ぎる。俺のほうはそれでも構わないのだが、ユキのほうは……。
ユキは色々なものに縛られている。自由が無い。
「……私さ」
ユキは、目を大きく見開き、俺の顔を見る。
さっきまで充血しており少し痛々しかったのだが、今ではもうすっかりと落ち着いているようで、目蓋も腫れてはいない。いつも通りの少しとぼけたユキの顔だった。
「今まで一度もお稽古サボった事無いんだよ。体の調子が悪くて休んだ事は何回かあるけど、サボった事は一度だって無いの」
少し微笑みながらユキはまるで自慢するかのようにそう言った。
ユキの話は少し遠回りだ。何か長い話をする時は最初に主語を言

うような事は絶対にしない。今だって正直なんの話をしているのか俺には理解できない。それゆえにユキは天然と思われがちだが、実際はそんな事はなく、根気良く話を聞いていれば話の最後には何を伝えたいのか分かる。まぁ、分からない事も時々あるが……それでもユキはいつでも何かを伝えようと頑張って言葉にする。

だから俺は口を挟まず「うん」という相槌を打ちながら聞いていた。

「でね、私はなんで毎日お稽古してるのかって話だけど、それは私が一人っ子だからなんだ。私以外に期待できる子が居ないからなんだ。でも私頭悪いし、出来も悪くてセンスが無いから、毎日する必要があるんだって」

「……そんな事ねぇよ。ユキはなんでも器用にこなすじゃねぇか」

ユキは否定するように首を横に振る。褒められて少し嬉しそうな表情をしているように見えなくもないが、ユキは決して自分が褒められた事に対して肯定はしない。今まで一度だってした事がない。

「ううん、私ね、本当に馬鹿だし、センスも無いよ。いっぱい怒られて、叱られて、ようやく今くらいに出来るようになったの。それでも少し休んだりすると馬鹿だから、センスないから、忘れちゃったり出来なくなったりしちゃうんだ」

「つまりはあれだろ、帰ってお稽古しなきゃいけないって事だろ？」

ユキは再び首を横に振る。

「違うの。そうじゃなくて……私ね、バイオリンとかピアノとかお料理とか、他にも色々やってるけど、どれも上手じゃなくて、とてもじゃないけどそれらを、将来の夢とかに出来ないの。頭悪くて物覚えが悪いし、すぐ忘れるし、何をやらせてもセンスが無いし……」

……あぁ、ようやくユキの言っている事が理解出来てきた。

つまりユキは、親の期待に答えるべく、今まで歯を食いしばって頑張ってきた。それこそ毎日毎日一生懸命努力を重ねてきた。だけどユキは気付いてしまった。ユキには今まで習ってきたお稽古のどれもに才能が無く、将来仕事に出来るようなものが何も無い。と。

……だから、なんだと言うのだろう。まだユキの真意が分からない。
「……ユキ、だからなんなんだ？　ユキはどうしたいんだ？」
「……だからね、私ね」
ユキは今まで一瞬も離さなかった目を俺から外した。そして目を閉じて、小さく息を吐く。
ゆっくりと体の正面で手を組み、しばらくの間その状態から動かなくなった。
じっくりとユキを観察してみると、目を閉じているユキの目蓋に力が篭っているのが分かる。目蓋だけでなく、体の前で組んでいる腕にも力が篭っている。
……茶化す事も話しかける事も出来たはずなのに、なんだかそれをしたくなかった。ユキの今の行動をとめるような事は、しちゃいけないと感じていた。そしてそれが正しいのだと、何に対しての納得なのか分からないが、無意味に納得している。
「全部辞めたい……ううん辞める。辞めるから……」
ユキは目蓋をゆっくりと開いて、俺の顔を見る。
普段のへらっとした目では無く、恐らくユキにできうる最高に真剣な瞳なのだろう、もの凄く力強いと感じる目だった。
「いつもタダ君と一緒にいたい……だから私と、付き合ってください……」
だけど、まっすぐなユキの瞳の中に、曇りと、涙が、見える。

ユキのそれらは、決意。
お稽古を全て辞めて、全てのプレッシャーを払いのけるというのは、ユキにとって相当な覚悟が必要だという事。それは想像するに容易い。ゆえの、曇り。つまりは不安。
ユキと付き合うという事は、今まで以上にイジメの火の粉が俺へと降りかかるリスクを負うという事。
ユキは昔言っていた。「私に関わったらタダ君に沢山迷惑かけちゃ

うから、もういいよ」
　だけどユキは今、自分からそれを撤回した。俺に火の粉が降りかかる事を承知で、ユキは俺に申し出てきた。ゆえの涙。もしくは勇気を振り絞った事で溜まった涙か。その両方か。
「ユキ……」
「……付き合ってください」
「ユキ……」
「……付き合ってください」
　確かに、ユキは不器用だ。
　恐らく自分では意識していないのだろうが、話が回りくどい。察してやらなければ何が言いたいのかも分からない。
そして話が長い。良くわからない内容の話を延々と聴かされるなんて事もある。
そのくせ言葉が足りない。結局何が言いたいのかという事が分からない時だってある。
　でも、頑張って言葉にしてるんだって事は、良くわかる。
　良くわかるから、いつだって聞き入ってしまう。
　だからユキのこの告白も、まるで染み入るように俺の中へと浸透してくる。
「ユキ……不思議なもんでさ、断る理由を探してる俺がいるんだよ……ホント、不思議なんだけどさ……」
「……」
　ユキは押し黙る。じっと俺の目を見つめて制服のスカートを握り締めていた。
「……でもよ、断る理由は一個も見つからなくて……その変わりに応じる理由は何個も何個も見つかって……」
「……」
　俺の中で、何かが爆発するのを感じた。それは不思議な事に、ユキの靴箱の中に糞尿が塗りたくられていたのを見た時と似たような感覚だった。

だけど明らかに違うのは、この感覚が、とても心地良いものだという事。そして湧き出てくる感情が真逆のものだという事。
座った状態からだと言うのに、自分でも信じられないほどの瞬発力でユキの体へとタックルをかまし、ユキの体に腕をまわし抱きしめた。ユキの体に触れた瞬間に感じたやわらかい感触が心地よく、俺を満たしていく。
「あぅ……痛い……」
ユキは寝転びこそしなかったものの、状態をかなり斜めに倒し、腕を体の後ろに回してなんとか耐えている。顔は見えないからその表情が苦痛で歪んでいるのか、歓喜に満ちているのかは分からないが、ユキの声は少なからず弾んでいるように聞こえる。
「ユキ……あのな、俺って今までもずっと付き合ってる気分だったんだぞ」
心が素直だ。まるで何年も閉じたままだった窓を久しぶりに開けたかのような爽快感。
と言っても別に今までだってこの気持ちを隠していた訳では無い。俺は俺なりにユキを好いており、ユキのために色々な事をしてきたつもりだ。
それでも……ここまで違うものか。お互いがお互いの事を好きと知ったという事実だけで、ここまで心が開いてしまうものか。
「ずっとずっと……それこそ小学生の時から好きだった」
「……うん。私も同じだよ」
俺はユキのその言葉を聴いて、より強くユキの体を抱きしめた。強く強く、ユキの体の中にめり込んでしまうのではないかと思うほどに、力を込める。
知っているはずだった。お互いがお互いを好きだって事くらい、ずっと前から知っていてしかるべきだった。だって俺たちには、俺たちしか居ないんだから。俺にユキ以外の誰を好きになれと言うのか。ユキに俺以外の誰を好きになれというのか。
「……私、いっぱい思い出が欲しい」

「あぁ……沢山作ろうな。俺今から就職活動するからよ、冬休みはそれでつぶれちゃうだろうけど、春休みになったらきっと沢山遊べるから、その時に色々な所に行こう」
「……そうじゃなくて……今から、沢山の思い出が欲しいんだ」
ユキの声は優しいという印象を受けるが、その中に混じって焦りというか、震えというか、負の感情が少しだけ感じられる。その違和感から俺はついユキのお腹から顔を上げてユキの顔を見た。
「……」
そこには今まで見た事も無いほど美しく微笑むユキがいた。今まで見てきたユキの表情の中で、間違いなく一番可愛いと思える顔だった。俺はその顔を見て、思わず「うぁ」と声を漏らす。
「もう私達は始まってるんだから」
ユキの顔は、まるで慈愛に満ちた、女神のよう……。
にっこりと笑う表情に、偽りはひとつも感じられなかった。

「当分の着替えとかは後で奈緒さんが届けてくれるって言ってたよ。シャンプーとか歯ブラシとかも持ってきてくれるって」
ユキはニコニコと笑いながら携帯電話をパタンと閉じる。
「そうか……しかし、奈緒さん俺との同居なんてよく許してくれたな」
「あはは。えっとね、私奈緒さんにはタダ君の話ばっかりしてるんだ。タダ君がいかに良い人かって事ばっかり話してたから、奈緒さんも安心してくれたんだと思う」
ユキの両親はしがない土木作業員である俺の親父とは住む世界が違う。俺の親父は収入を年収と呼んでいるが、ユキの家では年商と呼ぶ。それも毎年何億という収入を得ているほどの金持ちだ。
ゆえに、ユキの両親があの豪邸に帰ってくる事は年に一度あるかないか。それも何故か三月の終わりから四月の初めまでの少ない期間だけだ。あの家に唯一勤務している家政婦の奈緒さんが口裏を合わせてくれれば、両親が家に居ない間何をしていても決してバレる

事は無いらしい。
「奈緒さんは私の味方だから大丈夫」
ユキの奈緒さんに対する信頼は、相当強いようだ。
第二のお母さんと呼ぶほどの人物だから、当たり前と言えば当たり前なのだが、気がかりなのは……
「……本当に大丈夫か？　ちょい心配だけど」
気がかりなのは、奈緒さん自身が第二のお母さんという気になっているんだとすれば、決して今回のような突発的な同居は認めないだろう……という事。
いや、第二のお母さんという気になっていないとしても、奈緒さんには家政婦としての責任がある。俺の勝手な想像でしかないが、奈緒さんはそういった所にはとても厳しいような気がする。ユキのためというより、自分の責任を真っ当する事に重きを置きそうだ。
日常品を持ってやって来た時に、何か言われるだろうという事は覚悟しておかないといけない。俺だけを呼び出して延々と憎まれ口を叩かれるかも知れない。いや、もしかすると俺とユキの仲を引き裂いてもう二度とユキと会わせてくれないなんて事も……。
「大丈夫だよ……」
ユキは少し怒ったような口ぶりでそう言った。少しイラっときたのか、眉毛をつりあげて睨むようにして俺を見た。
ユキの瞳と目が合った瞬間、全身に鳥肌が立った。俺の弱さをユキに見透かされたと、瞬時に悟った。
……俺が心配するのは、むしろユキに対して失礼なのかもしれない。ユキの言葉を信じないでどうする。「大丈夫だ」と言わないでどうする。仮に奈緒さんに何か言われても毅然とした態度でいないでどうする。
格好悪いぞ、俺。
「……わりぃ、そうだな、大丈夫だよな」
毅然としていなければならないと言うのに、俺の口から発せられた声は、かろうじてユキの耳に届く程度の小さいものになってしま

っていた。
本当に、格好悪い……。
「うん。大丈夫」
それに比べて、ユキの目は、もう笑っていた。
……もしかしたら、俺は勘違いしているのかも知れない。
「ユキ」
「ん？　なぁに？」
……。
「……可愛いぞ」
ユキは突然の事なので面食らい、頬を赤く染めて目をまんまるくしている。
……本当に言いたかった事は「可愛い」ではなく「格好いい」だった。だけど、悔しくて言えなかった。

9．奈緒

突然、携帯電話のベルが鳴った。奈緒さんの到着を緊張して待っていただけに俺の体は必要以上に反応していた。体をビクつかせ、音の発信源を必死に探す。

「なんだ電話か……」と呟いた瞬間、誰も居ないというのに頬が熱くなるのが分かる。

携帯電話を開いてみると着信はハルからで、携帯の液晶には『棘』と表示されていた。この表示も変えておかないとな……なんて思う。

「もしもし」

『あ、兄貴？　起きてた？』

ハルの声は何か良い事でもあったかのように弾んでいた。俺に対してこのようなテンションで電話をかけてくる事なんて、今まで一度も無いだけに、少しだけ戸惑う。

「……あ～起きてた。っつっても一時間くらい前に起きたばっかだけど」

『あっそ～。別にそんな事はどうでもいいんだけどさ』

……どうでもいいなら聞くな。ハルのこういった部分は相変わらずのようだ。それでも俺に対して発する声が明るくなっただけマシになったと思う。大した進歩だ。

「……それで？　何か用事があったんじゃねぇのか？」

『あ～そうそう。今日さ、兄貴とユキさん眠っちゃった後に暇だから学校に行ったんだよね。そしたらローが久々に来ててさぁ～ビックリしたよ』

……ロー……。

すっかり忘れていた。アパートに帰ってきてから慌しく過ごしていたせいか、記憶の片隅にもローの事は残ってはいなかった。

何故だ？　病院に居る時にも感じた事なのだが、何故こんなにも簡単にローの事を忘れられる？　俺の中でローがそこまで重んじて

受け取るほどの人間じゃないからか？
……いやそれは違う。仮に俺の中ではそうだったとしても、これはハルに対しての理由にはならない。ハルにとってローは親友のような人間のはずだ。つまり俺にとってはケイのような存在。それを簡単に忘れる事なんて出来ないはず。
「……そうか。それでどうだった？」
『え？　あぁ～いつものあの感じだったよ。やけにベタベタしてきて馴れ馴れしかった。なんで遅れてきたんですか～とか言ってさぁ』
……ハルはもしかしたら馬鹿なんじゃないかと思ってしまう。
「そうじゃねぇだろ。連絡先聞いたりローの家に行ったりしなかったのか？　なんで今まで休んでたのか聞かなかったのか？」
『……あ～、いや、しなかったなぁ』
……駄目だ。ハルじゃあ全然話にならない。
『いや忘れちゃっててさ。あ、でもホントいつも通りでおかしな所なんて全然なかったよ。今日から兄貴の部屋に住む～って言ったらパーティーだ～とか言ってさぁ、今度の休みにでも兄貴の部屋に行く～とかなんとか』
……つくづく思う。ハルは棘を感じさせなくても、やっぱりハルだ。一方的に用件を伝えてきて、反論はもちろん、相槌を打つ隙さえ与えてくれない。それに今回の話は内容があまりにも無くて聞いているだけで疲れてくる。
「……なぁ、どうせ進展なかったんだろ？　それならまた明日にでも連絡先とか聞けばいい事だし」
『どうせって何よ。ローの近状が知りたいと思ってせっかく電話したのに』
「……いいから。荷物纏めたらさっさと来いよな。ユキも待ってるから」
『は？　どういう事？』
「じゃあな」
俺はハルとのやり取りを早く切り上げたくて、一方的に携帯の赤

いボタンを押して電話を切る。受話器の向こう側からはまだ「ちょっと兄貴！」とか聞こえてきてはいたが、こっちは正直言ってそんな場合では無い。今から奈緒さんが来るんだ。

このアパートからユキの家はかなり近いので電話してすぐに来るという可能性だってあったんだ。走ればそれこそ二分かそこらで着いてしまう。

荷物を纏めるのに十分、歩いてこの家に向かって五分……そう考えると、もうそろそろ着いてもおかしくない時間だった。

……それなのに、ユキは何をのんびり風呂に……。

と、不安と焦りからくるイライラが積み重なったその時、この部屋のチャイムを押す音が聞こえてきた。誰かが訪問してくる際に必ず鳴るピンポーンという聴きなれた音が、この瞬間はまるで別の音のように感じらた。

乾いた音……とでも表現すればいいのだろうか、その乾いた音が一瞬のうちに俺の心臓を凍りつかせる。

「……嘘だろ……」

正直、覚悟というものが決まっていなかった。ハルの電話というボケた時間のすぐ後だったから覚悟なんて決まっているはずが無い。

「ちょ……ちょっと待って……」

俺は玄関に向けて声をかける。しかし思っていた以上に声が出ていなく、玄関の外に居るであろう奈緒さんの耳まで届いているはずも無く、二度目のピンポーンという音が俺の心臓をもう一度凍らせる。

……何をやっている俺は……。

奈緒さんに会う事。ユキの両親に会う事。それらは同居を始める上で間違いなく避けては通れない関門なんだ。それどころか、本来ならば俺のほうから挨拶をしに行かなければならない事……なのに俺は何をやっているんだ。

そう思っていきり立とうとする。だけど思っているだけで、感じ

ては居ないのだろう……逆に俺の中の火がどんどんと小さくなっていくのを感じる。
小さくなって、小さくなって、消えてしまう……。
「消えるな……」
言葉に出して言ってみた。
「くそっ……消えるな」
消えるな消えるな消えるな……そう思っているうちに、何をどう回って思いついたのか、突然空を見たくなった。俺なんてちっぽけなんだと残酷に気付かせてくれる空を。それでも時々俺なんかを暖かく包んでくれる空を。唐突に見たくなってしまった。
「……」
俺はいつの間にか立ち上がっていた。
決して奈緒さんに会う勇気が出た訳では無い。踏ん切りがついた訳では無い。
ただ、俺は空が見たかった。空を見るついでに、奈緒さんにも会ってしまおうと思った。

「ごめんなさい、ちょっとバタバタしてまして」
俺は奈緒さんの顔を見ずに空を見た。
「……いいえ、いいんです」
もう六時近いのか、西空はわずかにオレンジ色を発しているだけだった。どうやら天気もそんなに良くないらしく、星なんかは一切見えない。
明日は雪でも降るのだろうか……吹き付ける風も乾いていて、まるで皮膚に刺さるよう。
「……これ、ユキ様の日用品です」
でも、あれだな。空を拝んでよかったな。
「あぁ……気持ちいいですね」
「……はい？」
俺はスリッパ履きをしてすっかり履き潰してしまった靴に足を通

した。そして手渡された、やけに高そうな旅行用のカバンを受け取り、玄関の奥へと静かに置く。
なんだかここまで俺をコケにしてくれる空を見ていたら、いっそすがすがしかった。
「見てください。空。綺麗じゃないですか？」
もうそろそろ終わってしまう夕日。それがあまりにも綺麗で、思わず笑えてしまう。
あんなに綺麗に見せて、一体どういうつもりなんだろう。ちいせぇちいせぇと、しっかりしろよと、格好つけろよと、俺の事をあざ笑っているのだろうか。
「ははは」
笑える。綺麗すぎて、笑える。

俺はしばらくの間夕日を見続けていた。というより、夕日が完全に沈むまでアパートの玄関で突っ立っていた。
沈むまで五分はかかったであろうに、その間奈緒さんも終始無言で俺と一緒に夕日を眺めてくれていた。寒いだろうに、一切の言葉を発せずにいてくれた。
「……はぁ……すみませんでした。急に変な事言い出して。気持ち悪かったですよね」
俺は少し明るい声で奈緒さんへと話しかける。その時に改めて奈緒さんの服装を見てみると、普段のイメージからは想像が出来ない服を着ていた。
ピンク色のマフラーに、白のフワフワしたセーター。ズボンには明るい色のジーパンを履いており、羽織っているコートは赤色だった。
勝手ながら俺の中ではもっと地味なイメージがある。奈緒さんがいつも着ている仕事着はあまり派手では無いし、失礼だが『機械のような人』という先入観が由来しているのだろうが……以外にも派手な色使いの服も似合っている。

「……いえ、そんな事ないですよ」
「またまた」
俺はおどけて奈緒さんの顔を見る。
「いえ、本当にそんな事無いですよ。私もつい見入ってしまいました」
奈緒さんも俺の顔を見て、おどけるように笑ってくれた。そんな奈緒さんを見るのは初めてで、なんだか俺のほうが面食らってしまう。
「太陽が昇っている間はいつもお屋敷の中で過ごしているので、あまり空というものを意識して見つめた事は無いんです」
機械という印象は一切与えない笑顔で、奈緒さんは「いいものを見せてもらいました」と言った。とってもとっても失礼な事なのだが、この人がこんな風に笑えるだなんて、思っても見なかった……。
そしてその笑顔を見ているとなんだか……。
この人からユキを奪い取るのがもの凄く悪い事をしているような……。
だってそうじゃないか。この人は日長一日あのでっかい家に一人きり。
朝早く起きてユキの弁当を作り、ユキを起して学校へと送り出す。それから大して汚れてもいない屋敷全体を隅々まで掃除して、ユキと自分の服を洗濯して、夕飯の準備をして、ユキが帰ってきたと思ったら今度はお稽古の準備をさせて、また送り出して、その後に買出しして、夜中にくたくたなユキを出迎え寝かしつけた後、ようやくシャワーで汗を流して、床に着く。という生活なんだろう。
この人が人間と触れ合うのは、ユキと一緒に居るわずかな時間だけ。きっとこの人は「ユキのために」と思う一心でこのシビアな生活を乗り切っている……。
「あの……俺……」
口に出してしまいそうだ。
奈緒さんを同情するような言葉……ユキをこの人に譲るような言

葉……。
空を眺めて、決心できたと思ったのに。ゆれる。
「俺……ユキを」
「いつも、正也様の話ばかりしておられるのですよ」
……。
「正也様と出会ってから、正也様の話題が出ない日はありませんでした」
この人は、本当の笑顔でそう言っている。機械的だという印象のこの人が、人間味溢れる、はにかんだ表情で笑っている。
その時、あぁそうか……と気付く。
「はは……そうですか」
「……小さい頃は、少し塞ぎこんでいらっしゃるような印象があったのですけどね。それなのに正也様と出会って、接していくうちに、次第に明るくなられて……」
あぁそうか。
この人は、ユキの幸せを願っている。
あの家に飼いならされているユキを長年見続けて、それでも人間らしさを失わないでいてくれた事がきっと嬉しくて嬉しくて……それは俺のお陰だと思っている。
お母さんのような気持ちになっているのはこの笑顔を見ればすぐに分かる。本当は手放したくなんか無いのだというのも、表情にも態度にも言葉にも表さないが、恐らく思っている。
だけど願うのは、ユキの幸せなんだという事も、すごく伝わってくる。
「今ではもう、すっかり正也様の虜のようで……羨ましいくらい一途に思い続けていますよ」
「はは……もしかして一緒に居られるだけで幸せだとか、言ってました？」
「えぇ。毎日のように仰っていますよ」
そうだな、ユキ。

この人は間違いなくお前の味方だ。

ユキの家は近所にあって、歩いて五分ほどしかかからない。と言っても、太陽が沈んでしまって辺りはすっかり暗くなっており、街灯の無い細い道を通らなければならない。という事で、俺は奈緒さんをあの家まで送りにいく事になった。

「わざわざご足労すみません」

奈緒さんは本当に申し訳なさそうに何度も頭を下げる。

職業柄か、基本的にこの人は腰が低く言葉使いも丁寧で、良く出来た女性という印象を俺に与えた。今までの「機械的」というイメージは、もう俺の中には無い。

「いえ、全然いいんですよ。危ないじゃないですか」

俺は奈緒さんを制止するように左手をぶんぶんと振る。年上の落ち着いた雰囲気を持っている女性に何度も頭を下げられると、どうしていいのか分からなくなってしまう。

とりあえず頭の中で話題を模索する。何か話題を見つけなければこの人は道中ずっと頭を下げてそうだ。

「え～っ……と……奈緒さんは何年間ユキの家に努めてるんですか？」

最初に思いついたのは「今付き合ってる人居るんですか？」だったのだが、あのでかい家に俺が覚えているだけでも十年近く勤務している現状を考えると、付き合ってる人なんかは居ないという事がすぐさま分かって、これは愚問だという事に気付いた。

「え？　そうですね……かれこれ十四年くらいになるでしょうか。あのお屋敷にと言いますか、あのご家族様に雇われてですが」

「へぇ……じゃああれですね、ユキが四歳くらいの時からですか」

「そうですね。最初は家政婦と言うより子守りとして雇われていました」

俺の見たところ奈緒さんの年齢は三十二か三と言った所だろうか。もし高校を卒業してすぐに雇われたのだとしたら年齢的には合って

いる。
「あのお屋敷に移住をしたのが十年前ですから……月日が流れるのは早いものです」
「あ～……そうですね。俺とユキが出会ったのも十年前って事になるのか」
そう考えたら、なんだかあっという間だったような気がする。
広い空き地にユキの家が突然建って、呆気にとられて眺めている俺の後ろからユキが話しかけてきて……。
その時から俺とユキの付き合いが始まった。
なんだかまるで昨日の事のように思い出す。ユキとの思い出は、全て鮮明だ。
「本当に早いもんですね、十年って」
「あははっ。何言ってるんですか。正也様にとっての十年は、決して短いものではなかったでしょう？」
奈緒さんはまた笑ってみせた。
空が曇っていてほとんど明かりの無いこの夜道では、彼女の顔はまるで十代の少女のように屈託が無く映り、驚く。
「正也様の話をユキ様から聞いて、そして実物の正也様とこうして話していると、本当にそう思います。私の十代の頃なんかより、よっぽどしっかりしていらっしゃって……」
「いや、そんな……」
「正直、ユキ様が羨ましいですよ」
「え？」
「いい男に、なりましたね」
弾むような声でそう言ってのけた奈緒さんの顔は、立ち並ぶ木々の影のせいで、見えなかった。
その会話からお互い無言で歩いていた。と言っても時間にして三十秒も無かったと思う。しかし俺にしてみれば、恐ろしく長い三十秒だった。

「ありがとうございました。お陰で無事辿り着く事が出来ました」
奈緒さんの声を聞いた瞬間、とてつもない安堵感を得ていた。
別に奈緒さんとの会話に何か難があった訳でも、特別気まずかった訳でも、変な会話をした訳でも無い。俺はただ褒められただけ。それなのに俺は一体何に対して安心しているのか……良くわからない。
「全然気にしないでください。それよりも奈緒さん、これから色々と大変なんじゃないですか？」
奈緒さんは「はは」と笑ってみせた。ユキの家の両門に装飾として取り付けられているライトが彼女の顔を照らしているので、今度は表情が良く見えた。彼女の顔は少し苦笑いだ。
「確かにそうですね……ですが、ユキ様が私に申し付けてくれた初めての我侭ですから、頑張るつもりです」
彼女は胸をポンと右拳で軽く叩いてみせる。そしてもう一度「はは」と笑った。
……やはり、この姿が本来の奈緒さんなんだろうなと思う。今まで、それこそ十年間「機械的」だと感じていた事がなんだか恥ずかしい。
「そうですか……お世話かけます」
俺は深く、深く、お辞儀をした。本当に心を込めて頭を下げた。
「……いいんですよ。それが私のやりたい事なんですから」
奈緒さんはそう言ってもう一度微笑む。ニコッと笑いながら奈緒さんも頭を下げる。
「ユキ様の事、よろしくお願いします」

あのボロアパートに帰ってみるとユキは既に風呂から上がっており、なにやら料理をしているようだ。玄関を開けた瞬間、香ばしい匂いが俺の鼻をくすぐる。そういえば最近飯を食べたという記憶が

無い。俺の腹は急に空腹を訴えた。
「おぉ……なんだ？　なんか美味そうな匂いがするな」
俺はあまりの空腹にいそいそと靴を脱いで、匂いにつられるようにまっすぐリビングへと向かう。
するとそこには、黄色い寝巻きを着てその上からやはり黄色のエプロンをまとったユキが台所に立っており、俺が帰ってきた事を確認すると「おかえりなさい」とにこやかな表情で迎えてくれた。
「ただいま。美味そうな匂いだな」
「でしょ？　おなか空いてると思って作ってたんだ」
ユキは視線をフライパンに戻し「今ねぇ、冷蔵庫の中にあったヤキソバ炒めてるの。でも冷蔵庫にもう何も残って無いから、明日お買い物にいこうね」と言いながら、幸せそうな表情で笑っている。まるで自分が世界で一番の幸せ者だというような表情だ。
冗談でも誇張でも無く、ユキの居るこの場所が、俺には天国に見えてしまって仕方が無い。ユキが立っているその空間だけが、まるで別次元のように、歪んで見える。
「……」
……幸せだな。底なしに幸せだ。
きっと俺も今、ユキと同じような表情をしているんだろうなと思う。顔の筋肉のどこにも力が入らず、自然と口元が緩んでいるのが分かる。
そしてそれを、ユキも感じてくれている事が、何よりも嬉しい。
「……」
なんか……凄いなって思う。
この世にこんな感情があっただなんて、知らなかった。
「ユキ」
「ん？　なぁに？」
俺の声に振り向いたユキの顔は、やはり笑っている。
「……愛してるよ」
伝えないと、狂ってしまいそうだった。

「……えへへっ」
ユキは握っていたフライパンの柄を離して、駆け足で俺へと向かって走り、抱きついてくる。思いのほか強く当たってきて一瞬よろめいたが、ユキの腕に支えられてなんとか立っていられた。
「……私も愛してる……すっごくいっぱい愛してるよ」
あぁ……その言葉だけで満たされる……。
体に電気が流れているようだ……。

「うめぇなこれ」
俺は一心不乱にユキが作ったオムヤキソバを食っていた。ヤキソバに薄く焼いたオムレツを乗せただけというお手軽な料理ではあるが、空腹のせいかやけに美味く感じる。
「美味しいかぁ。作ってよかったよ」
ユキはニコニコしながら俺がヤキソバに貪り食うところを見ていた。とても幸せそうに、目を細めている。
「ユキは食わないのか？　お前だって腹減ってるだろ」
「ん？　ん～あんまりおなか空いてなくて。全部食べちゃっていいよ」
そう言ってユキは水だけをコクンと飲む。

「このまま、終わらなければいいのにね」
ユキはぽつんと、小さい声で呟いた。

10．ユキとハル

この部屋にある唯一のカーテンを開ける。
予想通りの弱い光がこの部屋に入り込んで、まだ眠っている二人の顔を薄暗く照らした。
「……」
この部屋に布団がひとつしか無いという事に気が着いたのは昨日の夜中の事だった。お陰でひとつしかない布団を女性二人に奪われて、俺は仕方なく毛布とコートを羽織って壁に寄りかかるように眠る羽目になった。
「……首いてぇ」
と言っても、俺にそんな器用な事が出来るはずも無く、眠るまでに相当時間がかかった上に、起きてみたら首がもの凄く痛む。常に首を傾けておかなければならないほどだ。
せめて布団が二枚あれば川の字で眠れたのに……毎日これでは首が持ちそうも無いから、今日は一度実家に帰ってハルの分の布団を持ってこなければならない。
「はぁ……」
俺はため息を吐きながらユキとハルの顔を眺める。
幸せそうな表情を浮かべながらひとつの布団で眠る二人は、なんだか本物の姉妹のように見えて、なんというか……嬉しい。ユキの穏やかな寝顔を見ていたら、俺の首の痛みなんか本当になんでもない事のように思える。今吐いたため息も、もう一度吸い込んでなかった事にしたい。
「……はは」
そんな馬鹿な事を本気で考えている自分が、なんだか笑えた。
俺はまだ早朝だという事でとりあえずカーテンを閉めてその場に座り込んだ。そして昨日の出来事を思い返してみる。

昨日は……今までの人生で最高の一日となった。今までずっと友達以上恋人未満の状態で膠着していた俺とユキの関係が、ほんの一日で同居するまでの仲となったのだ。ハルという抑止力のせいでより深い仲という訳にはいかなかったが、俺はこれでいいと思っている。確かにユキの言うように俺達はもう始まっている。始まっているのだから、何をしても自由だとも思う。だけど、始まっているという事は、続いていくという事。この先何年も、何十年も共にしていこうという誓いを立てたのだから、焦る必要は全然無い。これから、少しずつお互い歩み寄っていけばいいと思っている。

ただでさえ俺とユキは幼馴染だ。幼い頃からお互いを知っているだけに、そういった事に対しての抵抗は大きい。長い膠着状態がユキと深い関係になることに対して俺を臆病にしている。だから時間をかけて、ゆっくり、ユキとの愛を育みたい。

「……」

と言って一応格好つけてはみるものの、やはりハルが居なければ昨日のうちに一線は越えていたかも知れない。俺の想いも、そしてユキの想いも、とてもじゃないが耐えられるとは思えない。俺かユキのどちらかが一歩踏み出していたら、その後はなし崩し的に堕ちていただろうと思う。現に今こうしてユキの寝顔を見つめているだけで、俺の中の黒いモヤモヤが胸の辺りで渦巻いているのが分かる。

このモヤモヤを言葉にすると、早い話、性欲なんだろう。ユキを見ているとドンドン大きくなっていく。それと同時に体もなんだか熱くなり、ジッとしていられなくなり、ソワソワして落ち着かない。

「……」

聖書によれば、色欲は七つの大罪のひとつであり、怠惰や強欲と同列の罪らしい。だからって訳では無いのだが、俺は自分の欲望を抑えるために痛いのを我慢して左手で拳を作り、自分の太股をバシンと叩いた。

……別に悪い事では無いだろう。愛には少なからず欲情が混じっているはずだ。むしろ流されるほうが人間にとって自然な流れであり、

そして流されるから繁栄が出来ている。
だけど俺は嫌だった。人間なんだから黒いモヤモヤが胸の辺りに湧き出てくるのは仕方ない。だけどユキをそういった対象に捉えるのが、冷静な俺が許さなかった。
バシンバシンという鈍い音が延々聞こえてくる。もう太股は痛いと感じず、ただ熱くなっていた。

シャーという音が俺の鼓膜に届く。他の音は一切聞こえてこない。
「……」
少し熱いと感じるくらいの温度のシャワーを浴びていた。頭を冷やすというか、落ち着くためにはとにかくユキから離れないといけない。
少し落ち着いて殴っていた太股を見てみると、拳より少し広い範囲がもの凄く赤くなっている。その中心部分は青黒くなっており、どうやら内出血しているようだ。
その痣を見ていると、なんだか馬鹿らしくなってくる。冷静を装って足をバシバシ殴っている俺は、どう考えても冷静ではない。早い話、欲を抑えるのに必死になって結局は自分を見失っている。
なるほど人間は欲からは逃げる事は出来ない。欲は自然と湧いてくるものであって、それを嫌悪する事は出来ても、抗う事なんて出来はしない。足をバシバシ殴っている間も、こうしてシャワーで頭を冷やしている今でも、俺の胸の中には黒いモヤモヤが確かに存在している。
……そしてそれは恐らくユキも同様に感じているはずだ。いや、むしろユキはその点において、俺以上に従順だった。昨日のユキの「今から沢山の思い出が欲しい」という台詞は、今思えばそういう事なんだと思う。
昨日の夜、ハルがこの部屋に到着するまでの間、ユキはやたらと俺にスキンシップを求めてきた。俺があぐらをかいてテレビを見ている時、突然ユキが俺の目の前に現れて、微笑みながら「座ってもい

い？」と、俺の脚を指差して言ってきた。俺は戸惑いながらも断る理由が思い浮かばず「いいよ」と言ってしまった。それからは……ユキが「えへへ」と笑いながら俺の腕を抱きしめて胸に引き寄せたり、俺に寄りかかってきたり……と、今までのユキからは想像も出来ないほど積極的だった。もちろん俺は終始心臓がバクバク言っており、膨張する体を抑えるのに必死だった。

……ここだ。なんで抑えるのに必死にならなければならないのか。ユキが半歩踏み出してくれたと言うのに、俺はなんでその半歩も歩み寄れなかったのか……。

「……あぁ。そうか」

そう考えた時、俺は理解した。

俺は、ただの臆病者だったんだ。

嬉しかったのにな……ユキがあんなに密着してくれてこの上なく嬉しかったのに、格好つけて、冷静ぶって、何も出来なかった。今思うとそれが逆にすげぇ格好悪い。さっき俺が自分の太股を殴り続けていたのも、今こうして頭を冷やすためにシャワーを浴びている事も、もの凄く格好悪い。

「……」

ユキに比べて、俺は覚悟が足りなかった……という事だ。幼馴染で抵抗があるだとか、色欲は罪だとか意味の分からない事を理由にして、俺は理知的だとか冷静だとか思っていた。

サイッテー、だ。格好悪い。

「くっ」

俺はシャワーのノズルを力いっぱい締めた。

シャワーから上がり、服を着て頭を拭きながら、今考えるとユキがあの時間に風呂に入ったという事は、ユキのほうの準備をしていたという事だったんだろうな。なんて事を思った。

「……」

俺はユキの顔を眺めた。

まだ薄暗くてハッキリと見る事は出来ないが、ユキの表情はうっすらと笑顔を浮かべているような気がする。笑顔で、曇りも何も、無いような気がする。

ずっとずっと、俺のほうが頭が良いと思っていた。小学、中学とユキに勉強を教えていたのは教師ではなく、俺のほうだという自負がある。だからこそユキは倍率の高い進学校に入れたんだと思っている。そしてそれは今でも間違いじゃないと思っている。

だけど勉強以外の事となったら、ユキは俺なんかよりもシッカリしてて、考えているかどうかは分からないが、正しい答えを導き出す。

「ごめんな……」

俺はついユキへと近づく。まるで引き寄せられるように、ユキの顔へと近づく。

「……」

眠っているユキを起さないよう、静かに、優しく、ユキの唇に自分の唇を重ねた。

ユキの唇は柔らかく、暖かく……。

「おはよう春香ちゃん」

目覚まし時計が鳴る前にハルは起きた。ボサボサの頭を掻き毟って「んぁ～」という寝ぼけた声を発してアクビをする。

「さぁ、いい天気だぞ。今日も一日頑張ろうではないか」

俺はカーテンを開けてこの部屋に明かりを注ぐ。しかし全然いい天気では無く、相変わらずの薄暗い光がわずかに入ってきただけだった。

「早く顔を洗って朝飯を作ってくれたまへ。期待しているぞ」

「何？」

まぁ、そう思うだろう。俺はかつてハルの前でこんなにテンションを上げた事が無い。

「何って事はないだろう。ほらほら、気持ちのいい朝だぞ。春香ち

ゃんも元気だしていこうじゃないか」
　言葉が纏まっていない事が自分でも分かる。「何？」に対しての返事に全くなっていない。
「いや……ウザい。春香って呼ぶなよ」
　もし逆の立場だったら俺もハルと同じ事を言っていただろう。それくらい今の俺はウザい。
　だけど、なんだろうな……ずっと一人で暗く考え事をしていたからだろうか、ハルが起きてくれた事が凄く嬉しい。やっと会話が出来ると思ったら不思議とテンションが上がってしまう。
「まぁまぁそう言うなって。ほら早く顔洗って。朝飯作ろうぜ」
「……洗うけどさ」
　ハルは怪訝そうな表情をしながらも、隣で眠っているユキを起さぬよう、ノソノソと布団から這い出て「くぁ……」とアクビを死ながら洗面所へと向かって歩いていった。意外にもハルのその姿が俺の目には新鮮に映り、なんだか俺の心を暖める。
　今まで疎ましいとお互いが思っていたからだろうか、ハルと俺の関係が少しだけ変化しているのが、やはり嬉しい。

「なんかあったの？　やけに機嫌いいじゃん」
　この部屋にかろうじて残っていた食料であるソーセージと卵を、ハルは同じフライパンに入れて焼いている。ハルが料理をしている場面をじっくりと見るのはこれが初めてで、本当に手際がよく驚いた。
「いや、あれなんだよな」
　ハルは三人分の皿を取り出して出来上がった三つの目玉焼きと焼いたソーセージをもりつけた。ハルが何か行動をするたびにゆさゆさと揺れるツインテールがなんだかやけに気になって、ひっぱりたい気分になる。
「あれって何？」
「なんつーかよ、なんつうか……」

俺はついハルのツインテールを引っ張った。
「たっ」
「なんつうか、幸せじゃねえか？」
「……アンタ、首寝違えてるよ」
「知ってる」
ハルは変な目で俺を見つめる。
「頭も変になっちゃったんじゃないの？」
「かもな」
俺は「ははは」と笑った。
ハルはまた怪訝そうな顔をして頭をぼりぼりと掻く。

俺は折りたたみ式のテーブルを部屋の真ん中に広げた。三人で食事するには少し手狭ではあるが、三人全員が近くに集まるので俺は嫌いじゃない。
「ねぇ、そろそろユキさん起したほうがいいんじゃない？　もう七時過ぎてるよ」
ハルは俺が広げたテーブルの上にさきほど作った目玉焼きの乗った皿を置きながら「あ」と呟いた。
「起すで思い出したけどさ、アンタ今日の朝は発作どうだったの？」
「あぁ、発作は起こらなかったし、夢も見なかったよ。眠りが浅かったのかね」
俺はそれに付け加えるように「首は寝違えたけどな」と言ってもう一度笑ってみせる。
「へぇ～……一時的なものだったのかね」
「んまぁ、そうかもな。だからユキを起した時も焦るんじゃねぇぞ」
「は？」
俺にはあの感覚が自分を殺すものじゃない事が分かっていた。だから、ユキも殺さないと思う。
もう「何故」なんて考えるのはやめる事にした。考えたって仕方が無い。起こるものは、起こる。

「ユキ、朝だぞ」
俺はユキの肩を揺さぶった。華奢なユキは面白いほどに体を前後に揺らす。
「ユキ、起きろ」
俺がそう言った瞬間、ユキは昨日の夕方のように目をカッと見開いた。
「あぁっ！！　あああぁっ！！」
「ユキ、大丈夫だ。息をしろ」
俺はユキの体を抱き寄せて、背中を優しくさする。
「はぁっ！！　はぁっ！！　ああぁっっ！！」
ユキは一生懸命に息を吸う。息を吸うたびに聞こえてくる「ひゅぅ」という呼吸音が相変わらず不安にさせる。
「え……？　ええ……？　なんでっ……？」
「心配するな、大丈夫だ」
俺は自分に言い聞かせるように言葉を発していた。
……そう、焦ってはいけない。俺が取り乱していては駄目だ。この感じは決して殺さない。絶対に大丈夫。
「ぁぁぁあああっ……！！　はぁっ……はっ……はっ……」
「……兄貴、この部屋何か憑いてるんじゃ……」
「違うって。それは違う」
俺はユキの背中をさすり続けた。すると思っていた以上にユキの容態はすぐに回復し、ものの一分ほどで呼吸が安定してきている。
やはり思ったとおりだ。俺にしてもユキにしても、これで死ぬような事は絶対に無い。
「おはよう、ユキ」
俺はニコッと笑って汗だくのユキの頭を撫でる。本当にびちょびちょで、今すぐにでも風呂に入って汗を流して欲しい。
「……はぁ……はぁ……タダ君……」
ユキは目に涙を溜めて、手を伸ばして俺の首に回し、自らの体重を預けた。同時に激痛が走るが俺はそれを顔には出さずに、ニコッ

と笑いながらもう一度「おはよう」と言った。
「……タダ君……」
ユキは、顔をクシャッと崩し、情けない声で俺の名を呼んだ後、両目から涙を流した。そして俺の首に巻きつけていた腕を引き寄せ、力いっぱい俺へと抱きつく。すげぇ、痛い。
「どうした？　怖い夢でも見たのか？」
「……」
ユキの呼吸はもうおさまっていた。もう「ひゅぅ」とも「はぁ」とも聞こえてこない。
それでも、ユキは無言だった。今だったら普通に話も出来ると言うのに……何故か口を開かない。
「……どうしたんだ？　そんなに怖い夢だったのか？」
「……知らないの……？　それとも、覚えてないの？」
……なんだ？
「どうしたユキ？　なんの事だ？」
「……」
「ユキ？」
「なんでも、ないよ」
ユキはそう言ってより力強く俺を抱き寄せる。ユキは俺が寝違えている事なんて知らないのだから仕方ないと言えば仕方ないのだが……。
「ユキ……いや、嬉しいんだけどさ、俺ちょっと首寝違えててよ」
さすがに尋常では無い痛みからユキを引き離そうとする。しかしそれでもユキのしがみつく力は一向に弱まらず……いや、それどころか、どんどんと俺の首を絞めて……。
「ユキ……ッ……痛いんだけど……」
「……」
ユキの顔は俺の真横にあるので、表情は見えない。見えないのだが、この力はただ事では無い。
ユキはもう既に俺の首にしがみ付くというより……むしろ絞めて

いるように……。
「ユキさん！！　何してるんですか！？」
「……私……離れたくない……タダ君から離れたくない」
「兄貴、今首寝ちがえてるんですって！」
「ハルちゃんにも、渡さないよ。タダ君は私のモノなんだから」

11．ユキ6

目が覚めると、いつもの天井。
少し汚くてあちこちに染みが出来ている、俺の部屋の天井だった。
「あ、兄貴起きた？」
突然かけられた声の方向へと目を向けてみると、そこにはハルが制服姿のまま台所に立っているのが見えた。そしてその手前には、申し訳なさそうな表情をしながらうっすらと涙を浮かべているユキが正座の姿勢で座っていた。ユキの姿は何故か寝巻きのままだ。
俺が起きた事に気付いているようだが、なんだか目を合わせてはくれない。
「……なんだ？　何があった？」
「いやぁ、そこまで貧弱だとは思っても見なかったよ。まさかユキさんの腕に絞まって堕ちるなんてねぇ」
ハルがケタケタと笑う。その様子を見ていたユキが、より落ち込んだかのように俯いてしまった。目に溜めていた涙をぐいっと寝巻きの袖でぬぐう。
しかしそうか……俺はユキに抱きしめられて……情けない事にそのまま気絶してしまったんだろう。息が出来ないほど絞められていた訳では無いと思うのだが……確か頚動脈を押さえて何秒かしたら堕ちるとかなんとか……でもまぁ、今が何時なのか分からないが、少しマトモに眠ったお陰で首の痛みは随分と楽になっていた。
「ユキ、今何時？　俺はいいけどユキは学校行かなきゃマズイだろ。もし行くなら俺もついてくからさ」
「……怒らないの？」
ユキは相変わらず俺の目を見ない。
俺はしばらくユキの顔を見つめていたが、キョロキョロとあちこちに視線を移して、一向に俺の目は見てくれなかった。「はぁ」と小さくため息をついてハルの顔を見てみるが、ハルもどうしたらい

いのか分からないらしく少し困った顔で笑っていた。
「……駄目だろユキ。痛いって言ってるんだから離してくれないと」
「……ごめんなさい……」
良く見てみたらユキの髪の毛はまだ濡れている。どうやら俺はそんなに長い時間眠っていた訳ではなさそうだ。
「うん。それでユキ、今何時？」
「えっと……七時半かな……」
今からユキにシャワーを浴びさせて学校に向かって……ではもう遅刻する時間である。遅刻する時間ではあるのだが……汗まみれのままユキを学校に連れて行く訳にはいかない。
「ユキ、とりあえずゆっくりシャワーを浴びて来いよ。遅刻とか気にしないでさ、本当にゆっくり入ってきてもいいから」
「……うん」
そう言ってユキはゆっくりと立ち上がり、俺の目を見た。
「……ごめんね」
最後に残した言葉は、なんだかとても力無く聞こえた。

「んじゃ、私お邪魔みたいだから、先学校行ってるね」
ハルは二人分のコーヒーをカップに注いでくれた。テーブルの上を見てみると朝食として作ってあった目玉焼きにはラップがしてある。
「あぁ……なんかわりぃな」
「いやぁ、別にいいよ。でも帰ってきたら色々話聞かせてよね」
ハルはそう言って玄関へと向かって歩く。そういえばハルの頭はもうツインテールでは無く、いつも通りの直毛になっていた。
「じゃあ、健闘を祈る」
「何が」
「さぁね」
ハルはそう言うとイタズラっぽく「ははっ」と笑って玄関から出て行った。何かを含んでいるかのように聞こえたその笑いが、嫌に

耳についた。

「……さて」

ハルを見送った後、俺は立ち上がって上着を脱いだ。そして洗面所へと向かって冷水を流す。

一度気絶したからだろうか、もう一度顔を洗いたくなった。頭がスッキリしていないとか油が溜まったとかではなく、なんだか顔を洗いたい。

ザバッと一度水を被る。この季節の水道水はやけに冷たくなっており、一度被っただけで体の芯まで冷え込む。

「……ふぅ……」

それでも俺は二回、三回と水を被った。もはや冷たいというより、痛い。皮膚が硬くなるような感覚がする。そして次第に内側から熱を感じて、まるで火照ったかのように頬が赤くなっている。

「……」

やはり、さっぱりする。それに、気合が入る。

冷たいし痛いし、一度だって水なんか被りたくは無いのだが、それでもやはり体は少し喜んでいるように思える。身が引き締まって、同時に心も充実してくる。

……大丈夫。俺は全然大丈夫。

「どんな夢を見たか、問えるさ。何を思って首を絞めたのか、問えるさ」

俺は震える腕を押さえつけ、自分にそう言い聞かせた。

風呂場のドアがガチャリという音を立てて開いた。その瞬間に何故か俺は緊張する。

緊張する必要なんて無いはずなのに。何故こんなに心臓がバクバクと音を鳴らすのか。

「ユキ、スッキリした？」

「うん」

開いたドアから出てきたユキは、体にバスタオルを一枚だけ巻いた状態だった。髪の毛は乾かしていないようで、まだ濡れている。
ユキのその姿は完璧なプロポーションだった。しっかりと出る所は出ていて、引っ込むべき所は引っ込んでいる。まるでグラビア雑誌に載っている一枚の写真のように俺の目には映っていた。
「……おいおい」
つい、出てしまった言葉だった。
「……おいおいって……」
……そうだよな。確かに「おいおい」はおかしい。俺達はもう付き合っているんだから……こういった事には慣れていかなければならない。ユキだって、おそらく勇気を振り絞ってその格好で出てきたんだ。「おいおい」は失礼だ。
「傷付くなぁ……」
「……わりぃ……いや、綺麗だよ」
「……へへ……ありがとう」
ユキはようやく少し笑顔になった。今まで風呂に入っていたせいなのか、それともやはり恥ずかしかったのか、ユキの頬は赤い。
「……こっち来いよ」
俺は自分の座っている場所のすぐ隣をポンと叩いた。するとユキはより頬を赤く染めて立ち尽くす。
「……」
「……そこ寒いじゃん。湯冷めしちゃうぞ」
俺のこの言葉を聴いてユキは小さくうなずく。そして胸の辺りで止めてあるバスタオルの接合部分を腕で押さえながら、ゆっくりと、俺が座っている場所まで歩いてきた。
……なんと言うか、モヤモヤ半分、恐怖半分と言った感じ。
「……」
何故、何も喋らないんだろう。ユキは今はもう目の前にいる。目の前に立っていて……ユキの綺麗な足が、バスタオルの下から伸びているのが見える。

それなのに、俺も、ユキも、何も言えなくなってしまった。

「……タダ君」

しばらくして、ついにしびれを切らしたユキが喋りだした。

その瞬間、俺の体に電気が走る。

「……」

「タダ君」

「ん？」

「隣、いくね」

「うん」

あぁ……緊張してる……何を話す……？　こんな姿のユキに対して「何で首しめたの？」って聞くのか？　「どんな夢を見たの？」って聞くのか？

なんだかどれもが場違いなような気がする。でも場の流れに乗るという事は……。

「うぁっ」

ユキが俺の隣に座った時、俺の視線はついユキの胸へと向いてしまった。

普段のユキは、ちょっと天然ぽくて、ぽけっとしていて、おっとりしているイメージがある。そんな子供っぽいユキなのに、その体は意外にも……。

「……あははっ。タダ君って意外とあれだね……結構見るね」

「……そ……」

なんだ「そ」って……「そ」から俺は何を言おうとしたんだ……。

顔が火照るのが分かる……顔がカッと熱くなる。

一生懸命「そ」から始まる言葉を捜す。「そ」……。

「……そんな格好されて見ない奴なんて居ないよ」

「……そっか。私の体って……私以外には奈緒さんにしか見せた事無くて……奈緒さんは褒めてくれるけど……不安だったよ」

ユキはそう言って、俺の腕に絡み付いてきた。絡み付いてきて、

その腕に、ユキの胸が……。
「えっとさ、私……ね。私、死んでもいいの」
「……何？」
「……えっと……」
ユキはより俺の腕に絡みつく。ユキの胸の間に俺の腕が埋まる……それが服越し、タオル越しだというのに……体温が伝わってくる。錯覚なのかも知れないが、確かに、伝わる。
「私……死んでも……いいの……タダ君と……ね？　分かるでしょ……？　タダ君と……」
「……ちょっと……ユキ」
俺と死んでも良い……？
何を言っているんだユキは……この話は、理解できない。何故死ぬとか、そういう単語が出てくるのか……。
ユキは夢の中で、何か怖いものでも見たのか？　それとも俺の発作と自分の発作の事を言っているのか？
「ユキ……何？　俺と、死んでも良いって、言ったのか？」
ユキの顔は、歪んだ。そして……俺の首へと腕を回して、俺の体へと思い切りよりかかり、俺を床へと押し倒す。
「……違う……私がね、死んでもいいの……」
ユキはそう言って、俺の上に覆いかぶさる。胸で止めているバスタオルの接合部分が、今にもほどけそうなほどに緩んでいた。
「タダ君と、一緒にいたいよ……ホントはずっと一緒にいたいよ……」
「……」
分からない。ユキが何を言っているのか全然理解できない。
まるで俺が死ぬような……。
「俺が死ぬのか？」
「……ううん」
ユキは、俺の顔に優しく触れる。俺の顔に両手を添えて、そっと撫でる。そして、赤く火照ったユキの顔が、どんどんと俺の目の前

へと迫ってくる。
「……死なせないから……」
「……ユキ、待って……」
ちゃんと説明してくれないと、やはり怖い。
なんで、生きるか死ぬかの話になっているんだ？　ユキは一体、何を思っているんだ？
「……待てないよ」
「待って……ユキ、どうした？　何があったんだ？」
ユキの顔が、今はもう目の前にある。唇と唇が触れる直前で、ユキの顔は止まっていた。うっすらと微笑んでいるように見えるユキの表情が、女神にも見えていたあの表情が、なんだか、怖い。
……でも、何故だろう、これは初めての事じゃないような気がする。同じような事が過去にもあったような……まるでデジャヴのような既視感が俺を襲っている。
いつだろう……いつこんな事があった？
「……ううん、ごめんね……ごめん、変な事言ったね」
そう言ってユキは一瞬悲しい表情を作って、そのまま顔を離し、俺の上から降り、俯き伏せった。
ユキのとても小さい背中がフルフルと震えている。何かに怯えているかのようにも見えるその背中は、とても、とても、弱弱しい……。
「……ご……ごめんユキ……ユキあの……」
ユキは多分、泣いている。
俺にとっては本当になんの事だか分からない。何故ユキがあんな事を言ったのか。そしてユキがなんで泣いているのか。全く分からない。
だから俺は何に対して謝るべきなのか分からないまま、謝っていた。
「……えっと……ユキ、聞きたい事があるんだけど……」
「……何？」

「……死ぬとか、生きるとかって……何の話？　あと、俺の首、絞めたろ……なんで絞めたんだ……？」
「……ごめんね、首絞めた訳じゃないんだよ。ただ、離したくなかっただけ……これは本当だよ。信じて」
ユキの声はやはり背中同様、少し震えている。
涙声とまでは言わないが、普段以上に力ないと思わされた。
「……じゃあ、死ぬとかって言ったのは……」
「……いいの。忘れて」
……忘れられる訳無いじゃないか。
ユキが俺と同じ発作を起したのも不気味と言えば不気味だし、よくよく思い返せば俺と同じ発作が起こってから、ユキの様子が少しおかしくなっていた。
突然俺に愛の告白をしてきたし、この部屋で一緒に住みたいと言い出した。そしてやけに積極的になって……今では裸同然で俯き伏せっている。
全て、今までのユキでは考えられない事。
「ユキ……風邪ひくぞ。震えてるじゃねぇか」
「……暖めてよぅ」
「……」
「……なんてね」
……なんで「うん」って言えないんだろうな……本当に俺って奴は……。
いつまで臆病者でいるつもりだ……いつまで格好悪い男でいるつもりだ……。
ユキが不可思議？　そんな事問題じゃないはずだ。ユキはここまで勇気を振り絞ってくれたんだ。ユキの想いに答えないで、何が「愛してる」だ。
「……うん」
俺は、精一杯の声を発した。
ユキに届いているのか分からないほど小さい声だが、俺は絞り出

すように、ユキに伝えた。
「……暖めてやるから……おいで」

12．ユキ7

「えへへ……やったぁ」
顔を真っ赤に染めたユキが顔を布団で半分隠して俺の顔を見て微笑んだ。
なんていうか……ユキのそういった子供っぽい仕草がとても可愛らしく、思わず抱きしめたくなる。
「やったって何？」
「ん……？　えへへ……思い出ができて、やったぁって」
本当に嬉しそうな顔をして、本当に嬉しそうな声を上げて、本当に、喜んでいる。
……「痛い」と言って泣いていたのに……ユキの顔を見ていたら、つられて泣いたというのに……今ではもうユキは本当に嬉しそうで……俺もきっとそんな顔をしているんだろう。
今思うと、なんでもない事だったように思える。ユキが告白してきた事も、一緒に住みたいと言ってきた事も……ただこんな幸せを味わいたかっただけなのかも知れない。実際今は、俺もユキも、凄く幸せだ。告白に答えてよかったと思っているし、一緒に暮らしてよかったと思っている。
そして何より、ユキの想いに答えて、良かった。
「……これからも、いっぱい思い出作って行こうな」
「あははっ。いっぱいするって事？」
俺はつい顔を赤くした。ユキの無垢な表情からは想像も出来ないような言葉だっただけに、なんだかドキドキする。
「……うん。いっぱい、しよう。それと、色んな所に行きたい。ユキと一緒に色々なものが見たい」
俺はユキの頭を抱き寄せて胸に押し付けた。ユキの体に抵抗は感じられず、簡単に引き寄せられる。
「うにゃん……それもいいけど、私ね」

ユキは抱き寄せられたままの状態で俺の顔の横まで這って来た。
その時に発する「よいしょ、よいしょ」という声がまた可愛くて……愛しくてたまらない。
「私ね、タダ君との子供が欲しい」
俺の耳元でユキは、少し照れくさそうだけど弾んだ声で、そう言った。
「何回でもしようよ……ハルちゃんが帰ってくるまで、何回でも……」
そう言ってユキは、俺の首筋を「かぷっ」という声を漏らしながら、軽く噛んでくる。ただそれだけの事だというのに、俺の首はまるで性感帯のようにビリビリと……感じている。
……まさかユキがこれほどまで欲にまみれるなんて、思ってもみなかった。今までのユキから今のユキを想像するなんて、出来るはずがなかった。
だって俺のユキに対するイメージは、純情で、清潔で、優しくて、ちょっと天然で……だけどシッカリしてて、頑張り屋で、可憐だった。なのに今のユキは、まるで色魔に魅入られたかのように俺とまぐわいたくて仕方ないらしく……。
「ユキ……ッ……そこ駄目だよ……」
そして俺も、ユキが欲しくて欲しくて、たまらない。
もう心に黒いモヤモヤは感じられない。あのモヤモヤはきっと俺と同化して、俺自身があのモヤモヤになってしまってて……俺は色魔になってしまったんだと思う。
そしてそれは、決して悪い事とは思えない。
だってユキの顔が、この上なく幸せそうに見える。

「はぅあぅ……」
「何それ？」
「あはは……疲れちゃったの」
ユキは俺にペタッと重なるように覆いかぶさっていた。どうやら

脱力しきっているようで、ユキの体に一切の力が感じられない。
　といっても、それは俺も同じだった。もう体のどこにも力が入りそうも無い。二人重なったままずっとずっと眠っていたい……ユキの存在を感じて、体温を感じて、呼吸を感じて、鼓動を感じて……ずっとこのままでいたい気分だ。
「……少し寝ないか？　俺も疲れちゃって……」
「……私もそんな気分だけど、ハルちゃん帰ってきちゃうし、お買い物も行かなきゃだし……もう二時だよ。起きないと」
　そんな時間にもなっていた事に俺は正直驚いた。ちょっと前まで八時過ぎだったような気がするのだが……。
　時間の流れが速いと感じる。まるで子供の頃、友達と外で遊んでいた時のような時間の流れだ。楽しい時間はいつだって早く過ぎる。
　つまり、ユキとの情事が、俺にとっては凄く楽しい事なんだろう。実際、ドキドキというより、ワクワクのほうが強かった。
「ね？　ハルちゃんが帰ってくる前にお買い物にいこうよ」
　ユキは俺に預けていた体をガバッと起して「ん～……」と背伸びをした。薄暗い部屋の中だというのに、俺の目の前で背伸びをするユキは、まるで彼女自体が光を発しているかのように、輝いて見える。
　今までそんなユキと……と考えたら、なんだか不思議な感覚に陥る。今までの事が夢だったのでは……とすら思えてしまう。それくらい、彼女は美しい。
「やだ……また見てる……恥ずかしいよぅ」
　ついつい見入ってしまっていたようだ。ユキは頬を赤く染め、毛布で胸を隠して「もうだめだよ。また今度ね」と言って舌をチロッと出して微笑んだ。
　……さっきのユキの言葉じゃないが、俺も思う。
　俺は、ユキとなら死んでも構わない。と。
「ユキ、あれだな。死ぬとかって話、なんとなく理解できたよ」
「……ん？」

「今なら死んでもいいって思えるよ」
俺はユキにむけて、ニコッと微笑んで見せた。
するとユキもニコッと笑い、俺にやさしくキスをする。
「お買い物いこっ」

ユキの普段着をお目にかかれる機会は週に一度だけ。それも三時間も拝めない。
ユキの普段着のセンスは本当に良い。スカートは白地に赤色の細いチェックが入っていて、履くというより腰に巻くといったタイプのものだ。スカートの裾から伸びる足には股下四十センチくらいまで黒いスパッツのようなものを履いている。たしかレギンスと言ったか……それが不思議と下品なように見えず、むしろ上品なユキだからこそ似合う服のように感じる。
上着もやはり基本白色だ。モサモサとしたセーターを着ていて、その上には見た目少し硬いと感じさせるような白いコートを羽織っている。そのコートについている帽子の部分には茶色のファーがついていて、それがユキのお気に入りポイントだそうだ。
俺にとってはそのファーがあろうが無かろうがどうでも良いのだが、まぁ何にしても、ユキはセンスが本当に良く、隣を歩くのが恥ずかしい。
俺の格好は黒い綿パンに黒いパーカー、そして黒いニット帽子だ。ユキは「似合ってるよ」と言ってくれたのだが、こんな安易な格好で出かけた事に対して後悔している。と言っても、格好良い服なんて持ってはいないのだが……。
「なんか雨降りそうな天気だね。少し急ごうか」
ユキは俺の手を握って笑顔で引っ張る。
ユキは俺の服装の事なんて全然気にしていないようだ。本当に笑顔で「ほらほらぁ～」なんていいながら俺を急かす。
……俺は正直言って、あまり格好よくは無い。顔だって並だと思うし、服装に気を使っている訳でもない。だから、ユキと手を繋い

で歩いている事に対して負い目を感じてしまう。「何故あんな男があんな美人と……」と思われているんじゃないかと思ってしまう。
　お互いが制服の時は手を繋いでいなかったし、意識しなかった。だけど今のユキの服装は……どこからどう見ても只者じゃない。
「なぁユキ」
「何？　はやく行かないと」
「俺……っていうか、ユキさぁ、俺と手繋いで歩いて恥ずかしくないの？」
　ユキは俺がこの言葉を発するまで笑顔だったが急に足を止め、眉毛を吊り上げた。まるで睨むように……いや、睨みながら俺の顔を見る。
「いや、ハルにさ、俺にユキは似合って無いって言われるし……」
「じゃあ、ハルちゃんが帰ってきたら文句言ってあげるよ」
　ユキの腕には再び力が篭る。俺の体ごと動かそうとしているように思えるほどの力だ。
「ちょっと……待ってユキ。文句とか言わなくていいから」
「言うよ。絶対に言う。彼氏を馬鹿にされて怒らないなんて、彼女として失格だよ」
　ユキはよりグイグイと俺を引っ張る。俺は抵抗するのも違うと思い、ただただユキに引っ張られていた。
「タダ君は格好悪くなんか無いよ。格好つけたら、絶対格好いいんだから」
　……それは褒めているのだろうか……イマイチ嬉しい気分にはなれない。
「……いや、ハルは俺の事格好悪いって言ってる訳じゃなくて……ユキが可愛すぎるって言ってるんだよ」
　そうなんだよ。俺は別に卑屈になっている訳じゃなくて、ユキが可愛すぎるから俺じゃあ見劣りするんじゃないかと思っているだけだ。
　ユキはただでさえ可愛いのに、こんなに似合う服を着られると、

そこらへんの男じゃあ太刀打ちできないような気がする。それこそテレビに出ている俳優やアイドルなんかじゃないと、とてもじゃないがつり合いそうも無い。
「……なんか可愛いって言われてもあんまり嬉しくない」
「……いやいや、ホントに。ユキは可愛」
「タダ君、ひとつだけハッキリ言っておくけどね」
ユキにしてみれば珍しく声を張っている。いつもは猫なで声一歩手前のような声をしているのに、今のユキの声は良く耳に届く。
「タダ君は、私にとって、高値の花だったんだからね」
違うか、心に届いているんだ。
「……またまた」
俺は笑ってみせる。
「本当だよ。だからずっと、好きって言えなかったんだよ」
……ユキのまっすぐな目が嘘じゃないと俺に教えていた。
「そっか。分かったもう言わない」
「うん。約束ね」
これでユキとの約束は三つになった。
ユキの顔はもう笑顔になっていて、俺を引く手にはもう力強さは感じず、優しい暖かさが感じられる。
「ほら、雨降りそうだから少し急ごうよ」
「だな」
確かに、空は今にも泣き出しそうだ。

コンビニなんかは良く行くが、スーパーという場所に足を踏み入れた記憶が全然無い。幼い頃は母親が居なかったし、親父の再婚相手である新しい母親とはそんなに仲が良くなかった事がその原因なのだろうか。
三時手前という微妙な時間だと言うのに、スーパーの中はいわゆる専業主婦という人達で溢れかえっていた。一体どこから湧いて出てきたのか、駐車場もほぼ満員状態だった。

「……」
奥のほうでは野太い声の男の人がマイクで「今日は火曜日。特売日だよ」という呼び込みをしている。鳥の胸肉がグラムいくら……と言われても俺にはそれが安いのか高いのか判断できない。
「ユキ、鳥の胸肉がグラム七十八円って安いの？」
「え……？」
「そもそもグラムって？　まさか一グラム七十八円じゃないよな？」
「え……？」
まぁ、分かっていた事ではあるが、俺もユキも、基本的に世間知らずだ。
ユキは料理こそ経験があるものの、自分の足で食料調達をした事なんて、恐らく皆無だろう。なんと言ってもユキはお嬢様だ。そして俺も、スーパーに買い物に来たのは、もしかしたらこれが初めての経験かも知れない。だから知る由もない。俺達は集まる人ごみの一番外で、店員と主婦達のやり取りをただボーッと眺めているだけだった。
「……胸肉って、あのモサモサしてるやつだよな？　よくケイが塩つけて食ってたやつ」
「あ、うんそう」
「……あれあんまり好きじゃないからいいや。違うの探そう」
「……うん。そうだね」

今日の晩飯はもう鍋と決めてあるらしい。買い物籠にはネギとモヤシと白菜とシメジが既に入っている。あとは魚か肉か……という選択だけだそうだ。
しかしユキとハルが集まると、何故こうも鍋料理が多いのか。今のように寒い時期ならまだ分かるのだが、奴らは八月の夏休みにも鍋をやりたがる。
俺がまだ実家に暮らしていた頃、ユキとローが突然遊びに来て「よし、鍋やろう」という事になり、狭くて暑苦しい部屋の窓を閉め切

って鍋パーティーを開いた。
馬鹿な事をしたもんだ……その後全員死んでいた。
「あれ覚えてる？　去年だかの夏休みに鍋パーティーしたの」
「覚えてるよ～。私も今それ思い出してたよ」
ユキは俺の顔を見てニコッと笑う。そして「あの時楽しかったよねぇ。皆汗だくでさぁ」と言いながら、少し遠い目をして歩幅を狭くした。
「あの時って何鍋にしたっけ？　キムチだったかな？」
「あ～……そうだな。キムチしか入れなかったような気がするな」
思い返してみると、なんともアホくさい思い出だ。まるで男同士が馬鹿をやっているかのような……。
ハルもローもそういった事に対してやたらと積極的だった。趣味もどちらかと言うと男寄りで、漫画も音楽も男が好きそうなものを好んでいた。ローに至っては釣りが趣味である。冬になるとワカサギ釣りなんてものに駆り出された。
「あれだな、なんだかんだ言って楽しかったな」
「楽しかったね。またあんな風に騒ぎたいね」
ユキの歩幅はまた少し狭くなった。そして少し俯き、まるで思い出に浸るように目を細くする。
……そういえば、ユキは一週間に一度しか俺達と遊ぶ時間が無かった。それ以外の日は毎日、それも土曜日も日曜日もお稽古をしていた。
だから、長期休みの時は嬉しかっただろうな。一週間に一度だけ朝から夕方まで遊べていたんだから。夏休みの鍋パーティーだって、ユキにとってはかけがえの無い思い出なんだろう。
それにユキには、他の友達との記憶は無いに等しい。あんなアホらしい思い出だって、ユキの中ではきっと輝いている。
「もうお稽古辞めたんだからよ、これからは毎日楽しい事ばっかりやっていこうな」
俺がそう言うとユキは急にパッと明るい顔をして俺の顔を見た。

「……なぁに？　私そんなに物悲しい顔してた？」
「してた」
ユキは少しの間怒ったような表情をしていたがすぐに「ふふっ」と笑って歩幅を元に戻した。「そっかぁ～してたかぁ」という声が台詞と反して明るく聞こえる。
ユキは何故だか俺の前を歩いていた。俺が足を速めても決して追いつかせない。
俺はユキの顔が見たかった。今ユキはどんな表情をして、何を思っているのかが知りたい。だけどその俺の思惑を知っているかのように、ユキは足を止める事はおろか、振り向きもしなかった。
「これからだろ。これから始まっていくんだから」
「……あ、タダ君、私豆乳飲みたい」
……何故話を逸らすんだろう。今のユキは明らかに無理をしている。「これから」という言葉が嫌いなのだろうか。今までお稽古で忙しかった過去がやはり気になっているのだろうか。
……それもユキらしくない。ユキは「今まで」よりも「これから」という前向きの言葉のほうが好きそうなのに。
「……豆乳って美味いの？」
「うん美味しいよ。一回飲んでみて」
振り返ったユキの顔は、やっぱり笑顔だった。
見ているだけで俺の顔のほうがほころんでくるほどの笑顔なのだが、その笑顔には少し、嘘が混じっているように見えてくる。
なんだか、少しおかしい。話を逸らしたがっているようにしか見えない。
なんで……。
「じゃあ美味しくなかったら責任持ってユキが全部飲めよな」
「え……それなら賞味期限長いやつにする」
それでも、「なんで」と聞けはしなかった。
小さい事をグチグチと追求して、ユキが冷めてしまうのが恐い。ユキは追及して欲しくないから話題を変えようとしているんだから、

それに乗っかってやらないといけない。
ユキは過去に色々あったから。何も考えていないように見えても、きっと過去に引っかかるものがあって、まだ「これから」とは思えていないのだろう。
「今日の晩飯、楽しみだな」
「えへへ。楽しみにしててね」
今は少し先の未来で笑顔を見せてくれている。それで良しとしておこう。

「あ……やっぱり降っちゃったね」
俺とユキはスーパーの入り口で空を見上げながら立ち尽くしていた。
この時期の雨というのは珍しい。十二月の気温としてそこまで高いという訳でも無いのに、何故にこのタイミングで雨なのか……せめて雪だったら歩いて帰れたのに。
「……この天気だったら待ってもやみそうにないな……」
と、言い出したところで思い出した。そういえば俺の部屋には今布団はひとつしかないんだった。この天気の中、俺の部屋と俺の実家の往復を歩くのは本当にキツイ。電車で二駅分もある。
今日も一人で壁にもたれて眠るのか……と考えただけで気分が滅入る。首の痛みこそ薄れているものの、やはり熟睡できないというのはでかい。
「やっべ失敗した。布団一個しか無いんだった」
「……あ～……そっか……」
「参ったな……」
なんだかな……ついていない。この場はスーパーの中で傘を買って帰れば済む話なのだが、布団を運ぶとなったらそうは行かないだろう。布団の件は今日中に片付けて起きたかった。
「まぁ、仕方ないか。明日晴れたら俺が持ってくるからよ」
「……んっと、多分だけど、私のお家にお客さん用のお布団ってあ

ると思うよ。私のお家だったら近いし、そんなに濡れないで済むんじゃないかな？」

……予想していた返事なのだが、正直、嫌だ。

ユキの家の中に入るくらいなら俺は床や壁に寄りかかって眠ったっていいし、もっと言うなら雨の降る中実家から布団を運んできたっていい。そう思うほどにユキの家の中には入りたくない。

「……とりあえず帰ろう。ちょっと傘買ってくるから待ってて」

「うん、分かったよ」

逃げたつもりだけど、多分ユキの中ではもう決定している。ユキは何が何でもユキの家から布団を俺に持ってこさせるつもりだ。きっと俺が「玄関で待ってる」と言ってもゴネるに決まっている。それにあの家に行ったら奈緒さんの手前、そんな格好悪い姿は見せられない。

何故俺があの家の中に入るのをそれほどまでに嫌っているのかと言うと、単純にあの場所があまり好きじゃないからだ。玄関の中に入っただけで感じる外界との違和感。これ見よがしに吊り下げられているシャンデリア。俺の実家が三軒買えるくらい高いとユキに説明をうけた絵画。赤いカーペット。ペルシャ絨毯。意味不明な形の壷。全てが俺の住んでいる世界とは違う。

そして苦手意識は視覚的だけに留まらず、あの家の持つ独特の雰囲気が本当に苦手。別に金持ちだとか世界が違うだとか意識しなくても、何故か外から見ているだけで背中がゾクッとする。これはまぁホラーゲームにありがちなのだが、ああいった豪邸が惨劇の舞台になっているからなのかも知れないが、とにかく苦手だ。

その家を見ていたら、ユキがなんだか遠くに感じる。ユキと俺ではまさに住む世界が全く違うんだと、実感させられる。

……でも行くしかない。それが一番無難。俺がゴネた所できっと意味が無い。

「……傘一本八百円……」

俺は傘の値札を見て、全てに対するため息を吐いた。

「私ね、今まで雨って嫌いだったけど、今日でちょっと好きになったよ」
ユキははしゃいでぴょんぴょんと飛び跳ねていた。そのたびに傘から垂れる水滴が俺の顔に飛んできて冷たい。それどころか一人用の傘を二人で使っているためか、俺の左肩は常に雨粒に晒されており、泣きそうだ。
「……そうか。そりゃ良かった」
俺は気の無い返事を返す。ユキと外を歩いている時、何故かユキのテンションが高くなり俺のテンションは低くなる。これはずっと前からこんな調子だ。
「ほら、今まで雨が降ったら傘の幅分タダ君と離れちゃってたでしょ？　だけど今はこうして密着してられるから幸せだよ」
ユキが傘を持って俺が二つあるポリ袋を両方とも持っていた。確かにこれがベストだとは思うが、せめてちゃんと傘を差して欲しい。顔に水滴が飛んでくるし、左肩はもう悲惨だ。
「あははっ、なんだかあれだね。新婚さんみたいだよね」
俺の右腕にぴったりと寄り添っているユキが屈託無い笑顔で俺の顔を覗き込む。本当に無邪気な笑顔で、なんだか幼く見える。
……その笑顔を見ていたら、ユキも相当不思議な奴だなと思う。小さい頃から金持ちのお嬢さんとして育てられて、小学生の頃から自由の無い暮らしをしてきていた。そして高校に入ってすぐにイジメられて、悲惨な青春を過ごしてきた。
それなのにユキは一切屈折する事も無く、今こうして笑っていられるなんて……。
「新婚か……そうだな」
「だよねっ。嬉しいなぁ～」
本当に、凄い事だと思う。奈緒さんの気持ちが理解できる。
「ユキ、気付いてないみたいだから言うけど、俺の左肩が悲惨だ」
「ん？　重たいの？」

「……いや、冷たい」
「え？　あ！　ごめんね！」
ユキは俺の左側に回り俺の左肩の水滴を手で払ってくれた。
しかし同時に、俺の右肩も傘からはみ出てしまい、雨に晒される。
「気付かなかったよ……ごめんごめん」
ユキの「ごめんごめん」と言った時の無垢な笑顔を見ていたら、右肩の事は言えなくなってしまった。

俺のボロアパートに到着した時にはもう夕方の四時半を回っていた。腕を組んで歩くというのは意外にも時間がかかるようで、一人だと片道二十分の所が三十分近くかかった。今日は天気が悪く曇っていてただでさえ暗いと感じていたのに、アパートに到着した頃には俺の部屋意外の部屋にはすでに明かりが灯っていた。それくらい薄暗い。
「なんか……まだ夕方なのにもう暗いねぇ」
ユキは俺と同じ事を思っていたらしく、部屋の電気をつけながらそう呟く。
「冬ってのに加えて雨だったからな。そりゃ暗くもなるわ」
俺はビチョビチョになってしまった靴下を脱ぎながらそういった。そんな俺を見てユキも真似て靴下を脱ぐ。
靴下がこんなに濡れてしまっているのだから靴のほうだってタダでは済んでいないだろう……だから雨は嫌いだ。
「布団どうしよう？　奈緒さんに運んでもらおうか？」
「……いや」
昨日奈緒さんと話して分かった事なのだが、奈緒さんは基本的に優しくて真面目な人だ。ユキが第二の母親と呼ぶだけの事はある。だから頼めば持って来てくれるだろうが、その優しさにつけ込むような事は出来るならしたくない。
「……奈緒さんだって色々忙しいだろ。俺が取ってくるよ」
「じゃあ私も行くぅ～」

ユキは奈緒さんに会いたいのか、やたらと元気に声を上げた。
俺の部屋にユキが住むようになってからユキと奈緒さんは電話でしか話をしていない。そういう意味ではユキと一緒にあの家に出向いてしっかりと奈緒さんに挨拶をしなくてはいけないと思う。
「でもお前靴どうする？　濡れてるやつしかないだろ」
「お家に戻ったらいっぱいあるから、それ持ってくるよ」
あぁ、そりゃそうだ。向かう先はユキの家なんだからなんとでもなる。
「じゃあ一緒に行くか。ハル帰ってくるかも知れないから電気はつけたまんまでいいよな」
俺は押入れを開けてローと川釣りに行った時に購入させられた長靴を取り出した。こっちに引っ越してきてから一度も履く事が無かったのでかなり埃が被っている。
しかしあれだな。押入れの中身もそろそろ整頓しなくてはいけない。釣り道具やスキー道具なんかがゴチャゴチャと乱雑に突っ込まれている。俺一人が住むならこれでも構わないのだが、今ではこの狭い部屋に三人もの人間が住んでるんだから、このままで良い訳が無い。
「この部屋に俺の布団持ってくる時に買った布団圧縮袋があるから、これ持っていったほうがいいよな」
「わ、本物初めてみたよ」
ユキはもの珍しそうに圧縮袋を手にとって「わぁ～」と目を輝かせている。そういえばローとハルも初めて圧縮袋を手にした時は意味無く興奮していた。袋の中に俺を入れて圧縮して、本当に一瞬死にかけた思い出がある。ノッた俺も俺だったが……。
「これ中に入って圧縮されたらどうなるんだろうね？　ね？」
……やはり興味がそこにいくのか。
「やめとけ。下手すれば死ぬぞ」
「あ？　さてはハルちゃんに入れられたな？」
ユキは「ははは」と笑って圧縮袋を綺麗に折りたたんだ。ここが

俺とユキの性格の差なんだろうな……俺だったらもっとガサツにたたんでいる。
「それじゃあ行くか」
「傘は一本？」
俺の部屋にだって傘はある。今買ってきたのを合わせたら二本になる。どう考えたって一本で行くという発想はおかしいだろう。
「……そうだな」
それでも、やっぱり一本でいい。

「もしもし～奈緒さん？　えっとねぇ……あ、こんばんは。えっとね、今から一旦お家に帰るね。ん？　違うよ～お布団足りなくて今から取りに行くの。お客さん用のお布団ってあったよね？　うん……うん……あ、いいのもう向かってるし」
ユキは俺に寄り添いながら電話をかけていた。相変わらず俺の左肩は悲惨な事になっている。
「え？　帰り？　あ～……ちょっと待ってね」
ユキはそう言って電話を耳から離して俺の顔を見る。
「奈緒さんがお布団運ぶの手伝ってくれるって言ってるよ。お車だしてくれるって」
……それじゃあ取りに行く意味が無いだろう。取りに行って自分で持って帰るからこその外出だ。それに奈緒さんには甘えたくない。彼女は何に対しても親身になってくれる人なんだと思うが、それがなんだか申し訳ない。彼女は彼女なりに頑張るべき事があるんだから。
「いや、歩いて持って帰ろうぜ。あんまり奈緒さんに迷惑かけちゃ悪いだろ」
「だよね……そう伝えるね」
ユキは再び電話を耳にあてて奈緒さんと会話をしていた。その内容からしてどうやら奈緒さんは布団と掃除機を用意してくれるそうで、俺達が到着してすぐに持ち出せるように計らってくれるようだ。

……本当に良く出来た人で恐縮だ。それなのに三十を過ぎても結婚が出来ないなんて、不思議というか、不条理だと思う。
「うん。いいよ～ホントに。わざわざありがとうっ」
ユキは最後に「ありがとう」と言って電話を切っていた。ユキも奈緒さんに育てられただけあって礼儀正しい。正直俺にはなかなか言えない言葉である。
やっぱり教育か……育ちがよければ内面は自然と綺麗になっていくものなんだろう。
俺もユキの彼氏を名乗る以上、短気を起こしたり器の小さい事を言わないようにしなくてはいけない。なんかそれらが超格好悪いように思える。
「奈緒さんがお布団出して待っててくれるって。良かったねぇ中に入らないで済んだよ」
ユキがにかぁ～っと笑いながら俺を馬鹿にするように言い放つ。
そういえばずっと前に一度「ユキの家ってなんか恐いから入りたくない」と言ってしまった事があった。どうやらユキはそれに宛てつけているようだ。
「……気にしてた？」
「気にしてたよ」
気にしてたらしい。

ユキの電話が終わって数分後、すぐにユキの家の前まで辿り着いてしまった。
思い返せばユキと少しでも長く一緒に居られるようにとユキの家の近くにアパートを借りて住むようになった。だから近いのは当たり前だ。
「とうちゃ～く」
ユキは元気な声で俺の腕をぐいぐいと引っ張り駆け出す。やはり外を歩いている時のユキはテンションが高い。
でかくて綺麗な木製の扉をガチャリとあける。それと同時にユキ

は大きな声で「ただいま～」と言って中に居るであろう奈緒さんに呼びかけた。
「奈緒さ～んただいま！　お布団用意できてる？」
ユキがそう言うと中から白いエプロンを腰に巻いた奈緒さんがいそいそと出てくる。表情は笑顔で、いつもなら機械的だと感じていたと思われる表情だった。
「おかえりなさいませユキ様。正也様も、ようこそいらっしゃいました」
「あ、どうも」
「ただいま奈緒さん。お布団どこにあるの？」
ユキはそう言って靴を脱ぎスリッパを履いてぺたぺたと家の中へと入っていく。
どうやら俺の思惑は大きく外れてしまったらしい。速く到着しすぎて仕事の速い奈緒さんでも玄関にまで用意する事は出来なかったのだろう。
「……ユキ」
「ん？　なぁに？」
……話が違うじゃねぇか。と文句のひとつも言ってやりたくなったが、さっき自分で思っていた事だ。ここで文句を言うというのは、とてつもなく器が小さい。
それに今ここで奈緒さんに布団を持ってきてもらうという事は、結果的に奈緒さんに甘えているという事になる。それも俺がただ家の中に入りたくないという理由だけでだ。そんな格好悪い事は出来ない。
「いや……じゃあすみません、俺もちょっとお邪魔します」
「あ、はい。それではこちらの履物をお召しください」
そう言って俺にスリッパを用意してくれた奈緒さんの顔が、心なしか少し喜んでいるように見える。
「……」
俺が始めてこの屋敷に足を踏み入れるのが嬉しいのだろうか……

奈緒さんの表情はどんどんと明るくなっている。本当に、今まで見た事が無いほどだ。
だったら、言ってみてもいいんじゃないか。
「ありがとうございます」
自然にとはいかなかったが、俺は「ありがとうございます」と声にだして言ってみた。「どうも」でも「さんきゅー」と言った会話の流れで使うような言葉では無く、しっかりと「ありがとうございます」と言ってみた。
すると、やはり恥ずかしい。
「……いえ……あ、はい。身に余るお言葉です」
珍しく奈緒さんがどもり、少し頬を赤く染めているのが分かった。
多分奈緒さんは異性と触れる機会が少ないんだろう。ましてや異性にしっかりとしたお礼を言われるなんて、きっと経験に無かったんだと思う。そうじゃなかったらここまでどもるなんて……。
「た～だ君！！　はやく来てっ！！」
ユキの声が痛いほど鼓膜に響く。
どうやらユキはわざわざ俺の耳元までやってきて怒鳴り散らしたようだ……。
「いって……何だよ……でけぇ声出さなくても解ってるっつぅの」
「じゃあ早く行こっ！！」
ユキは俺の腕を乱暴に掴んで強引に引き寄せる。
「何だよユキ……嫉妬？」
「そ～だよっ！！　鼻の下伸ばさないでよね！！」
……正直で大変よろしい。だけど決して俺は鼻の下は伸ばしていない。一回り以上も年上の女性で、ましてやユキが第二の母親と思っている人と、どうこうなろうだなんて思っても居ない。
ただ奈緒さんは、お姉さんというか、昨日の一件以来どうも他人のような気がしないだけ。この人もユキがユキである事に一役かっているからだろうと思う。
「はは……違うって。奈緒さんに対して礼を逸してはいけないって

思ってるだけだ」
「……いつの間にそんなに仲良くなったのよぅ」
ユキの腕をぐいぐいと俺の腕を引っ張る。ユキの乱心ぶりにオロオロとしていた奈緒さんは静かに俺とユキの後を追っていた。
「昨日奈緒さんを送った時に。この人はユキの事が大好きなんだなって思ったら、他人とは思えなくてよ」
俺がそう話した後、ユキも奈緒さんも突然立ち止まり、何も話さなくなってしまった。ユキの腕からも力強さは感じない……と、思った矢先、恥ずかしい事を言っていたという事に気付いた。
なんだ、他人とは思えないって……俺は何様のつもりだ。
「……いや、違くてよ」
「……ううん、違わないよ」
奈緒さんは何故かはにかみながら俯いている。そのうちに「くすっ」という笑い声が奈緒さんの口から聞こえてきた。
「奈緒さんって意外と人懐っこいでしょ？　良かったぁタダ君って奈緒さんの事苦手だと思ってたから」
ユキは俺の腕を抱きかかえる。その時にユキのやわらかい部分に触れてなんだか恥ずかしい……奈緒さんの目の前だからか、顔がぼぅっと熱くなる。
「奈緒さんは私の事が大好きだよ。そして私も大好きなんだ」
ユキはニコッと笑って奈緒さんの顔を見る。それに答えるようにして奈緒さんも笑顔を見せていた。
きっとこの二人は普段からも言い合っているんだと思う。それが容易に思い浮かぶ。なんだかこの二人は、素敵な関係だ。
「そっか……うん分かった」
「あはは～……ごめんね勘違いでヤキモチ焼いちゃった。奈緒さんもごめんね」
ユキは奈緒さんの顔を見てぺろっと舌を出した。それに答えるように奈緒さんはまた「クスッ」と笑う。
「いえいえ」

ユキがどうしてこんなにのびのびと歪まずに育ったのか、良くわかった。

俺のお陰も確かに少しはあるだろう。ハルの影響もちょっとはあるだろう。だけどやっぱり奈緒さんは、偉大なんだと思う。

13．過去

ユキの家はやはりでかい。俺はユキの家の一階にある和室へと通されたのだが、そこに行くまでに扉が五つもあった。辿り着く間に目を引く美術品の数々……そのどれもが異様な力を発しているように思えて、触れる事もおこがましいような気にされる。

そして通された和室でも、真ん中にどんと置いてあるテーブルがただのテーブルには決して見えない。良くはわからないが絶対に高級な木を使っているに違いない。

壁にはテレビの鑑定番組で見たような掛け軸が三つ並べてかけられており、その手前にはこれまた馬鹿みたいにでかい壷が飾られている。またその手前には模造刀ではあるのだろうが、日本刀が二本飾られており、その近くには決して行きたいとは思えない。この部屋で使っている座布団も、俺の一ヶ月の家賃代を超えているように思えて、座る気になんてなれない。

……だから入りたくなかった。こういうものを見たら意味なく背筋が伸びてしまうし変な汗も出てくる。

「……なぁユキ、布団も圧縮したんだし、もう帰らねぇか？」

「え？　でも奈緒さんがお茶入れてくるって言ってるし」

俺は落ち着かずにウロウロと部屋の中を歩いていた。といっても貼られている障子すら高いモノだと思えてしまい、少し距離を置く。

今の俺はすげぇ格好悪いと思うが、全然落ち着かない。

「……なんだかなぁ……落ちつかねぇなぁ……」

「そんなに緊張しなくてもいいのに。落ち着いて待ってようよ」

まぁ、ユキは幼い頃からこの家で暮らしているのだから落ち着けるだろうが……堂々としているユキを見ていると超格好いいように見えてくる。

「とりあえず座ってよ。落ち着かないって思うから落ち着かないんだよ」

……確かにそれは一理ある。意識すればするほどに気になって仕方が無い。
俺は「むぅ」という声を漏らしてユキの座っている隣に用意されている座布団に恐る恐る腰を下ろす。
その座布団のやわらかいこと……今まで一度も味わった事の無い座り心地だ。
「……なんか、ケツがムズムズするな……」
「トイレは廊下出て左にまっすぐ行って突き当たりにあるよ」
……違う。そういう事じゃない。
「落ち着かないって事だよ」
「あ～。そっかそっか。でもホントにそんな緊張しないでさ。足伸ばしてくつろいでよ」
ユキがニコッと俺の顔を見て微笑む。そして高そうなテーブルに両肘をついてそこに顔を乗せた。
「でも、あれだよね。イメージの中のタダ君ってさ、いつでも堂々としてて……ん～……私の主観では、弱い部分なんて無い～って感じなんだけどな」
……そうだろうか？　俺は自分で自分を挙動不審な男だと思っているのだが。
「そうか？」
「うん。えっとねぇ、勉強も出来るし頭も良いし、嫌な事があっても弱音吐かないし……あ～あとさ、あまり自分の話しないでしょ。だからかなぁ～……」
……まぁ、確かに。と思わざるを得ない事ばかりだ。
ＩＱで頭の良し悪しを決めるのはどうかと思うが、俺のＩＱは百三十を超えている。一般的には天才と呼ばれる域らしい。
そして自分の話をしないのもまぁ……言われてみればその通りで、何故かと言うと俺は極端なほどの見栄っ張りだからだ。自分の弱い部分を他人に見せるという行為に対して異常なほど毛嫌いしている。
だからこんな偏屈に育ってしまったのかも知れない……いつだっ

て意地を張っていたような気がする。
「話さないもんね、タダ君は」
……？
なんだ、それ？　その台詞に何を含んでいる？
会話の流れとして別にこれと言って不自然な言葉では無いのだが、何故だろうユキの「話さないもんね」という言葉がまるで違う場所から聞こえてきたような……。
耳から入ってきたというより、頭に直接語りかけてきた……？
「え？」
「ん？　何ぃ？」
ユキの顔は普段と変わらない。長丸い輪郭にクリクリッとした瞳。すっと伸びた鼻筋。少し緩めの口元。
……変わらない。ユキはいつもとちっとも変わらない。今聞こえた声もしっかりと耳から聞こえてきた。
「ねぇねぇ～なぁに？」
「……いや、別に……」
「あ～また話さないんだぁ……そんなに会話が嫌い？」
……そういう事じゃない。むしろ話を聞くのは嫌いじゃない。
だけどこの感覚を言葉にするのは難しいし、そんなに大した事では無いはずだ。だって恐らくは俺の錯覚で済まされる話だし、所詮は違和感。
「違くて、俺ってそんなに話さないか？」
「ん～……自分の話はしないよね」
「そっか……じゃあ今度からは話すようにするわ」
俺がそう言うとユキは満足そうな笑顔を浮かべる。そして「えへへ。勝った」と、よく分からない言葉を発した。
俺も表情を崩して「はは」と笑ってみせるが、俺は頭の中でユキの声の違和感について考えていた。何故そこまで気になるのか自分でも分からなかったが、必死に答えを探している。
「でね、なんでタダ君のイメージがそうなったかって言うとね、や

っぱりタダ君って格好いいって私思うのね。寡黙ともちょっと違うけど……ん～いつも冷静っていうかさ。それなのに私の家に入っただけで緊張してるなんて可愛いな～って」
　またユキのよくわからない長い話が始まった。

「遅くなってしまいすみませんでした」
　奈緒さんは丸いお盆のようなものにお茶を二杯のせて和室へと入ってきた。確かに遅いと感じるほど待たされてはいる。
「ねぇねぇ奈緒さん、今お仕事忙しい？　ちょっとお話しない？」
　立ち去ろうとしていた奈緒さんをユキは呼び止めた。どうやら話をしたいらしく無邪気に「ここ座って」と言って自分の座っていた場所を明け渡す。
「私反対側座るから～」
ユキは部屋の隅に積んであった座布団を俺の右側へと敷いてちょこんと座る。
「ほらほら座って。奈緒さんって私以外の人とあんまりお話しないからさぁ」
　なるほど。これはユキなりの計らいなんだ。
　普段、人と接する機会が少なく、たとえ接したとしても事務的だとか、機械的という印象を与えてしまうのであろう奈緒さんの事を「他人とは思えない」と言った俺と触れ合わせる事で、一人になってしまった奈緒さんの寂しさを少しでも和らげようとしているんだろう。
　やはりユキは、心が優しい。ＩＱばっかり高い俺なんかより、よっぽど正しい答えを導き出す。
「ですが私……」
「いいじゃないですか奈緒さん。少しお話しましょう」
　俺は笑顔で奈緒さんの顔を見た。すると奈緒さんは目をキョロキョロと動かし、お盆で顔を半分隠す。三十を超えているというのに、そういった仕草や行動がやけに可愛らしく俺の目には映る。まるで

男子と話をする事に馴れていない中学生のようだ。
「……そこまで仰るなら……同席いたします」
奈緒さんは何故か少しキョロキョロと辺りを見回した後、持っていたお盆をテーブルの上にそっと置いて俺から少し座布団を離してそこに座った。そしておずおずと俺の顔をちらっと覗いてくる。
「……あの、私はどうすれば……」
「えっとね……ん～と……せっかくだからタダ君の話聴きたいな。ね？　聴きたいよね奈緒さん？」
ユキはテーブルの上に体を乗り出し、俺の体をはさんで向こう側に居る奈緒さんへと話しかけていた。びろんと伸びたその体に品格は感じられず、見出せるものは幼さだけ。
……と、落ち着いてユキを見ている場合では無い。ユキは一体何を言っているのか……。
「ちょっと待てよユキ……俺面白い話とか持ってねぇし……」
「ん～……奈緒さんは私がイジメられてるの知ってるから、あの時の話してもいいよ」
俺はユキのその言葉を聴いて焦って奈緒さんの顔を見た。
奈緒さんの表情は、少し困ったような笑顔を浮かべている。「あの時」という単語も何を指しているのかを知っているようだ。
……ユキは、やはり過去を清算しきれていないようだ。最も好きな俺と最も信頼している奈緒さんと自分とで、この話を共有し少しでも穴を埋めたいと思っているに違いない。
きっとユキは寂しがっている。少しでも奈緒さんに多面からこの話を理解して欲しいんだろう。そう思うと、俺はユキの手を握らずにはいられなかった。
「……えへへへ」
ユキは、また屈託の無い笑顔で笑った。
「そんな話でいいなら……」
俺は再び奈緒さんに向き直る。奈緒さんは少し寂しそうな笑顔でユキを見つめていた。

「はい……聴かせてください」
俺は大きく息を吸う。

「ユキは、ごく普通に生活していただけなんです。入学したばっかりの時は結構友だちも居ましたし、孤立するなんて事も無かったんです。ですが一年生の夏休みが終わってからですかね、ユキは突然クラスで爪弾きにされてしまったんですよ」
俺はユキの顔を見て「だよな？」と同意を求めた。するとユキは小さくコクンと頷く。それと同時に握られている手にも力が篭ったのが分かった。
「キッカケがなんだったのか、原因が何だったのか、それは俺にもユキにも、俺の親友のケイにも、わかりませんでした。本当に突然、ユキはイジメられてしまったんです」
……ユキはその時、一体どう思ったんだろうな……
俺やケイと一緒に居る時には何も言わなかった。問い詰めても「大丈夫だよ」と言って笑っていた。
「俺は……ずっとユキの味方でしたから、何度かキレましたね。俺って頭良いとか言われてますけど、実は短気で、喧嘩っぱやい所がありました。例えばユキの机に『キモイ』とか『ぶりっこ』という落書きが書かれた日は、教壇を蹴り飛ばしてクラスの人間全員に向かって啖呵を切りましたからね」
ユキは「あはは……」と苦しそうに笑顔を浮かべる。恐らくその時の事を思い出しているのだろう……ユキにとってこの話は思い出になるどころか、トラウマになっているのだから。
今度は、俺がユキの手を強く握った。
「黒板にユキの悪口が書かれていた時もキレましたし、ユキの机の中に死んだカエルが入っていた時なんかは半狂状態でしたね。ですがそんな時、いつも冷静に俺を止めてくれてたのが、さっき言ったケイって奴なんですよ」
……少しくらい話を逸らしてもいいと思う。俺はケイについて語

りたい。俺の自慢の親友を自慢したい。
「……ケイって奴の話になりますが、ケイってお姉さんを亡くしているんですよ。それも酷いイジメの末に、自室で首を吊っていたそうです。だからきっとケイは、俺以上に腹が立っていたと思います。それこそイジメてる奴を一人一人殴り飛ばしたいほどだったと思います」
……これくらいなら許してくれるよなケイ。お前の気持ちを代弁するくらいならきっと笑って「しょうがないなぁ」と言ってくれるだろう。
「それでもケイは、冷静でした。冷静に『タダっちはユキちゃんの支柱なんだから、つまらない事で居なくなっちゃいけない』と言ってくれました……」
……あぁ、感情が高ぶる……。
歯止めが利かなくなる……。
「卑屈になる訳じゃないですけど、ケイは、俺よりもずっと……ずっと、凄い奴です。本当はケイこそがハラワタニエクリカエッテイルはずなのに……」
……。
「ケイはいつも笑顔でした。笑顔で『タダっちしっかりしろよ』と言ってくれて……だから俺は強がっていられましたっ……ユキを守るっていうのは……感情に任せる事じゃっ……無いって、教えてくれてっ……」
「タダ君……」
「俺が居ないとユキが駄目になるって……俺が居るだけでユキの助けになってるって……！　だからユキは笑っていられてるんだって思って！　信じて……！」
……いつだってケイは俺の事もユキの事も考えていてくれて……。
自分にだって壮絶な過去があると言うのに……そんな事を微塵も感じさせずに、見守ってくれていた。
「……うん。そうだよ。そうだよ……私ね、本当に感謝してるよ」

……ユキの顔が、歪んで見える。
人の形を成していない……ぐにゃぐにゃに、ふにゃふにゃに見える。
それでも、手を強くにぎってくれている力が、ユキのそれだと言う事はわかっている。だから俺は、せめてその手を握り返した。
「……でも……それなのにユキは、時々言うんです……『もういい』って。『私と関わったらロクな目に合わない』って。言うんです……でもそれが嘘だって分かってるから、俺はずっとユキと友達で居続けました。もちろんケイも同様に、ユキの友達で居続けてくれてました」
今思い返しても、ユキにそこまで言わせた家畜ドモが本当に腹が立つ。ユキは普通に生活をしていただけだと言うのに、何故そこまで追い詰められなきゃならなかったんだ。何故ユキが泣かなければならなかったんだ。何故悩まなければならなかったんだ。
畜生。畜生。ただただ飼育されているだけの家畜のくせに。何の権利があって女神のようなユキをイジメるんだ。
「そしてですね……今年の九月、かろうじて保たれていた俺の理性が、ブッツリと切れてしまう出来事があったんです。奈緒さんも知ってるとは思いますが、ユキの靴箱に……誰のものか分からない糞尿がっ……塗りたくられてたんです……っ！」
あぁ……思い出してるだけだと言うのに、キレる……。
「なんでっ！　そんな事するのかっ！　全っ然わかんねぇけど！　塗りたくられてたんだっ！　そんな事をする奴が今でものうのうと平和に生きてるなんてっ！　許せねぇ！」
思い出して、口に出して、改めて、感情が乱れる。
畜生奴ら絶対許してやらねぇ。絶対人間と認めてやらねぇ。奴らの顔を思い出しただけでも腹が立ってくる。生涯忘れてやらねぇ。生涯忘れさせねぇ。
そんな言葉が、次々と頭の中に思い描かされる。そしてその黒い言葉達が自分の中に吸収されて、それが俺となる。

「あああああっ！　誰なんだよっ！　絶対許さねぇっ！」
「……っくっ……ひっくっ……」
「正也様……あの……冷静になってください」
……奈緒さんの手が、初めて俺の腕に触れた。
それがとても暖かくて……暖かくて……。
まるで母親に触れられているような。
「落ち着いてください……」
「くそっ……」
俺は袖で涙をぬぐった。
あの時の出来事を思い返し、初めて言葉にしたから、イラつくのは分かる。だけど、今は聴いてくれている人間が二人も居るんだ。話し手がイライラしてどうする。それは聴いている側が感じ取るものだろう。俺が体現してみせるものでは無い。
「ごめんユキ……ごめんな……泣かないで……」
俺は震えるユキの頭を震える腕で優しく撫でた。ユキは言葉こそ発しなかったものの、首を上下にコクコクと振ってくれる。
すると俺の左側からも「……ぐすっ……ぐすっ……」と鼻をすする音が聞こえてきた。どうやら奈緒さんも、涙を流しているようだ。振り返ってみてみると、涙を隠そうと持っているハンカチで拭いてはいるが、目が真っ赤だし潤んでいるのが分かる。
……格好悪い。何を熱くなって器の小さい事をしているんだ……二人に迷惑と心配をかけるだけじゃないか……女性二人が泣いたって、男である俺が泣いてちゃいけない。
「奈緒さんも……ホントすみません……」
「いえっ……私こそすみません……いい大人なのに……泣いちゃって……」
奈緒さんはもう一度ハンカチで涙をぬぐった。だけど次から次へと流れ出てきてしまっているようで、いくらぬぐっても、ぬぐい切れていなかった。
……そうだよ、ユキの第二の母親なんだから……ユキの事が大好

きなんだから……この話を聴いて涙が枯れる訳が無い。きっと奈緒さんも悔しくて、悔しくて、仕方ないんだと思う。
「それで……もしよろしければ、続きを聞かせていただけますか？」
俺はユキの顔を見た。するとユキもそれに賛成のようで、小さく小刻みに首を縦にふる。
その様子を見て、俺はまた大きく息を吸う。大きく吸って吐いて、もう一度吸う。
「それで……ユキの靴箱が糞尿にまみれてまして、ユキが大泣きして……それを見てたら俺、いつの間にか自分を見失っちゃったんですね。気がついた時には自分の教室で大暴れしてました」
今思い出しても、信じられないほどの力が出た。まさか机を片手で振り回したり投げ飛ばしたり、そんな事が出来るとは思っても見なかった。俺が暴れた分だけでも重傷者は出ていたんじゃないかと思う。
「イジメの当事者とか、関係ありませんでした。手当たり次第にぶん殴って、蹴って、暴れまわってました。それでも俺弱くて……取り押さえられてしまったんですね。思い切り抵抗しても数人がかりで抑えられて……満足に動けない事が悔しくて悔しくて……」
……これはきっと体験した人間じゃないと分からない事なのだとは思うが、俺はその時初めて、自分の無力を知った。
いくら力を込めても、動けない。もっと暴れたいのに。もっとぶちのめしたいのに。出来ない。それが心底悔しい。
そしてその日以来、俺は勉強をする事をやめた。とてもくだらなく、意味が無いように思えた。
「そんな時にですね……俺の親友のケイが、教室に入ってきたんです。普段へらへらして気のいいケイが、無表情だったんですね。そのただならぬ雰囲気に、俺を含めたクラス中の誰もが、ケイを見つめたんです」
「……ケイ君は、靴箱の前で泣いてる私を見て、ものすごい速さで教室まで走って行ったの……その時のケイ君も、やっぱり無表情だ

ったな……」
ケイはきっと悟ってたんだな。俺が教室で暴れ回っている事を。
本当に、敵わない……本当に本当に、ケイは凄い奴だと思う。
「うん……それで、すごいですよ、ケイは。教室に入ってくるなり、まず手始めとばかりに近くに居た女子生徒の胸を、裏拳で殴ったんです。そしたらその女子生徒、二メートルは吹っ飛びました」
裏拳はそういった攻撃じゃないはずなのに。ケイの力はそれほどまでに凄い。
「ケイって、中学の時に空手と柔道やってたらしいんです。空手は道場に通って習っていて、柔道は部活でやっていたらしいです。それに加えてケイは毎日鍛えていたんです。身長は小さいですけど、ケイは、鬼のように強いんです」
今思い出しても、ものすごい光景だった。一人の人間に三十人が立ち向かって、そのことごとくを払いのけていた。
「ケイに敵う人間なんて、一人も居ないんです。人間とは思えない力に加えて、技も持っているんですから。普通の人間が何人束になっても、ケイの敵にすらなりません。ケイは、暴れに暴れてました」
……そんな事をするためにケイは鍛えていたんじゃないと知っている今は、あの時ケイに暴力をふるわせた事に対して、申し訳ないと思っている。それでもやはり、俺の中でケイは英雄になっており、どうしても自慢をしたくなる。俺の親友であるケイが、どれほど凄い人間かって事を言いたくて仕方が無い。
「そうなると、当然教師が止めに来るじゃないですか。体育教師のごっつい親父が止めに来たんですけどね、止めに入るや否や、ケイに懐に潜り込まれて、背負い投げを食らいまして、その後はもう、馬乗りになって、ひたすら顔をボコボコにされて」
当時は何故そんな事をしたのか分からなかった。暴れまわっただけでもお咎めゼロという訳にはいかないというのに、よりにもよって教師に暴力を振るうなんて……あの瞬間にケイの退学が決まったようなものだった。

「何故ケイはそんな事をしたのかと言うと、凄く格好いいですよ。よく聞いてください」
俺はひとつ咳払いをする。
「ケイは、全ての罪を自分が被るつもりだったんです。俺のやった事をごく小さい事にするために、俺以上の事をしでかしたんです。結果、俺は一週間の停学ですみました。そのかわりにケイは、退学になってしまったんです」
携帯電話をポケットから取り出して、開く。
そこには、あの言葉が画像として貼り付けられていた。
「これ、読んでください。退学が決まった時、生活指導室から出てきたケイが俺に言った台詞なんです」
奈緒さんは俺が差し出した携帯電話の待ち受け画面を見つめた。そして、目を見開いて言葉を無くしている。
「……僕は僕の正義に従っただけ……なんて、凄くないですか。格好よくないですか。ケイの凄さがこの一言に全て詰まっているような、そんな気がしませんか」
「……はい。格好良いですね……」
俺は大きく息を吸い込んだ。
そして、また大きく吐いた。
「憧れましたね。ケイは男の中の男だって思いました。俺もケイのように格好よくなりたい。強くなりたいって、単純に思いました」
ケイは俺に何よりも影響を与えた。アーティストの歌も、感動的な映画も、俺に与えるのは一時の感動であり、しばらく経てば忘れてしまう。
だけどケイのあの行動は、あの言葉は、三ヶ月経った今でも俺の心に根強く張り付いている。そして恐らく、これは生涯忘れない。
「でも、気づいてるんです。とてもじゃないけれど、俺はケイに追いつけそうも無いって」
ケイのように生きるためには、ケイのように正義を持っていなければならない。そして正義を示すための力を持っていなければなら

ない。
俺には、恐らく両方ない。俺にあるのは、激情と、衝動と……愛。
「だからケイとは違う方向で頑張るしか無いって思って、ユキの家の側にアパートを借りました。俺に出来る事は、ユキを守る事だって。登下校の時も、学校に居る時も、ユキを安心させ続ける事だって、思いました」
ユキの手を強く掴む。
するとユキの手も、俺の手を強く握り返してくる。
「……ユキ様は、幸せですね。大変だったと思いますが、そんなに想ってくれる人が居るなんて……素晴らしいですね」
「うん。私ね……辛かったし、悲しかったし、タダ君と会っても元気出なかったし、ケイ君には申し訳ないって思ったし……私なんて居なきゃ良かったって思ったよ。思ったし、タダ君に言っちゃったよ……」
ユキは俺の腕に両手を絡ませた。そしてぴたっと寄り添って、思い切り抱きしめる。
「そしたらね、タダ君が言ってくれたの……ユキはっ……」
俺はユキの頭を空いている腕でそっと撫でた。
「ユキはっ……ここで負けるような奴じゃ無いって……ユキは……弱くないって……ユキを一人にしないって……一人になんかに、してやらないって」
……そうだよ。ユキは弱くない。それに、一人じゃない。
二年間耐えてきたんだ。俺みたいに心が弱い人間だったら、ブチキレてるか、引篭もりになっていただろう。それなのにユキは、俺やケイを心配させまいと、笑顔を作って、耐えていたんだ。弱い訳が無い。
それでも卑屈になったり、弱気になったり、弱音を吐きたくなったりするだろう。そんな時は、俺が居るんだ。ユキは決して一人じゃない。俺が支えてみせる。
「あはは……あれって告白だったのかな……」

ユキは潤んだ瞳で俺の顔を見る。潤んでいるせいか、瞳に映る光がものすごく綺麗だった。
「……一人になりたいんだろうと思ってよ……だけど、一人になった所で思う事は、自分さえ居なければっていう事だろうと思ってさ……それをさせないって意味だったんだけど」
ユキの頭をつい抱き寄せる。
奈緒さんが居るという事も思慮に入らず、ついつい、ユキの額にキスをした。
「……ユキを愛してたから、出た言葉だよな」
……良い思い出には、なりえないだろう。
生涯かけても、ユキにとってはトラウマでしかないかも知れない。
それでも、普通に生きていたら、生涯かけても手に入れられないほどのものを、手に入れられたと俺は思っている。
それは思う事だったり、感じる事だったりと、形にならない物ばかりだけど、それは確かにあって、俺は、ユキは、そしてケイは、それらを得ている。

１４．ユキと奈緒とハルとロー

「やっぱり、あれだよ。タダ君お話上手だよ」
ユキは最後の涙をぬぐって笑顔を作り、まるで猫がなつくかのように寄りかかってきた。
「ね？　奈緒さん。私が話すより全然分かりやすかったでしょ？」
「……なんと申しますか……」
奈緒さんは少し困ったような表情を作っている。
そりゃそうだ。それを肯定してしまったらユキの話は良くわからないと言っているようなものだから、返事に困るだろう。
「そんな困らないでよぅ。だってタダ君頭良いんだから私よりお話上手なの当たり前だしさ」
その言葉を聴いた奈緒さんは、より困った顔をして笑っていた。
ユキも、思った以上に強引な奴なんだな。困ってるのが分かっているのなら、勘弁してやればいいのに。
「そうですね……とても分かりやすいお話でした」
「でしょ？　私の自慢の彼氏なの」
……それが言いたかっただけなんだろうな。ユキはやたらとニコニコ微笑んでべったりと寄り添ってくる。
それにしても、だ。ユキと付き合う前はユキに触れる事すら出来なかったというのに、今ではこんなにも側に居て、触れられるなんて、思ってもみなかった。そもそもユキは付き合うとか、ベタベタする事に関心が無いように思っていた。
「そうでしょうね。自慢したいお気持ちが、良くわかります」
しかしさっきから何を話しているんだ。こんな面と向かって褒められたら恥ずかしい……それに、俺はそこまで自慢できるような男では無いだろう。
「いや……俺なんて彼氏にしても自慢できるような男じゃないだろ？　どこにでも居るような男だしよ」

「そんな事」
「そんな事ありませんよ……っ！」
ユキが否定するよりも早く、奈緒さんが大きな声で否定した。
正直言って、かなりビックリした。俺はユキの顔を見ながら冗談半分で困ったように言っただけなのに……まさか奈緒さんが否定するなんて思いもしなかった。
「ご自分では意識されていないのかも知れませんが、誰かのためにと思って行動する事は、決して容易い事ではありません」
俺もユキも、熱く語る奈緒さんの顔をぽかんと見つめていた。恐らくユキ自身もこんなに熱く語る奈緒さんを見た事が無いのだろう、目をまんまるくして直視している。
「私、高校を中退しているんです。ユキ様のようにイジメられていた訳では無いんですが、当時付き合っていた彼氏が、酷い人間でして。早い話、その人は不良だったのです。それで……えっと……」
奈緒さんは急に口篭った。何度も何度も「えっと……」を繰り返し、次第に両目が潤んできたのが分かる。
恐らく、何か酷い事をされたんだと思う。そしてそれは奈緒さんから本物の社交性を奪わせたのだろう。
「えっと……」
「……無理に話す事なんて無いですよ？」
「そうだよ……私分かるよ。私も辛かったから、辛いんだなって事は、分かるよ」
奈緒さんは俯き黙って、涙をテーブルの上に垂らした。その涙は止まる事が無く、次々とテーブルへと落ちていく。
……その間、俺もユキも、一言も喋れなくなった。奈緒さんの揃えられている髪の毛が顔に垂れているせいで、奈緒さんの表情が一切見えない。悲しい顔をしているのか、微笑んでいるのか、分からない。だから、これ以上どうやって声をかけていいのか、分からない。
「……」

もし悲しい顔をしているんなら、俺とユキが全力で慰めるのに。
もし微笑んでいるのなら、泣いてはいるがもう過去の事として割り切れているんだって、少しは安心するのに。
奈緒さんは、声すら出さず、俯いてしまっている。
「……奈緒さん……ごめんね……ごめんね……奈緒さんの過去に、タダ君みたいな人が居れば……って思ってるよね……自慢して、ごめんね……」
「……いえっ……もし、正也様のように素晴らしい方がいらっしゃれば……今こうして、ユキ様と出会う事も、無かったので……」
俯きながら発した奈緒さんの声は、震えていた。
「……嘘だよ」
「……」
……半分は、本当なんじゃないかとも思う。まるっきりの嘘とは、どうしても思えない。
確かに、救ってくれる人が欲しかったという想いが皆無だとは到底思えない。そういう意味では、嘘だろう。だけどきっとこの人は、ユキと出会えて、幸せだったと思う。そこに恐らく嘘は無い。だからきっと、色々な思いが交差しているんだと思う。良かったのか、悪かったのか。
……でも、良いも悪いも無いはずだ。今奈緒さんが幸せかどうか。これから奈緒さんが幸せになれるかどうか。それが、大切なはずだろう。
「……奈緒さん、これからですって」
「……」
「今からでも、遅くないですよ。奈緒さんの事だけを見てくれて、奈緒さんだけを想ってくれる人、探しましょうよ」
「……」
これは、あまりにも無責任な言い方かも知れない。
探して見つかるんだったら、この世に寂しさを心に抱く人間なんて一人も居ない。誰もが意欲を持ってそういった相手を探すだろう。

自分だけを見てくれて、自分だけを想ってくれる人を。
だけど実際はそんな人間、滅多に居ない。居ないから探すのを諦めたり、一人苦しんだりしている。たとえ結婚をしたとしても、心が通わず早くに離婚したり、子供を作らなかったり……つまりは、本当の意味で相手を理解できる人間なんて、探した所で、見つかりはしない。
それでも、俺は「居るはずです」と、奈緒さんに伝えた。
「……うん。きっと居ると思うよ……簡単に手にしちゃった私が言うのも、なんだけどさ、探せばきっと、居るはずだから」
「……はい」
奈緒さんは俯いたままの状態ではあるが、小さく、だけど綺麗な声で、そう言ってくれた。だけどその声が俺に与えた印象は、不思議な事に悲しみだった。

「今日は、本当に楽しかったです。久々にお話が出来て、気分転換になりました」
俺とユキはお屋敷の玄関の前に立っていた。雨は少し酷くなっており、ボタボタという音が耳につく。
「そうですか。俺でよければ時間が許す限りお話しに来ますよ」
「……そうだね。私も一緒に来るから」
俺とユキがそう言うと、奈緒さんは少しはにかむように笑顔を作ってくれる。
結局、奈緒さんの過去の話を聴く事が出来なかった。だけど少しは俺にも心を開いてくれたんだと思う。奈緒さんの表情がそう言ってくれているような気がした。
「はい。それではお二方様、暗くなっておりますので、道中くれぐれもお気をつけくださいませ」
奈緒さんはふかぶかと頭を下げる。それを見て俺も頭を下げた。隣を見てみると、ユキも頭を下げている。
「また来るね。待っててね」

ユキはそう言って顔を上げて、手を振った。そしてゆっくりと、雨の中へと足を進める。
「またねっ」
ユキは何度も振り返り、手を振った。振り返るたびに見える奈緒さんも、胸の前で小さく手を振っていた。
そして俺も手を振った。奈緒さんの姿が確認できる限り、手を振り続けていた。

「楽しかったねっ。またお話しに行こうね」
確かに楽しかった。それに話だけをしに行く価値もあると思う。奈緒さんに俺達の事を詳しく伝えられたし、話せてスッキリしたという感覚もある。
だけど、だからこそ、話してよかったのかと思ってしまう。
「ユキさ、なんでイジメられた事を話してって言ったんだ？　話なら他にもあるだろ」
ユキは俺が話をしている最中に泣いてしまった。それに、奈緒さんも。話すならもっと明るい話題のほうが良かったような気がする。そのほうが誰も泣かずにすんだだろうに。
「ん～……えっとさぁ、私ってお話するの得意じゃなくて……上手に言葉を組み立てられないから、奈緒さんに私がイジメられてた事をちゃんと伝えられてなかったと思ったんだよね」
まぁ、それは一理ある。ユキ自身も言っていた事だ。
「だからタダ君に託したの。でも大正解だったでしょ？　タダ君の話聴いてたら、なんだか泣けてきちゃったもん。奈緒さんだって泣いてたし、ちゃんと伝わってたみたいだね」
「……それを正解って言うのかな」
「正解だよ。奈緒さんはきっと聴いてよかったって思ってるよ」
……そうだと、嬉しい。
「私だって、よかったよ」
「良かったか……」

雨は、どんどんと勢いを増している。傘に当たる雨の音でユキの声を聞き取るのが困難になるほどに、雨は強い。
俺の左肩は、やはり悲惨だ。今日一日の中で今が一番悲惨な状態である。だけど俺は、もう冷たいとは感じていなかった。俺の右を歩くユキの手の暖かさが、そんなものを帳消しにしてくれている。
「……ユキは、ユキって名前と反して暖かいよな」
「む……私の名前は降る雪って書かないよ。私の名前は、有る希望で、有希」

俺のボロアパートが見えてきた。ユキの家に比べたらもの凄く見劣りしてしまうが、やはり俺にはあちこちヒビ割れていて塗装もはげてしまっている外観が落ち着く。
ユキの家を出たのが七時半過ぎ。どこにも行くあてが無いハルは恐らくもう帰ってきているだろう。
「あ、電気ついてるよ。ハルちゃん帰ってきてるんだね」
「違う。部屋の電気はつけっぱなしで出てきたよ」
「あれ？　そうだっけ？　でももう帰ってきてるよね。晩御飯作るの手伝わなきゃ」
ユキはそう言って俺の腕を強く引っ張って駆け出す。その反動で俺は左腕で抱きかかえていた布団を落としそうになる。
「ちょっと待てって、落とす」
「いいからいいから早く」
「良くない……落としたらまた今日も壁で」
俺の言う事は一切聞かず、ユキは俺の腕を強引に引っ張りアパートの階段を駆け上った。やはり二人で勢い良く登ると階段がギシギシと悲鳴を上げている。そしてこの音がいつも俺を不安にさせた。
「いつ聴いても壊れそうな音だよな」
「大丈夫だって。壊れないから」
不思議な事に、今にも壊れそうな音を発しているにも関わらず、一向に壊れる様子は無い。軋みはするがへこんだり変形したりはど

の段もしてはいなかった。壊す気になって飛んだり跳ねたりすれば壊れるのかも知れないが……思った以上に頑丈らしい。
「ほぉら、壊れない」
階段を上りきったユキは得意げに笑ってそう言っていた。別に得意げになる事でもないとは思うが、俺はとりあえず「はは」と笑ってみせる。
「私の勝ちだね」
別に勝負はしていないだろう。

玄関を開けたら、やはりいい匂いがしてくる。どうやらハルは既に帰ってきており、晩飯の準備をしているようだ。
「ハルちゃーんただいまぁ」
ユキは実家から履いてきたブーツを脱ぎながら部屋の中に居るのであろうハルへと話しかけた。しかし女の靴はいちいち腰を下ろさなくては履く事も脱ぐ事も出来ないものが多く、面倒そうだ。
「あ、お帰りなさいユキさん」
「おぉ？　ユキさん本当にこのアパートで住みだしたんですね。驚きです」
……ハルの声に混ざり、もうひとつ女性の声が部屋の奥から聞こえてきた。そしてその声には、かなり聞き覚えがある。
やけに人懐っこい、アイツの声。
「ん？　あれ？」
「……ローだろ」
俺は一足先に靴を脱ぎ、急いで部屋の中へとあがっていく。そしてやはり一番最初に目に付いたものが、毛布に包まってテレビを見ているローの姿だった。
まるでこの部屋の主のような顔をして布団の上をゴロゴロと寝転がっている。そして俺を発見するや否や「こんばんはございます」という意味の分からない挨拶をしてきた。
「こんばんはございますじゃねぇよ。お前何してんだ」

ローは「いやぁ～あはは」と笑いながらあぐらで座り込む。その際に被っていた毛布を取っていたが、ローの服装を見て度肝を抜かれた。
シャツ一枚に短いデニムのパンツをはいていて……それしか着用していなかった。完全に自分の家に居る時の部屋着スタイルだ。
「ハルはんに続いてユキさんまでもがこの部屋に住み始めたって聴きまして、こりゃ行かなきゃなって思ったんです」
「……お前なんて格好してんだよ」
「いや～んやめて～そんな目で見ないでください～恥ずかしいです～」
……そうだった。コイツはこんな奴だった。
コイツは誰に対しても「ですます」口調ではあるのだが、その言葉の内容はいつだって「ですます」口調に似合わない事ばかりを口走っていた。
「……で、もう一回聴くけど、お前何してんだ」
「だから、ハルはんに続いてユキさんまでもがこの部屋に住み始めたって聴きまして」
「違う。そんな格好で」
「いや～ん」
「人の布団勝手に敷いて、何してんだって聞いてるんだ」
俺がそう言い終わると同時にユキも部屋に入ってきて「ローちゃん……なんてカッコ……」と漏らしていた。それが当然の反応だと思う。とてもじゃないが人の家に遊びにきた人間の格好では無い。
「あ、ユキさんこんばんはございます」
ローは左手を上げてユキに向かって挨拶をした。それにつられてユキも「あ、こんばんは」と言って軽く会釈する。この無駄に明るい性格が場を和ませるのか、ローと居るといつの間にか誰もがローのペースに巻き込まれてしまう。
「正也さんもユキさんも、実にお久しぶりで」
「そうだね。最近全然ローちゃんの顔見なかったような気がするよ」

あぁ、そういえばそうだった。それで心配になっていたような気がする。
「いや～実はあっちこっち飛び回ってました。ホント大変でございました」
……また訳の分からない事を言い出しやがった。なんだ飛び回ってたって。
「へぇ～そうなんだ。あっちこっち飛び回って、何してたの？」
「それは企業秘密です」
ローはそう言って人差し指を口元に持っていき「うふふ」と変な笑いを漏らす。そしてユキも「そっか。残念」と明るい声で言ってローの隣へと座り込んだ。
……しかし、この部屋はお世辞にも広いとはいえない。ハルが台所に立ってユキとローがテレビの前を占拠してしまったら、俺が座る場所は窓の近くしか残されていなかった。
「……ユキ、ハルの仕事手伝うんじゃなかったのか？」
「あ、いいよ気にしないで。もう終わるから」
ハルは「あとは煮込むだけ～」と言って大きな鍋に蓋をした。そして「やれやれ」という独り言を漏らして狭いスペースに割り込むようにユキの隣へと座る。
……どうやら、俺は隙間風がビュウビュウ入ってくる窓の近くで体育座りをするしか道は残されていないようだ。
……ひでぇ。
この部屋の間取りはいたってシンプルだ。玄関から部屋に入るとすぐ右手にユニットバスがあり、そこからもう半歩進んだら洗濯機がリビングに侵入するのを邪魔するかのようにおいてある。そこのわずかなスペースに物干しが設置されており、服なんかは最高で五着も干せるか干せないかくらいの間隔しかない。
そして申し訳程度のドアを開けたら六畳ほどのリビング兼台所がある。六畳あれば四人くらい余裕で座れると思うだろうが、そうはいかない。この部屋の二畳分は日常品で溢れかえっているからだ。

タンスが置いてあったりラックが置いてあったり本棚が置いてあったりと、ハッキリ言って邪魔な物が多い。そのそれぞれはそれぞれで整頓されてはいるが、元々一人で住むつもりでの家具配置なので、今はそのそれぞれが邪魔で仕方が無い。

そして今の季節は冬だ。冬に窓際に座ろうと思う人間なんて居ない。つまり開いている席はそこしか残されていなかった。

「ホント久しぶりだよねローちゃん。元気だった？」

「えぇ～そりゃあもう。ですがやっぱりご飯は日本食が一番ですね」

「え？　海外に行ってたの？」

「はい。でも詳しくは企業秘密です」

……なんだよ企業秘密って。何で秘密にする必要があるのか。そもそも企業じゃないだろう。

「あ、そういえば何かお土産とか無いの？」

「魚拓があります」

「……いらないなぁ」

……なんだかな、こいつら。ここは俺の部屋なのに女だけで話し始めやがった。

俺はいい加減腹が減った。二時過ぎくらいに少量の白米と目玉焼きを食べてから他に何も食べていない。鍋から発せられる美味そうな匂いが俺の空腹感を加速させる。

「なぁハル、腹減った」

俺がそう呟いても彼女らの会話は一向に終わる気配を見せなかった。

きっと軽く一時間は話し込むんだろうな……と思い、俺は小さく「ふぅ」とため息をつく。

15．ロー2

耳元で誰かの怒鳴り声が聞こえる。
「兄貴っ！　飯だってば！」
最初のうちはただの雑音に聞こえていたが、聞いていくうちにそれは言葉となり、しばらくすると何を言っているのか理解できるようになった。
ようやく、飯の時間らしい。
「くぁ……今何時だ？」
「今九時前。早く用意してよね」
……くそ。勝手な事言いやがって。俺をこんな所に押し込めて、会話にも参加させなかったくせに何が用意だ。
と、思ってはみたが、やはりハルの言う事には逆らえないらしく、俺は「はいはい」と言いながら立ち上がり、ゴロゴロと寝転がっているローを蹴飛ばし、布団をたたんだ。その際にローが発した「あ～れ～」には一切突っ込みは入れない。とにかく俺は腹が減っていた。
「お腹すきましたね～。早く食べましょう」
「お前食ってくつもりか？」
「なんですか～駄目ですか？　楽しみにして来たんですよ」
……こいつ、もしかして泊まっていくつもりなのか？　というか、姿格好が泊まっていく姿にしか見えない。
この部屋で四人眠るのは本当に無理だ。俺は壁どころか押入れに入って眠らなければならない。
「……もしやと思うが、お前泊まっていくつもりか？」
「え？　そうですよ」
……ふざけんなよなホント。
見方によっては女が三人に対し男が一人というハーレム状態なのかも知れないが、ユキはともかくとしてローとハルは本当に女とは

思えない。平気で顔面に蹴りを食らわせるハルに、平気で人を荷物持ちとしてこき使うローだ。遊ぶ時は二人とも明るくて楽しいのだが、今夜はやかましくて眠れないと思う。
　それに、出来るなら俺はユキの隣で眠りたかった……付き合い始めてまだ日が浅く、今から盛り上がって行くという時期だというのに、こう邪魔モノが増えると、イライラする。さっきまでいい気分だったのに、なんだか台無しだ。
「……帰れよ」
「え～？　ひっどぉいこんな夜中に帰れって言うんですか？　しかも外は雨が降ってるし寒いし電車無いしお金ないし～」
「そうだよ兄貴。いいじゃん一日ぐらい」
　ハルが横槍を入れる。少し怒ったような口調でいる事が、また腹立つ。
　……俺だって、今が特別な状況じゃなかったら怒りはしない。ただ、今は騒がしい事よりも静かに落ち着いているほうが良いというだけだ。
「……いいけど、騒がしくするなよな」
　なんか、それも釈然としない。釈然としないがここで折れておかなければハルとローを敵に回す事になる。
「はぁい～。分かってますよ正也さんの考えてる事くらい。大丈夫ですお邪魔しませんって」
　ローはニコニコと笑いながら俺の肩をポンと叩いて二回ほど首を上下に動かした。なんだかその時の表情がやけにむかつく。いや、それ以前の台詞にもかなり腹が立つ。なんだ「分かってますよ」って。
「ほらほら。そんなふくれっ面してないで、ご飯にしましょ」
　ローがもう一度肩をポンポンと叩いて人差し指を俺の頬に突き刺す。微妙に爪が伸びているようで、痛い。
「……」
　俺はニコニコと笑っているローの指を払いのけて、部屋の隅にし

まっておいたテーブルをひっぱりだし、部屋の中央へと置いた。そして鍋敷きをテーブルの真ん中へと置いて、その場に座り込む。
「むぅ……あれですね正也さん、本当に怒ってるんですね」
「別に。もう諦めただけだ」
俺がそう言うとローは少し困った表情を作って顔を近づけてくる。
「お詫びと言ってはなんですが、いい事教えてあげますよ」
「んだよ……いいよ別に」
「まぁまぁ、いいから耳貸してくださいよ」
そう言ってローは俺の耳へと口をつけて、両手で覆ってそれを隠す。ローは小さく発しているつもりなのだろうが「ふふ」という笑い声がやけに大きく聞こえた。
「ふふ……正也さん、実はね」
「……んだよ」
「死相でてますよ」
小さく、かすれた声だと言うのに、俺の耳にはハッキリと「死相」という単語が届いた。
そしてその言葉が信じられないほどに重く感じ、俺の耳にべったりと張り付く。
「……あ？　なんだって？」
俺がそう言うよりも早くローは俺の耳から口を離し「うふふ」と笑いながら四人分の皿を台所にある引き出しから取り出そうとしていた。
「ちょっと待てよ……お前今なんつった」
「靴下穴空いてますよって」
嘘つけ……と思いつつ靴下を確認してみると、確かに穴が開いていた。しかも両足の親指部分が申し合わせたかのように空いている。
「……」
「格好悪いから脱いでください」
でも、俺が耳にした言葉は全く違うはずだ。
靴下と死相を聴き間違えるはずがない。いかに小さい声で話して

いたとしても、似ても似つかない単語を聞き間違えるとは到底思えない。
絶対にローは『死相』と言った。それも俺に向かって『出ている』と……
たしかローは占いとかおまじないと言ったものを好んでいた。そういった観点で見て俺に『死相』が出ているのだろうか。
「なぁ」
俺は話しかけようとしたのだが、ローもハルも飯をよそったり鍋を移動させたりしてて、もう俺とは会話をしてはくれなかった。
……もし死相が出ている事を俺に告げるなら、もっと詳しく話してくれてもいいだろうに……。

「ただいま～、遅くなっちゃったかな？」
玄関を開ける音が聞こえたかと思ったら、ユキが大きな声で部屋の中へと話しかけてくる。そういえばユキの姿が見えなかった。
「おかえりなさい～。雨まだ強かったですか？」
「うん。ちょっと酷かったかな」
ユキはそう言ってコンビニ袋をテーブルの上に置いた。その中には割り箸が入っている。
確かにこの部屋には三人分の箸しか用意されていなかった。ここで三人以上の人数で飯を食う事を想定していなかったからそれは当然なのだが、起こせば俺が買ってきてやったのに。
「ユキ、なんで俺起こさなかった？　行ってきてやったのに」
「え？　起こしたよぅ～。でもタダ君全然起きなくて。仕方なく私だけで行ったの」
「そうだよ兄貴。何回起こしたと思ってるのよ。全く」
……そんなに起こされていたのか。全然記憶に無い。そこまで熟睡したという実感もないし、どうやら夢も見ていなかったようなのに、変な感じだ。
まるで今朝、ユキに首を絞められた時のように、いつの間にか自

分の手から自分の意識が離れていってしまったかのような、そんな感じ。
「……そうか。悪かったな」
「あ、ううん悪くなんて無いよ」
そう言ってユキは俺の隣へとゆっくり腰を下ろす。少し頭が濡れているので俺は軽くユキの頭の上にある水滴をポンポンと払った。
「ひゅぅひゅぅっ！　いやぁ熱いねぇ～愛だねぇ～」
ローがそう言って冷やかしてくるが、俺は無視した。四人そろったのだから早く飯にしたい。
「あっ……愛って……そんな……」
しかし、ユキは無視できなかったらしい。頬を赤く染めて両手で顔を覆ってしまう。いつものユキの反応だ。
「……いい加減慣れろよ。いつまで同じ反応しているつもりだ」
「で……でもさ……」
指の間から目を出して、俺とローの顔をチラチラと見比べる。外を歩いている時のユキと、部屋の中で友達と話している時のユキは、こうも違うものか。外に居る時は「えへへ～いいでしょ？」とか言いそうなものなのだが。
「でもじゃないだろ」
「……うん……」
ユキは顔を覆っていた手をゆっくりと下げる。そしてまだ火照っている顔を妙に引きつらせ、笑顔を作った。
そして、俺の肩に手を当てて、引き寄せる。
「……えへへ。いいでしょ～熱々なんだ」
「うんうん。いいですいいです。お似合いですよ～」
ローは拍手して俺とユキを祝福してくれた。その賛美がわざとらしく聞こえるが、ユキが思い切って言ってくれた事がもの凄く嬉しい。
俺もユキの肩へと腕を回して、思い切り引き寄せる。そして頭をゴチンとぶつけて笑って見せた。

「俺達結婚します」
「ひゅうひゅう～」
……はは。
なんだか不思議とテンションが上がる。今まで不快に思っていたローがやけに好きになってきた。
「お前ら俺の部屋で飯食ってる場合じゃねぇぞ。彼氏作れ彼氏」
「男紹介して下さい男～」
「バッカお前探せ探せ。同級生にマトモな奴いねぇのか？」
「いねぇでげすよ～うちの学校分厚い眼鏡かけた色白君ばっかじゃねぇでげすか～」
ユキもローもハルも笑っている。やっぱり仲間というものはいいものだ。今までテンションが下がりっぱなしだったが、それはむしろ俺自身が悪かった。明るく話そうと思えば話せるというのに。
奈緒さんと話したあのしんみりとした感じも良かったが、こうやって馬鹿のようにはしゃぐ場も悪くなんか無い。
俺は小さく「悪かったな」と呟いた。でもその声は皆の笑い声にかき消され、誰にも届いては居なかったと思う。

「くぁ……ぅ……あぅ～眠い」
ついにユキが船を漕ぎ出した。頭を前後にコクコクと揺らしている。どうやらハルも眠たいらしく、何度もアクビを漏らしていた。時計を眺めてみるともう深夜一時。俺一人ならもう随分前に眠っている時間だ。それなのに今日は何故か眠たくない。
「え～眠いんですか？　まだ一時ですよぉ～」
俺のほかにもう一人元気な奴がいた。ウノでさっきから連戦連勝を重ねているローが不満そうな声を漏らす。
「私全然眠くないです～もっと遊びましょうよ～」
「……ローさ、アンタ明日学校サボる気でしょ？　出席日数ギリギリなんだから来なさいよね」
「え～？　別にいいじゃんサボったって～。ハルはんも一緒にさぼ

りましょうよ～ぅ」
　ローはなれなれしくハルの体にべったりと身を寄せた。それを嫌うようにハルが「うっとぅしい」と跳ね除ける。
「悪いけど私はもう寝るわ。明日も学校だし、なんだか疲れちゃった」
「ん～……私ももう眠い……ごめんねローちゃん……また今度遊ぼうね」
「ぶ～……」
　ローは不満そうな表情を作るもウノを片付ける。そしてゴロンと寝転がってもう一度「ぶ～」と呟いた。
　布団が二枚並んでいる。左端にはユキ。真ん中にはハル。そして左端にはローが寝転がっていた。ユキとハルは本当に疲れていたらしく、電気も消さず布団に入るなりあっという間に寝息を立てる。二人並んで寝るその姿はやはり仲がよさそうに見える。
　そして当の俺はというと、やはり四人も並んで眠る事なんて出来そうもないので、押入れの中に入ってコートを羽織ながら壁で眠る事になった。一体ここは誰の部屋なんだ？　と思いたくなるが、俺も俺で上機嫌になっており、今日くらいは我慢する事にした。
「電気消すぞ？」
「消して何するつもりですか？」
「寝るつもりだ」
　俺は電気を消して押入れの中へと入っていった。俺の部屋の押入れは二段になっており、下の段には釣り道具やウインタースポーツ用品がゴチャゴチャと詰まっているので、必然的に俺は上の段で眠る事となる。
　と言っても上の段にもダンボールに入っている小物類があって、結局は足を伸ばして眠る事は出来ない。
「ねー。正也さんも眠たいですか？」
「……声でけぇぞ。二人が起きるだろ」
「眠くない？」

ローの中では不完全燃焼だったらしく、しつこく俺に「眠い？眠くない？」と尋ねてきた。どうやらまだ遊びたいらしく手足をバタバタと動かしている音が暗闇の中から聞こえてくる。
「……眠くねぇよ。でも寝ろよ」
「あ？　ホントに～？　じゃあちょっとお話しましょうよ。世間話でもさ」
「……うっせぇな。寝ろって」
「気になりません？　死相とか」
……やっぱりコイツは死相って言ってた。どう考えても聞き間違いはありえないと思っていたが……。
確かに気になる。一体どういうつもりで死相と言ったのか。俺が近いうちに死ぬとでも言うのだろうか。
「気になってるんですよね？　その事についてお話したい事があるんですけど」
ローの声がだんだんといやらしく聞こえてくる。まるで俺が気になっている事が分かりきっているかのように、ニタニタと、ねばつくような声だ。
全く……話したいならスッと話してしまえばいいものを。所詮は占いでの結果だろう。わざわざ俺を焚き付ける理由がどこにあるのか。
「んだよ……早く話せ」
「ここじゃあちょっと。私もそこに行っていいですか？」
「……駄目だ」
「じゃあ外に出ましょうよ。万が一ハルちゃんとユキさんが起きちゃったら困りますし」
何が困ると言うんだ。別に困るような事は無いだろう。
「……めんどくせぇなお前。いいよ入ってこい」
「は～い」
ローはゆっくりと起き上がり、ソロソロと押入れまで近づいてくる。「すいませんちょっと引き上げてください」と言って俺の腕を

掴み、ぐいっと二段目へとのし上がってきた。
「うぁ……意外と狭いですね。つめてもらっていいですか？」
「……なんなんだよお前、本当に面倒くせぇな」
「まぁまぁいいじゃないですか。こーんな可愛い子とこーんな暗くて狭い場所でくっついていられるんですよ」
まぁ、確かに顔はそこそこ可愛い。少し丸みを帯びた輪郭にスッと伸びた鼻にふたえ目蓋で青色の瞳。日本人とカナダ人のハーフだという話だが、本当にハーフらしいシッカリとした顔立ちをしている。
だけど、狭くて暗い場所で二人っきりになれたとしても、決して喜ぶような相手では無い。
「ほぉら、つめてつめて」
「……お前本当にいい加減にしろよ」
「正也さんよく怒りますねぇ。私の事嫌い？」
……嫌いか嫌いじゃないかで問われたら、嫌いでは無い。だけどウザいと感じるのは確かだし、ロー特有のずうずうしさも嫌だ。そこの部分をもう少し控えめにしてくれたら、何も嫌う理由はない。明るいし、一緒に居て楽しいし、なんだかんだで仲間想いな部分もある。
「……別に嫌いじゃない。でもお前のそういう」
「あ？　ホントー？　そうは思えなかったから嬉しいです」
「……」
暗闇の中なのでローの表情は全く見えない。俺は押入れの壁に背中をもたれかけて足を伸ばしているのだが、今ローがどんな格好でいるのかも、おぼろげでしか見えない。一体どういった体制でいるのだろうか。この狭い押入れの中で俺の体にはローの腕しか当たっていない。
「あ、押入れのドア閉めますね。あまり声が漏れるのも悪いですし」
一体どんな体の構造をしているのか、ローは足を上手に使い押入れの扉を半分まで閉めた。それから手を使って押入れのドアを締め

切る。すると途端に筋のような光も差し込まず、完全な闇となった。
「うふふ……暗いですね……」
「……で？」
「セクハラしないでくださいねぇ？」
甘ったるい声に一瞬、本気で殺意が湧いた。
「……殺すぞ」
「だぁかぁらぁ……怒っちゃやぁよっ」
……早く本題を話せばいいものを……コイツはまるで純情な男の子をからかうかのように、この状況を楽しんでいる。
ローと出会ってすぐの頃は確かにローのこういう部分に少し困惑する事はあった。だけどコイツとの付き合いも四年目になるので、コイツのこういった言動や行動が全て虚仮だという事が分かっている。
「……いいから。死相って一体なんなんだよ」
「え？　早速聴いちゃいます？　もう少し心の準備をしてからの方がいいと思いますけど」
「……たかが占いだろ？　気にしなきゃいい事だろうが」
俺がそう言うとローは突然「うふふ」という不気味な笑い声を漏らした。
そして、いつの間にか、ローは、俺の首を、掴んでいる。
気付かなかった……あっと言う間に掴まれたんじゃない、いつの間にか、掴まれていた。
「……え？」
俺が抜けたような声を発すると同時に、ローはもう一度「うふふ」と笑う。やはり、不気味と感じる声だった。
いつも聞いていたローの声ではある。間違いなくローの声ではあるのだが、俺の耳には全く別の……人間とは思えない声となって届いている。
「正也さん、良く聞いてください。これから話す事は占いの結果じゃありません。あまり好きな言葉ではありませんが、運命とでも言

っておきましょうか」
　ローはそう言って俺の首から手を離す。そして恐らくこの暗闇の中、俺の上にまたがるような体制で話をしている。俺の鼻先には、ローの吐息が届いていた。恐らく、顔も接近している。
　本当に、いつの間に……そう考えると、なんだかこの空間が怖くなる。そしてローも、今となっては恐怖の対象だ。
「……なんだよお前……」
「私の事はこの際どうでもいいんです。今は、正也さんの話をするんですから」
　ローはそう言って、伸ばしていた俺の足の上にゆっくりと座った。確かにローの体重は感じるのだが、それが不思議と重いとは感じない。
　そしてゆっくりと、もう一度俺の首へと手を伸ばす。やけに冷たいと感じるローの手が俺の首筋にさわり、次に背中に伸び、最後にはローの横顔が俺の頬にピタッと当たった。ローの体全体が、冷たい。
「やめろ……何考えてんだ」
「このほうが話しやすいじゃないですか……小さい声でもお互い聞き逃したりしないでしょ」
　……。
「何を隠すような事があるんだよ……」
「だから……正也さんって頭はいいかも知れませんが直感とか勘とかって結構鈍いんですね」
　何なんだよコイツは。急に変な事を言い出すし、ちっとも本題を言い出さない。それどころか言葉に嫌な重みが感じられる。一言一言を聞き逃してはいけないかのような、重み。今話している「直感」や「勘」というものがローがこれから話そうとしている事に関係してくるような……。
「まぁ、いいです。とりあえず本題に入りますけど、ちょっと長いですよ。しっかり聴いててくださいね」

「……」

「えっと……あまり詳しい内容は言えないんですけどね、正也さん最近夢見ませんでした？　幼い女の子が出てきて、その子と、まぁエッチな事する夢」

……なんで、知っている？

俺があの夢で覚えている範囲ではエッチな事一歩手前ではあるが、確かに幼い女の子が出てきて、俺はその子と良い感じになり、押し倒されて……と言った内容の夢を見ている。

「それを……なんで知ってるんだ？」

「あ、だってあれ、私が正也さんに見させてる夢ですし」

……俺がローに、見させられている、夢って事か……？

「何を馬鹿な……」

俺は笑って誤魔化そうとしたが、俺の声はどうやら震えてしまっている。別にローの話を信じた訳では無いのだが、心のどこかでローの事を恐れているようだ。

「いえね、これは結構簡単なんですよ。正当な順序を踏んで魔術を使えば普通の人間にだって出来る事なんです。人が人を呪い殺す事すらも出来るんですから、それくらいは、ね」

魔術……？

「ローのは、魔術なのか？」

「はい。魔術です」

まさかこの現代社会にそのような言葉が出てくるとは思ってもみなかった。

俺自身、現代社会にどっぷりと浸かっている訳では無いと思うのだが、それでも今は科学の時代である。霊だって今じゃ科学の力で解明しようっていう時代。それを、魔術だなんて、非現実的すぎる。

「それでですね、私もはじめて正也さんとお会いした時には感じなかったのですが、つい最近正也さんは超低級悪魔と契約してるって気付いたんです」

そうは思っていても俺はローの会話を止めはしない。そして「超低級悪魔……？」などと相槌を打っている。頭の中では否定しているものの、どうやらローの話に興味をそそられているようだ。早く続きが聴きたくて仕方が無いかのように、胸がドキドキとしている。

「えぇ。あとユキさんも契約しています。恐らくサキュバスと呼ばれている悪魔の一種とですね。あ、でも大丈夫です。ユキさんには死相は出ていないので、ご安心を」

ユキという単語が出た瞬間、俺の心臓が激しく鼓動を刻み始めたのがわかった。

俺が悪魔に取り付かれているとかなら冷静に話を聴けたものを、何故そこでユキの名前が出てくるのか……。

「やめろよ……これ以上ユキに不幸を背負わせるなよ……やめてくれよ……」

「ん？　んふふ……話聴いてました？　ユキさんは、死にません。ユキさんの契約はそういったものではありませんから」

「だからっ……死なないにしても、悲しませたりするのはやめろよ……」

少しだけ沈黙が流れる。その間もやはりローの息が俺の鼻先へと何度も当たっていた。

冷たいローの体に触られているというのに、何故だろう、俺の体からはまるで例の夢を見ていた時のように、汗が噴出している。

「あ、あ～。正也さん勘違いしてますよ。別に私がどうこうしてる訳じゃないんです。私はただ契約の存在とその内容を知っているだけなんですよ」

「……内容って？」

「えっとですね……企業秘密と言っておきたい所なんですが、さわりの部分だけお教えしますね。まず知っておいて欲しいのは、正也さんとユキさんの契約者は同一の悪魔だと言う事です。その内容は、運命の人間と会わせて欲しいといったものなんですね。契約の方法や詳しい概要なんかは、まぁ企業秘密としか言いようが無いのです

が、正也さんの場合はさっき私が言った夢の中の幼い女の子。彼女が契約の鍵を握っています」
契約の鍵……？
「正也さんくらいになればあの女の子を見た瞬間にピンときそうなものだと思ってたんですけどねぇ。どうやら勘は鈍いようで」
違う。確かにあの夢を不審に思った事はあるし、起きた後の発作がおかしいと思った事もあった。だけど、それは所詮夢の話だし、あの発作だって喘息を持っている人間であれば、あれが普通の事なのか程度にしか思わないようにしていた。
それに、普段あまりにも眠くて考える事すら出来なかった。俺は物事を考える事は確かに得意だが、その時間さえも与えられなければ、ピンとくるも何も無い。
「あれは私からのささやかなメッセージだったんです。気付いてくれるかなぁって」
「……気付く訳ねぇじゃねぇか。記憶にも無いような少女を見たって、何も思わねぇよ」
「いいえ違います。彼女は貴方の初恋の人ですよ。夢の中では私が演じているのですが、姿形は間違いなく、貴方の初恋の人です」
そんな、馬鹿な。
「彼女はですね、この契約の連鎖における最初の契約者です。彼女が貴方を選び、結び付けて欲しいと願ったんですね。三歳の頃ですから、本当に純粋なもんですよ。子供の頃に描く淡い恋心です。そこを陰湿で超低俗な悪魔であるサキュバスに狙われてしまったんですね。それで、契約により五年後に死んでしまったんです」
……馬鹿な。
「そこで、ですよ。その子に取り付いていた悪魔が次のターゲットとして選んだのが、正也さんという事なんですね。正也さんはその子が居なくなった事によって酷く傷付いて、そこの穴を狙われてしまったんです。だからついつい、願ってしまったんでしょうね。生涯離れる事が無い人が欲しい。って」

……もしかして、それが。
「それがユキか……？」
俺が震える声でそう尋ねるとローは「うふふっ」と酷く綺麗な声で笑ってみせる。
「そう。それがユキさん。正也さんが願った時は詳しい相手を想定して願った訳では無かったのですが、あの子に似た子、という意味で、確かにユキさんはピッタリではありますよね」
……作り話にしては、良く出来ている。
夢を言い当てられているし、過去の話も……今更ながらおぼろげに、思い出してきている。
だからと言って、にわかには信じられない。そもそも、非科学的だ。悪魔なんて、居るはずが無い。
「ユキさんは子供の頃に、やはりサキュバスと契約しているんですね。それはユキさん自身に辛い事が頻繁に起こる、だけどそうすれば正也さんの寿命が五年から十年になる。という契約だったんです」
……嘘だよ……嘘だ……。
「そんな話、信じねぇ」
「でもまぁ～……忘れてたんでしょうね。正也さんが忘れてるのにユキさんが覚えていられるはずが無いとは思っていましたよ。だからね、ユキさんにも夢の中で昔を思い出させるような夢を見せたんです。正也さんと違ってユキさんは勘においては良かったですよ。ハッキリとではありませんが、おぼろげに思い出して、決心しました。まぁそのお陰でユキさんは正也さんが死ぬ前に子種を頂けた……と。実るかどうかは別にして、ね」
「信じねぇって言ってるだろ」
「で、話は変わりますけど、サキュバスやインキュバスっていうのは悪魔の中でも下の下で、すっごく嫌われているんですね。やり方がストレートじゃないっていうか、綺麗じゃないって言うか。だってひとつの契約で二重取りするんですよ？　正也さんの命をいただいて、その上でユキさんの悲しみをもむしり取ってケタケタ笑うん

ですから」
「お前だって、同じ事をしているんだろう」
俺は思わず声を上げた。
自分で聴いてみてビックリするほどの、低く、暗い声だった。
「え？」
「サキュバスインキュバスってのはよ、夢の中に出てきて人の精力を奪ったり女に子供を身籠らせたりする悪魔だろうが……夢の中に入って好き放題荒らしまくりやがって……てめぇは悪魔か？　魔女か？　どっちか知らねぇけど、心を弄んで喜んでるのは、お前だって一緒だろうが」
「あぁ～確かにインキュバスはそんな事もしますね。ですが契約が無ければ奴らに出来る事と言えばその程度の悪ふざけです。それに夢の中で身籠らせたりは出来ません。それは夢じゃなくて実際に犯された場合でしょうね」
それに加えローは「あ、でも正也さんとだったら。っていうのは私もありましたね」と、明るい声で言った。そして腕に力を入れて、俺をきつく抱きしめ、耳を齧って「うふふ」と笑う。
「夢の中で一度言いましたよねぇ……昼の光に夜の闇の深さが分かるものかって」
「うるせぇ黙れひっつくな」
「意味、解ります？」
「黙れ。殺すぞ」
「うふふ……闇は深いですよぉ……初恋の子が感じた闇は、半端じゃないですよぉ……正也さんに耐えれるかなぁ」
……正直ローの言葉は、よく響く。俺の脳に直接語りかけてくるかのように、ローの言葉はいちいち重い。ローの言葉が全て自分の身になり、その言葉ひとつひとつを全て信じさせられるような、不思議な感覚だ。
だから、これがつまり、洗脳なんじゃないかと、思わされる。だから信じられない。信じたくない。こんな奴の言う事を信じてたま

るか。信じてやるものか。そう思う理性がある。これを邪推というならそうなのだろう。だけど今俺は考える事よりも「信じない」と思う事に、必死になっている。
「あ、大切な事を言い忘れる所でした。これから話す事がこの契約における、最もミソの部分なんです」
俺はローの顔があるであろう暗闇を見つめていた。

頭が真っ白になり、何も考えられなくなった。
「うふふ。ビックリしました？」
「黙れ」
「うふふ。え～？　なんで？」
頭が真っ白になっている中、ローの薄気味悪い笑い声。嫌らしいしゃべり方。ローの息。ローの鼓動。ローの体温。ロー自身。それら全てが俺を苛立たせる。
「ほんっと黙れ」
「うふふふっ。あれぇ？　私の声が邪魔で考えられない？　もしかして頭まっしろですか？　じゃ～もう一回教えてあげますよ」
腕がガクガクと震える。いや、足も。
確か前に切れた時も、こんな感じだった。
「ユキさんをぉ～、殺すんですよぉ」
プッツンと、頭の中で理性が切れる音がした。
「黙れよこのクソ野郎……っ！　ふざけた事言ってんじゃねぇ……！　信じねぇっつってんだろうがっ……！」
「別にこの契約は私が作ったものじゃないし、むしろ私は親切で教えてあげたんですけどねぇ。クソ野郎って言われるのは心外です」
俺は思わずローのポニーテールを掴み、自分から引き離す。そこはやはり男と女。力の差は歴然としているらしくローはなす術も無く頭を俺の首から遠ざけた。
「痛いですって……私見た目どおり普通の女の子ですから、そんな事されたら泣いちゃいますよ」

「……もう二度と俺とユキに近づくんじゃねぇぞ。今度この金髪ポニーテールを見つけたら頭からひん剥いてやるからな」
「ぶ～……でもまぁ正也さん童貞じゃ無くなったし、ユキさんも処女じゃ無くなったから夢の中に入るの難しくなっちゃったので、私が二人の間に介入するのはこれっきりにしましょうかね」
ローはそう言うと俺の手をバシッと払いのけて、すかさず俺の首筋をベロリと冷たい舌で舐め、軽く噛む。その舐め方になんだか馴れを感じ、少しだけ俺の体に快楽からくる鳥肌を立てさせた。
「……くっ」
「気持ちいい？　今ここで夢の続き、しませんか？」
「……黙れ」
「あ、別に契約とかそんなケチな事持ちかけませんよ。私は素直に、正也さんと、したいだけ」
「……やっぱりお前は悪魔なんだな」
「いいえ。私は悪魔じゃないですよ。私は永遠の処女、ローラ」
そう言い終わった瞬間の「うふふっ」という声が、やけに俺の耳に残った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7679f/

Ｐｒｏｍｉｓｅ

2010年10月17日03時35分発行